

# 気がついたら祟り神様(純粹)と一緒に呪術の世界にいた話

時長凜祢@二次創作主力垢

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めたら年齢が戻つて、一緒に太歳星君がいて、そんで呪術廻戦の世界で……  
?

なんかよくわからないことになつてるんだけど、太歳星君はどうやら私のことを守つ  
てくれるみたいだから、とりあえずどうやって過ごすべきかを考えよう。

……原作つて、少しくらいいじつてもいいのかな? ほら、死んじやうはずの存在を助  
けるとか……さ。

見切り発車クロスオーバー。水怪クライシスの配布サーヴァントだつた太歳星君と

一緒に呪術廻戦の世界に行つちやう話。現在出てる巻数の単行本はまだ購入していないので、少しづつ進めていきたいと思います。

こちらは、他のサイトでも連載しております。

※作者はFateシリーズはFGOとEXシリーズ、テラシリーズのみしか触れたこと

とがありません。

こつちはIF 学生五条たちと過ごすオルタニキメインな同一主の物語

【<https://syosetu.org/novel/288261/>】

# 目 次

07.	五条悟からの勧誘	———	
08.	記憶のカケラ	———	
09.	いざ、呪術高専へ	———	
10.	はじめまして、夜蛾学長	83	73
11.	はじめまして、伏黒くん。	94	65
12.	はじめまして、先輩方	104	
13.	瑠風の武器	120	
14.	瑠風のお仕事見学 出発編	142	126
151	瑠風のサーヴァント風ステータス		
16.	セイと瑠風の日常は……	31	22
17.	セイと瑠風の何気ない日常	p	a
18.	セイと瑠風の何気ない日常	art. I	———
19.	セイと瑠風の何気ない日常	art. II	———
20.	セイと瑠風の何気ない日常	04.	
21.	セイと瑠風の日常は……	05.	
22.	太歳星君と一緒にいました	02.	
23.	太歳星君と一緒にいました	01.	
24.	サー・ヴァントと過ごす呪術師生活	06.	
25.	06. 思いがけない合流	44	

15.	瑠風のお仕事見学	現場到着編	158	22. 試してみたいこと	——
16.	瑠風のお仕事見学	戦闘開始編	166	23. はーい、その指は回収させても らいまーす！	——
17.	瑠風のお仕事見学	サーヴアン	166	24. 杉沢第三高校を脱出しよう。	239
ト合流編					
18.	瞬間顕現	少女を守る神格の気	174	25. ミツショーンコンプリート……?	230
配					
19.	記憶のカケラ	p a r t II.	184		
20.	物語の始まり		195		
始動、呪いの物語					
21.	“宿儺の指”を求めて	——	220 209		

22. 試してみたいこと ——  
 23. はーい、その指は回収させても  
らいまーす！ ——  
 24. 杉沢第三高校を脱出しよう。  
 25. ミツショーンコンプリート……?  
 230



## サーヴァントと過ごす呪術師生活

### 01. 気がついたら呪術廻戦の世界で太歳星君と一緒にいました

いつものように勉強と日常生活を送るなんの変哲もない毎日を過ごしていたはずなんだけど、目が覚めたらなんか見覚えのある子が私の顔を覗き込んでいた。

「るかるかー！早く起きろ！今日もいっぱいあそぶ約束をしただろ！」

「…………おつふ…………」

美少年と表現できそうな男の子。髪の色はちょっと不思議で、二色の色を持ち合わせている。

それだけなら見た目が珍しい男の子と言うだけなのだが、私の体を揺する手は、明らかに普通の人とは違う。

それは、私がやっていたゲーム、FGOに出てくる一人のサーヴァントだった。

クラスはアルターエゴと呼ばれるクラスで、プリテンダーと呼ばれるクラスに弱く、フォーリナーと呼ばれるクラスに強く、ライダー、キヤスター、アサシンに与えるダメー

ジが大きく、セイバー、アーチャー、ランサーに与えるダメージが小さいと言われていた。

その真名は太歳星君。太歳神とも呼ばれ、木星の鏡像として考えられた仮想の天体である太歳が神格化した存在。

太歳は地中に覗肉などとも呼ばれる蠢く肉の塊と同一視され、災いをもたらすというその肉塊の伝承から、祟り神としての性質も持つ。

太歳神はその歳の十二支の方向に位置する方位神であり、その方角にて行われる行為の吉凶に関わるとされているんだつたかな……。

いや、なんでいるんですかね……。しかもるかるかつて……。ナイトフイーバーはやらないよ？まあ、確かに私の名前は瑠風るかだけさ……。

「あー！やつと起きたのか!?待ちくたびれたぞ!!」

「あー……うん……ごめん。昨日夜更かししていたせいで寝坊した……」

「言われてみれば確かに遅くまで起きてたな。夜は眠らなきやいけないとダメじゃん。」

「しようがないでしょ。遊んでたら夜になつて慌てて宿題やつたんだから。」

……つて、なんで私、平然と目の前にいる祟り神様とお話ししちゃつてるんだろう。なんか知らないけど、ずっと一緒にいたつて認識しちゃつてるし。え？何？これ、何が起こつてんの？

「ふうん。まあ、いいや。るかるか！早く遊ぼ！しばらくは学校がないから一日中遊べるって言つたのははるかるかなんだからな！」

「まあ、学校がお休みだからね。」

混乱しながらも、太歳星君と話をしつつ、自分の置かれてる状況を整理する。  
視界に入る部屋は、どうも私の本来の部屋じやない。机の上にあるのは、適当にほつぱり投げているノートやらなんやら。

とりあえず片付けるフリをして、そこに記されている文字を見てみれば、中学生でやるような内容の数式が書かれている。

ついでに、都合よく投げられている卒業アルバムと、その場にあるカレンダーに目を向けてみると、どうやら私は卒業した後のようだ。つまり、4月から高校一年生……いや、なんですか。

…………年齢が戻つてゐる？高校入学前つてどうなつてるんだこれ？憑依？トリップ？転生？ダメだ、いまいち情報がないから状況の整理ができない。

「るかるか？どうしたんださつきからボーッとして。ワガハイと遊ぶんだろう？」

「ああ、うん。ちょっと机、片付けてからね。」

「もう……!!早くしないと祟っちゃうぞ？」

「祟るのは勘弁しろください。すぐ終わらせるからもうちよつと待つて。」

「…………。」

…………めちゃくちや太歳星君が拗ねていらっしゃる。いや、ほんとごめん。ちょっと状況を知るためにいくつか調べないといけないわけよ。というかここ、マジでどこつすか？

知らないうちに年齢が戻り、更には知つてゐるはずなのに知らない家にいて、目の前にはなぜかFGOの太歳星君がいるというこの状況の説明も欲しいし……どうなつてんのさマジで……。

「…………ん？」

混乱する思考のまま、机の上をせつせかせつせかと片付けていると、何やら一つの冊子が目の前にあつた。よく見ると卒業アルバムと記されており、自分が通つていたと思わしき中学校の名前が記されている。

何かわかるかもという期待と、好奇心……半々の気持ちでそれを開いてみれば、見知つた人物の名前と写真がクラス写真の中にあつた。

「…………は？ 虎杖悠仁…………！？」

そこに記されていた名前と写真は、私が読んでいた少年漫画、呪術廻戦の主人公の名前だつた。

それはつまり、ここは呪術廻戦の世界であり、私は、そこにやつてきてしまつたつて

こと……？ 転移か憑依か転生か知らないけど!!

「るかるか？ どうしたんだ？」

「…………なんでもないよ。」

「ほんとか？」

「うん。なんでもない。」

「んー？ まあ、るかるかがいいならいいけど……」

不思議そうに首を傾げる太歳星君の頭を軽く撫でてみれば、わつはーーと明るい笑顔が返ってきた。

その姿を微笑ましく思いながらも、私は、卒業アルバムの下に敷かれていた寄せ書きへと目を向ける。その中に書かれていた文字は、東京に行つても元気でねという複数の一言。

それにより理解できたのは、私は高校一年生になると同時に、東京の方へと引っ越し、そこの学校へと通うことになるということ。

となると……あの呪術師最強の男である五条悟が彷徨いているホームに足を運ぶことになるわけで、時間軸的に乙骨先輩と里香ちゃん問題には巻き込まれないけど、おそらく憑いてくるであろう太歳星君が私の側に入るわけだ……。

……え？ これ、もしかしなくともヤバくね？ だって、太歳星君よ？ マジもんの祟り神

様よ？性格めちやくぢや純粹で健氣だけど。

…………連れて行けるのか…………？この子…………？

「るかるか？」

「ん？どうかしたかな？」

「それはワガハイのセリフなのだ！今日のるかるか、なんかおかしいぞ！もしかして体調が良くないのか？」

「……いや、体調は問題ないよ。ただ、高校から県外に向かうのかと思つて、ちょっと寂しいと思つていただけ。こつちでできた友達ともお別れしちやうことになるしね。」

「お別れか。確かにそれは寂しいな。でも、大丈夫だぞ！るかるかにはワガハイがついてるし！るかるかはワガハイの大切な友達なのだから、離れるわけないからな！るかるかが寂しいならワガハイがどこまでも一緒に付いて行くのだ！……祟りしか振り撒くことができないワガハイに、側にいていいって言つてくれたるかるかを、放つとくわけにはいかないしなー。るかるかつて、なんか変なやつに付き纏われやすいし。まあ、るかるかを傷つけたり、悲しませたりするような悪い奴は、ワガハイが祟つてやるし、安心してくれてもいいぞ！」

「あはは。ありがとう、太歳星君。」

「どういたしましてなのだ！そんなことよりもかるか！用事が終わつたならワガハイと遊ぶぞ!!」

「……そうだね。何して遊ぼつか。」

「んーとなー……日向ぼっこもしたいし、キャッチボールもしたいし、ゲームも一緒にしたいし、鬼ごっこもしたいな！」

「したいことだらけじやないか。」

「当然じやーん！学校つて奴がある時、るかるかはづつと勉強勉強勉強勉強でワガハイのことちつとも相手してくれなかつたし！しばらくはいっぱい遊べるなら、いっぱいやりたいことやりまくるぞ!!」

「はは……お手柔らかに頼むよ。引つ越しの準備もしないといけないしね。」

苦笑いをこぼしながらそうお願ひすると、太歳星君はわかつたのだと軽い調子で返事をしては、私の手を取つて歩き始めた。

「るかるかの家族にはワガハイは見えないからな。ワガハイと話してるるかるかを変な子みたいに見そだし、こつからは黙つて行くぞ。外に出たら、裏山の方に行つて、そこでいっぱい遊ぼう!!」

「……そうだね。」

短く返事を返せば、太歳星君がぴたりと足を止める。彼の視線の先にはりびんぐがあ

り、この世界の私の親と思わしき女性がテレビを見ながら洗濯物を畳んでいた。

「お母さん。ちょっと出掛けてくるね。」

「わかつたわ。でも、なるべく早く戻つてくるのよ？ いくら春で、暗くなるのがそれなりに遅くなつているとは言え、暗くなつたら危ないんだから。」

「うん。わかつたよ。」

「…………むう…………ワガハイがいるから問題はないのに。」

「…………。」

お母さんの言葉に拗ねたような言葉を紡ぐ太歳星君に苦笑いをこぼしそうになる。お話しないんじやなかつたのキミ…………。まあいいや…………。

私の横に堂々と立つていても関わらず、お母さんに太歳星君の姿は視えていないようだ。

となると、呪術廻戦の世界に自分の立場を当てはめるとしたら、私は呪霊が見える体质で、呪霊からは狙われやすい立場にある。で、隣にいる太歳星君は、いわゆる呪霊のようなもので、どうしてか私に憑いていて感じるつて感じかな。

呪霊と親友つて言うのもなんかおかしい気もするけど、これまでの太歳星君との会話からして、私を狙う呪霊を彼が毎回倒してくれていて、彼がいるから私や私の家族は今のところ安全に暮らすことができている…………のかな？

にしても、太歳星君って呪靈だとなんに分類するんだろう……。特級であることは間違い無いと思うけど。

「わっはー!! やつと外に出れたー!! るかるかの家はでつかいから、黙つてないといけない時間長いから疲れる!!」

「……そうだね。まあ、父さんの実家つて、ちょっと普通の家庭とは違うから仕方ないんだけど。」

「そういえばかるかの父親つてかなり大きい会社だつたな。なんだつけ?えーと

……

「御子神財閥ね。」

「そうそれ! すつぐく大きい会社なんだよなー!」

「うん、正解。」

家の外に出て、人がいないことを確認したのち、太歳星君との会話を再開する。

こつちの家族構成とか、これまでの自分の生活がなんだつたのかはまだ思い出せていいけど、頭に浮かんでくる言葉を紡げば、太歳星君と穏やかに話をすることができるようだ。

……多分、体が覚えていることがいくつもあるから、こんな風に話せるんだろうなとは思う。でも、自分の中での辻褄がいまいち噛み合わないため、早くこの体の記憶も思

い出したいところだ。

ま、今はとりあえず、ずっと遊びたがっていた太歳星君と遊ぶことに集中しようかな。  
まずはこれが大事だろうし、祟り神とはいえ神様との約束を破るわけにもいかないから  
ね。

「暗くなつちやう前に帰らなきやいけないし、早速遊べる場所に向かおうか。」

「わつはー!! 大賛成なのだ!!」

「うわ!? ちょ、いきなり抱えないでよ!!」

「いくいくいくぞー!!」

「話を聞きなさいって!!」

太歳星君が私のことを軽々と持ち上げた瞬間、すごい速さで移動を始める。次々と景色  
は後方へと流れていき、次第に住宅街から離れた山の景色が近づいてきた。  
「山が近づいてきた!!」

「いつたい自宅からどれくらい離れてるんだこれ……。」

何度目かわからない苦笑いをこぼしながらも、太歳星君へと体を任せていれば、彼は  
上機嫌なままに山に足を踏み入れた。

「そうちだるかるか。ワガハイのこと、太歳星君つてちゃんと呼ばなくともいいのだぞ?  
前みたいに、セイつて呼んでも大丈夫なのだ!」

「んえ？いや、でもキミ、神様じやん……」

「そんなの関係なーい!! 今の呼び方だとなんか距離を感じるのだ!! だから、ワガハイのことはセイって呼んでほしい!!」

「……わかつたよ、セイ。」

「うん！ それでよし！ そんじや、山の中に入るぞー！」

「はいはい……」

太歳星君に引っ張られながら、目の前にある山の中へと足を運ぶ。……なんか変な気配があるような気がするけど……まあ、いつか。何かあれば、太歳星君が守ってくれるだろうし。

# 02. セイと瑠風の何気ない日常 part. I

それは、なんとなく見た夢だった。

夢の中の私は、おそらくだけど小学生くらい。なんの変哲もない日常生活を送りながら、夕方の道を歩いていた。

『オイデ……オイデ……イツショニアソボウ?』

『オイデ……オイデ……ソツチジャナイヨ。コツチダヨ。』

『アソボウ……アソボウ……ヒヒ……ヒヒヒヒヒ……!!』

『…………。』

暗くなり始めた黄昏時。辺りに人はいないのに、聞こえてくる声があり、それらはとても不気味なものだった。

小さい私は、表情を歪めながらも、その声を無視して歩いている。それでも不気味な声は止むことがなく、ずっとずっと聞こえている。

『アソボウ……アソボウ……ソツチジャナイヨ……コツチダコツチアソボウヨ』

———うるさい。

『ドコイクノ? ネエネエアソボウヨ。』

うるさい……！」

うるさい煩い五月蠅い煩いウルサイウルサイウルサイ!! 私に話しかけな  
いで!!

『大丈夫か？顔色がすぐ悪いぞ？』

11

不意に聞こえてきたのは子どもの声。驚いて声の方へと目を向けてみると、そこには一人の男の子がいた。不思議な色合いの髪と目をしている、不思議な服を着た男の子だ。

私が反応したことに気づいた彼は、にぱつと無邪気に笑つて見せる。

『はんなまー！ワガハイは太歳星君なのだ！そつちはなんだ？』

御子神  
瑠風。上

『ふむふむ、なるほどなあ……。じやあるかるかつて呼ば！なあなあるかるか。どうし  
たんだ？顔色が真っ青だぞ？』

『……変な声が……聞こえて……怖くて……』

『変な声？あ、そつか！ここら辺にいる奴らがるかるかに悪さしてゐるのか！それならワ

ガハイに任せるのだ！こんな奴ら、こうしちやえればいいからな!!』

その瞬間、一瞬の気分の悪さが訪れたかと思えば、不気味な声が聞こえなくなつた。その中で見えたのは、異形としか思えない大きな手。不思議で不気味な霧。そして、モヤのようなものと、それが霧散する瞬間。

それだけで私は、目の前にいる男の子に助けられたのだと理解した。

『うん、これでよし！もうかるかに悪さをする奴はここにはいないぞ！』

『…………。』

『るかるか？どうしたのだ？』

再びにぱつと無邪気に笑い、私の方を振り返った男の子。啞然とその子を眺めていると、彼は不思議そうな表情をして、首を傾げた。

『…………どうして……助けてくれたの？』

口から出たのは一つの疑問。普通は感謝を述べるべきなのに、最初の一言はこれだつた。

『んー？るかるかがすごく嫌そだつたから助けたんじやん。だつて顔が真つ青だつたし。あとはそだなー……ワガハイと話してくれる人がどこにもいなかつたから、るかるかがワガハイと話してくれたのがすごく嬉しかつたのだ！なああるかるか！るかるかが嫌だなつて思うものは、全部ワガハイがなんとかするし、るかるかが傷つくよう

なことや、悲しむことから助けてやるから、ワガハイと友達になつてほしいのだ!』

『友達……?』

『うん!一緒に遊んだり、日向ぼっこしたり、いろんなものを作つたり!あとは、こうやつてお話ししたりするんだ。前はな?ワガハイと仲良くしてくれる人がいっぱいいたし、不思議な場所で、たくさんの恩人がいたりして、いっぱい遊んだり、話したり、物を作つたりすることがあつたんだけど、今はそんな奴らがいなくてな。ずーっと……一人ぼっちで……ちょっと……うーん……すごく……かな?寂しかつた。だからな。こうやつて一緒に過ごせそうな奴を探していたのだ。だから、るかるかがワガハイの声に応えてくれたことが嬉しくて。まあ、断られてもついていくけどな。だつてるかるかの側つて落ち着くし!』

すると、男の子は笑顔で私の質問に答えてくれた。仲良く話せる人がいないことが寂しかつたから、会話をすることができる存在が欲しかつたのだと。だから、私と友達になりたかつたのだと。

私を変な奴から守る代わりに、一緒に遊んだり、話したり、作つたり、日向ぼっこなどをして過ごしたいのだと。

それを聞いた私は、男の子に笑顔を返していた。その言葉を了承するように、小さく頷いていた。

私の承諾を確認した男の子は、輝かんばかりの笑顔を浮かべた。同時に、私の方に飛びつくように抱き着き、ぎゅうぎゅう強く抱きしめてきた。

『わはー!! ありがとう、るかるか! 今からワガハイとるかるかは友達なのだー!!』  
『わっぶ!? ちよ、いきなり抱き付かないでよびっくりしたなあ!!』

『あ、ごめん。でもでも嬉しいのだ! あ、約束通り、るかるかを怖がらせたりする奴はワガハイが祟つてやるし、プチッと潰してやるから安心していいぞ?』  
『たた……!?

『うん! だつてワガハイ、そういうの得意だし! もちろん、るかるかが嫌いな奴もワガハイが追い返してやるからな!』

『え……大丈夫なの……それ……?』

『んー……わかんない! でもでも、るかるかが悲しむことはなくなるぞー! そんじや、約束だからワガハイと遊ぶのだ!』

『えつと……わかつた……?』

『ワガハイのことは好きに呼んでもいいからな! 短くしてもいいし、コンつて呼んでも

いいからな!』

『……じゃあ……セイくん……とか?』

『セイ! うんうん、それで行こう!』

『わかつた……。えつと……じやあ、これからよろしくね……？セイくん。』

『うん！ よろしくな！』

『えつと……遊ぶんだよね？遅くならない範囲でならいいよ……』

『うん?』

『……暗くなつたら、悪い人来ちやうから。』

【わかつた！それじゃ、いくいくいくぞー！】

『わわ!? 急に走らないで!?

大きな手で私の手を掴み走り出す男の子……太歳星君。それに引っ張られるようにして、私も一緒に走り出す。

それが嬉しかつた私は、自然と表情に笑顔を浮かべていた。

その日は暗くなる少し手前辺りまで太歳星君と遊んでいた。それで、自宅の方へと帰宅した瞬間、すごい形相のお母さんに怒られちゃって、私は固まつてしまっていた気がする。

?? .  
? .  
\* ? .  
? .  
? .  
?? .  
?? .  
? .  
\* ? .  
? .  
? .  
?? .  
? .  
\* ? .  
? .  
? .  
?? .

。

「…………。」

不意に意識が浮上する。ゆつくりと瞼を開けてみれば、見慣れた天井が視界に入り、体には布団と、それとはまた別のぬくもりが巻き付いている。

「…………セイ？」

「ん…………あ…………るかるか。はんなま。」

「…………うん、はんなま。」

「…………？ あ…………こつちのワガハイになつてた。ごめん…………。こつちのワガハイが側にいると怖いし嫌だよね…………。」

「いや、別に嫌じやないんだけど…………としておつきく…………？」

「…………わかんない。多分、無意識のうちにこうなつたんだと思う。」

「そつか。無意識か。」

「うん、ごめん…………。」

「謝らなくていいよ。確かに、そつちは本来の神様としての本質が強いセイだけど、例え、大きくて小さくても、セイであることには変わらないし、嫌つたり、怖がつたりしないよ。」

「……本当に？」

「うん。どつちのセイも大切な友達だからね。」

「そつか。よかつた。るかるかに嫌われなくて。」

「逆に嫌う理由がないって……」

苦笑いをこぼしながら、私を抱き枕にしている太歳星君の頭を優しく撫でる。すると、太歳星君は少しだけ気持ちよさそうに目を閉じた。

同時にその体は光に包まれ、大きな体から小さな体へと変化する。

「あ、戻った。」

「本当だね。」

「まあいいや！ はんなまー！ るかるか。今日もいっぱい遊ぶぞ！」

「そうだね。」

笑顔を見せながら今日の予定を口にする太歳星君に笑顔を返しながら、一緒に遊ぼうという言葉に頷けば、彼は上機嫌になる。

彼が嬉しそうにしているところつちも嬉しくなるのは、この子がかけがえのない親友だからだろうか。

そんなことを思いながら、ベッドから起き上がる。

今いる場所は東京。こつちの私の生まれ故郷である宮城県から、一週間前に前世の故

郷であるここへとやつてきた。

太歳星君ももちろん一緒だ。最近わかつたことだけど、彼はどうやら私に憑いていたようだ。さつき見た夢でわかつたけど、彼と私は、私を守る代わりに一緒に遊んだり、日向ぼっこしたり、話したり、物を作つたりしてほしいという約束を交わした神と人。

祟り神であろうとも、確かな神性を持ち合わせている存在と約束を交わし、こうするからこうしてほしいといった釣り合つた契約を結んでいるため、太歳星君が神格を持たない私に憑くのは道理である。

だからか太歳星君は、私が行く場所に憑いてくる。私を守るという約束を果たすために。

「今日は何して遊ぶの？」

「んー……鬼ごっこ……はできないよな。だつてここ、人多すぎるし、るかるかはワガハイが見えるけど、ワガハイが見えない奴の方が多いのだ。何がいいかなあ……」「……ゆつくり考えようか。時間はたっぷりあるしね。」

「そうだな！ るかるかは今からご飯か？」

「そうだね。顔を洗つて、パジャマを着替えて、朝ごはんを食べる。」

「じゃあ、るかるかがご飯を食べ終わるまでに決めておくな！」

「わかった。」

にここにこと笑いながら、今日やることを考えている太歳星君の姿に小さく笑いながらも、私は私のやることをこなしていく。

東京に来ちゃつた以上、間違いなく呪術界最強の顔面宝具お兄さんと出会ってしまう可能性が高くなつちやつたけど、できれば会わないようにしたいな……。  
…………無理かな…………。

# 03. セイと瑠風の何気ない日 part. II

「わはー！ 街つて本当に大きいなあ！！」

「あまり逸れたらダメだよ、セイ。」

「りよつか!! あ、るかるか！ 今からどこに行くのだ？」

「そうだね……せつかくだし、ショッピングモールあたりかな……」

「ショッピングモール？」

「いろんなお店が入ってる大きな建物だよ。」

朝食を食べ、身支度を済ませ、呪術廻戦の世界にはどんな場所があるのかを見て回るために外に出る。

私と話ができる太歳星君は、自身の姿を一時的に現界させ、私の横にくつついていたり。

にしてもびっくりしたな。まさか、太歳星君がちゃっかり肉体を得て、人間に溶け込めるなんて思わなかつたよ。

どうしたのそれって聞いても、太歳星君自身はわかんないって言うから、仕掛けまではわからないけどさ。

「いろんなお店かー！ 楽しみなのだ！」

「初めて行くんだつけ？」

「うん！ ワガハイ、初めてなのだ！ どんなお店があるんだ？」

「服を売ってる場所だつたり、靴を売ってる場所だつたり、日用品を売ってる場所出たりと、沢山のお店があるよ。ご飯を食べる場所もあるし、ゲームセンターもあるかな。」

「ゲームセンター！ それ聞いたことある！ いっぱい遊べる場所だ！」

「そうだね。時間があつたら行つてみようか。」

「りよつか！」

にこにこと明るい笑顔を見せながら、私の横を歩く太歳星君。彼の服装は、とりあえず自分の小さい時のものを組み合わせている。

小さい時から、私はスカートよりズボン派の子どもで、服の柄とかもシンプルなものばかりが主力だつたから、太歳星君が着ても問題はなかつた。

パークーを気にしていたけど……ラムダたちの記憶が曖昧ながらも片隅にあるからだろうか。

まあ、それを聞いても、太歳星君自体はよくわかつてない状態みたいだから、何とも言えないけど。

「るかるかは、ショッピングモールに何しに行くんだ？」

「うん？ そうだね。服を見に行こうかなって。去年の服はまだ着ることができるけど、何回も洗つて干してを繰り返していると、やつぱり生地の色が褪せたりしちゃうからね。まあ、お小遣いはそこまで沢山あるわけじゃないから、買うものは考えないとだけど。」

「そつかー。でも、るかるかは綺麗だから、きつといろんな服が似合うと思うのだ。」「そう？」

「うん！ ワガハイ、沢山の綺麗なものを見たことがあるけど、るかるかも負けてないぞ！」

「へえ……それは嬉しいな。」

とはいっ、私はキミの記憶の片隅にある一番綺麗なものには負けてると思うけどな……なんて言葉は飲み込んで、褒めてくれた太歳星君の言葉に、嬉しいと一言返す。

太歳星君は無著な笑顔を見せながら、私の手をぎゅっと握ってきた。

「るかるかはどんな服を買うんだ？」

「そうだね……基本的に動きやすい格好をするけど、もうすぐ高校生だし、スカートやワンピースにも挑戦してみようかな。」

「スカート？ ワンピース？」

「スカートは、私が学校に行く時に履いていたヒラヒラしたやつだよ。まあ、あんまり短

いのは履きたくないから長さはあれより長めのものを選ぶけど。ワンピースって言うのは……ほら、あそこのお姉さんが来ているような服だよ。」

「そうなのか。じゃあ、ワガハイも一緒に探すのだ！」

「探してくれるの？」

「うん！ るかるかに似合いそうなやつをいーっぱい！」

「あはは、ありがとう。じゃあ、ショッピングモールに着いたらお願ひしようかな。」

「任せろ！ 絶対るかるかに似合うにを探すからな！」

……周りから微笑ましげな目を向けられているのは気のせいじゃないと思う。

何というか、仲のいいご姉弟ねつて感じの視線がめちゃくちゃ刺さっている。

まあ、確かに今の太歳星君と私の姿は、姉に喜んでもらおうと思つて頑張ろうとしている弟と、そんな弟を見守つている姉にしか見えないだろうし、わからなくもない。

実際のところは、祟り神な少年と、それに憑かれているけど受け入れて契約している人間なんだけれどね。

太歳星君がいなかつたら、ずっと呪霊に付き纏われていただろうから、もはや彼がないとしんどいだけだし、すごく助かつてゐるから問題ないけど。

「さてと、ずっと歩いていたら時間がかなりかかるし、電車にでも乗ろうか。」「電車！」

「ちゃんと静かにするんだよ。」

「りょつかー！」

そんなことを考えながら、最寄りの駅へと足を運ぶ。太歳星君は見た感じ小学生くらいだからな……子ども料金と、中学を卒業した私は、もう子ども料金では乗れないから大人料金で……。

よし、切符は買った。

「はい。こっちがセイのね。」

「んー？」

「電車に乗るには、お金を払って切符を買わないと乗れないからね。それは、セイの切符だよ。」

「ワガハイの切符！」

「そ。で、これを改札……この機械に通して……これで電車に乗るためのホームに向かえる。やつてごらん。」

「りょつかー！」

先に切符を改札に通してホームに向かうための通路へと向かって見せれば、太歳星君も私の真似をして切符を改札へと通す。

びよびよと鳥の鳴き声のような音を聴いて、一瞬彼は目を丸くしたが、すぐに笑顔を

見せて駅の構内へと足を運んだ。

「切符は取り忘れたらダメだよ。」

「おとと。」

念のために切符を改札から取ることを忘れたらダメだと伝えれば、すぐに太歳星君は切符を手に取り、私の方へと歩いてきた。切符は落とさないようにと告げれば、太歳星君はすぐにそれをズボンのポケットに収める。

よくできましたと頭を撫でれば、無邪気な笑顔が返ってきた。うん。癒される。

「コンビニで飲み物買うけど、セイは何か飲む?」

「ワガハイのも買ってくれるのか?」

「当たり前でしょ。セイは一緒に出かけてる大切な子なんだから。自分で飲み物買うわけないじやん。」

「わっはー! ありがとう、るかるか!」

本当、祟り神と言われている子のはずなのに、純粋無垢で可愛らしいよなこの子と、改めて認識しつつ構内にあるコンビニへと足を運べば、太歳星君は飲み物が並べられている冷蔵庫の方へと向かい、ジッと飲み物を眺め始める。

私は買うものを既に決めていたため、冷蔵庫から目的のカフェオレを取り、太歳星君を待つ。

程なくして太歳星君は、ミツクスオレを手に取り、私の方に目を向けてきた。

「ワガハイ、これがいいのだ！」

「オッケー。せつかくだし、何かお菓子も一つ買おうか。何がいい？」

「んつと……あ、これがいいぞ！」

「チョコレートのファミリーパック？」

「うん！これならかるかと一緒に食べることができるじゃん。ワガハイだけで吃るのはつまんないのだ。」

「そつか。確かにそうだね。じやあ、これにしようか。」

「わはー！やつたのだ！」

……本当に祟り神なのかとツツコミたくなるくらい優しいなこの子。私が守らねば。いや、私なんかの力が必要ないくらい強いけどさ。なんかそんな風に思つてしまふ。なんだろう……庇護欲を刺激されるというか、母性が芽生えると言うか……。

……何言つてんだろ。

思考を変な方向へと飛ばしながらも、手についていたカフェオレとミツクスオレとファミリーパックのチョコレートの購入を終わらせて、チョコのみをバッグに收め、ミツクスオレを太歳星君へと渡す。

すると太歳星君はすぐにそれを受け取り、蓋を開けて飲み始める。なんか、ホワホワ

と花……じゃなくてにこにコンちゃんがふわふわ飛んでもるよう見えてしまつた。

実際にコンちゃんをそこら辺に撒いてないよねと確認しながらも、ジュースを飲む太歳星君の頭を撫でる。

「美味しい？」

「うん！」

「それはよかつた。」

微笑ましく思いながら、私もカフェオレを口にする。うん。美味しい。あ、チョコレートの袋は開けてと……。

「ほら。」

「チョコレート！」

「うん。食べようか。」

「食べるのだ。」

「じゃあ……はい。」

チョコレートの個包装を外して太歳星君の口元にチョコレートを持つていく。すると彼は素直に口を開け、もぐもぐ待機姿になる。その姿にほっこりしながらもチョコレートを口の中へとチョコレートを入れてあげれば、笑顔でチョコレートを食べ始めた。

そんじゃ私も、と個包装されたチヨコレートを取り、包装紙を外して口の中へ。  
ん……ビターだこれ。ちょっと苦い。まあいいや。

「ショッピングモールにはどれくらいで着くんだ？」

「そうだね……大体15分くらいかな。」

「15分。」

「そ。それなりに早めに家を出たし、夕方まで過ごしても結構ゆっくりできるかな。」

「やつたー！」

「暗くなる前には帰るから、遅くまではいれないけど、十分楽しめる時間はあると思う  
し、いろんな店を見て回ろうね。」

「うん！」

ジユースをある程度飲んで蓋を閉めた太歳星君。片手が空いている様子を見た私は、  
彼に手を差し伸べた。

すると太歳星君はすぐに私の手に自身の手を重ねてぎゅっと握りしめてきた。

同時に駅に入つてくる列車。ちょうど春休みなだけあり、結構人は乗っているけど、  
二人で座れる席は十分ある。

さて、それじやあショッピングモールまで、座つて一休みしながら向かいますかね。

# 04. セイと瑠風の何気ない日常 part. III

「うーん……これが良いかなあ……こつちも似合いそうだなあ……あ！こつちも良いかも！」

ショッピングモールにたどり着き、早速足を運んだブティック。こつちの世界にも向こうと同じように、安くて尚且つ種類豊富の店があつたことに少しだけ驚きながらも、お財布に優しいと思い入つてみたら、太歳星君はすぐにレディースの服が並んでるブースの方へと向かつていった。

すぐにその後を追い、あまり離れすぎないようにと注意しようとしたところ、そこでは太歳星君があれも良いしこれも良いといろんな服を物色していた。

「セイ。一人で離れすぎないで。」

「りよつか！ なああるかるか！ これどかるかるかに似合いそうなのだ！」

「ん？ どれ？」

「これだぞ！ るかるかはスカートって言うヒラヒラした奴も買おうとしていたし、この服なら合うかもしれないのだ。」

「本当？ ジやあ、あとで試着してみようかな。」

「見たい見たい！ そう言えばるかるか。スカートつて色々あるみたいだぞ？ どんなスカートを選ぶんだ？」

「そうだね……私はあんまり短すぎるスカートは得意じゃないから、こんな感じの長いスカートを探すつもりだよ。」

「なるほどなー。じゃあじやあ、こんな服はどうだ？ るかるかにきつと似合うと思うのだ！」

「……へえ……確かに、こんな感じの服装は割と好きだよ。」

「やつたー！ じやあ、スカートはこんな感じがいいと思う！」

「……ちょっと色が可愛らしすぎないかな？」

「そうでもないと思うぞ？ るかるかななら絶対に似合う！」

「そうかな……。」

「うん！ 試着してほしいぞ。」

「じゃあ、これとこれを試しに着てみようかな。」

「わはー！ 絶対可愛いのだ！」

側から見たらどう思われているのだろうか。

明らかに歳の離れた二人組。女は小学生くらいの少年にあれを着てこれを着てと服を手渡され、少年からは絶対に可愛いだのなんだのと褒められている。

……かなりシユールな光景にしか見えなさそうだと苦笑いが出そうになつた。

でも、太歳星君が服を選んではどうだと聞いてくる姿は可愛らしくもある。何より楽しそうにしているから、考え過ぎなくてもいいかもしない。

「るかるか。試着はまだか？」

「もうちよつと服を見てからね。もしかしたら、他にも着たくなるような服があるかもしないし。」

「りよつか！」

「こつちにおいて。逸れないように手を繋ごう。」

「うん！」

太歳星君と手を繋ぎ、ブティックの中をうろうろする。すると、パジャマなどが売られているコーナーにやつてきた。

新しいパジャマか……少しだけそこを見て回りながら、どんなパジャマが売られているのか確かめていると、明るい声でるかるかと名前を呼ばれた。

声の方へと目を向けてみれば、そこにはペンギンパーカーを手にしている太歳星君の姿が……。うん……なるほど？

「なあなあるかるか！これ買つてほしいのだ！」

「……ちよつと値段を拝見。」

値札に目を向けてみれば、意外にもお手頃価格だつた。ふむ……ラムダたちとの記憶は曖昧だけど、頭の片隅にはやっぱり存在しているんだな……。

サイズはキッズと通常のサイズがある。……太歳星君が手にしているのは通常サイズ……うーん……まあ、これなら大きくなつても着れそうだな……。

「これくらいなら買えるね。いいよ。」

「わっはー！やつたのだ！」

買うことを承諾すれば、太歳星君は笑顔で喜びを表現する。微笑ましく思いながら、優しく頭を撫でれば、気持ちよさそうな表情を見せた。

「じゃあ、そろそろセイが選んでくれた服を試着しに行こうかな。」

「行こ行こ！」

楽しそうな太歳星君。呪いの神であるこの子を表立つて連れ歩いても大丈夫なのかと少しばかり心配していたけど、連れ歩いて正解だつたかもしけないな。

まあ、あの最強の男に出くわさなければ基本的には平穏な生活を送ることができるのだから、ビクビクと気にしている必要はなかつたのかもしれない。

……だからと言つて、警戒を緩めるつもりは全く持つてないのだけど。

「……意外と似合つてる…………かな…………？」

「意外とじやないぞ。るかるかによく似合つてているのだ。」

「そう?」

「うん! ワガハイは嘘をついてないぞー!」

「……そつか。人から見てそう見えているのなら、きっと似合つてるんだろうね。」

そんなことを思いながら、試着している服の値段に目を向ける。うん。持ち手の金額で十分買うことができるね。

お年玉とお小遣いを一部貯金に回して過ごしていた分、懐はなかなかに温かいのである。

「じゃあ、今日はこれくらいかな。」

「買うのか?」

「うん。選んでくれてありがとうね、セイ。」

「どういたしまして!」

籠の中に入っている服をレジの方へと持つていき、さつさとお会計を済ませる。

レジに立っていた店員さんは、なんだかすごく微笑ましげって表情をしていたけど、もしかして、私たちのやり取りを見ていたのだろうか……。

だとしたらちよつと恥ずかしいんだけど……うん、気にしない方がいいかな……?

???. . \*?. . ??. . \*?. . ??. . \*?. . ??. . \*?. . ??. . :

。

「るかるかー！ワガハイこれが食べたいぞ！」

「アイスクリーム？」

「うん！」

「わかつた。どの味が食べたいの？」

「んつとねえ……これもいいし……こつちも捨て難いのだ……。」

「……一応、二つ合わせることはできるよ？」

「え？いいの!?」

「うん。」

「わはー！！じやあ二つ合わせるー！！入れ物はカツプにするのだ！」

「？コーンじやなくていいの？」

「うん！だつてこつちだと溶けちゃつた時大変そうだし！」

「まあ、確かに場合によつてはベタベタになつちやうね。」

「だからカツプに入れてもらうー！」

「ん。了解。」

時は過ぎてフードコート。買おうとしていたものは買い終えたため、お腹を満たすた

めにやつてきた。

まあ、ちよつといろんな店を物色していたから、お昼を過ぎちゃつたけど、楽しかつたからよしとしよう。

そうそう……この世界にはFGOは存在していないみたいだつた。ゲームセンターを抜けて、フードコートへとやつて来たけど、アーケードのFGOがなかつたんだよね。それで、もしかしてと思つてスマホを開き、アプリの方を確かめてみると、FGOの検索結果は存在しなかつた。

ネット内に話題も全くなく、呪術廻戦の世界には、FGOは存在しないと言う結論が出たのである。

まあ、もしFGOが存在していたら、太歳星君がこうやつて存在すること自体、あり得なかつただろうからよかつた……のか？

「はい。セイのアイスクリーム。」

「わはー！ ありがとうなのだ！」

「こつちこそ、今日は買い物に付き合わせちゃつてごめんね。」

「んー？ 別に気にしてないぞ？ るかるかとお出かけできて楽しかつたからな。なあなあ、まだショッピングモールにはいるのか？」

「うん。もうしばらくいるつもりだけど。」

「じゃあじやあ、ワガハイ、ゲームセンターに行つてみたいのだ！あと、本屋さんにも！」  
 「ん。わかった。じゃあ、残りの時間はそれらに行こうか。」

「やつたー！」

喜ぶ太歳星君にほっこりしながら、自分のアイスクリームも受け取る。さてと、席に座つてゆつくりとアイスクリームを食べるとしますかね。

??. · . \*? · . ? ?? · . \*? · . ? ?? · . \*? · . ? ?? · :

「…………うーん。まさか、休憩がてら甘いものを思つてちょっと足を運んだショッピングモール内で、あんな子らを見つけることになるとは思わなかつたね。」

二人の少年少女がフードコートに座つてアイスクリームを食べる中、そんな二人の姿を遠巻きに眺めている者が一人いた。

それは銀髪の青年だつた。目元は目隠しで覆われており、瞳は表に露出していない。  
 しかし、その青年の見た目がいいことは一目瞭然で、買い物に来ていた女性たちは色めき立つ。

だが、女性が賑やかしているにもかかわらず、彼が目にした二人組は気にしていない

のか、先程購入していたアイスクリームを口にしている。

「あれってどう見ても呪霊……いや、呪霊？ どう見ても呪霊レベルで収まるような可愛らしいもんじやないでしょ……。」

独り言を呟きながら、青年は少女のすぐ隣でにこにこと無邪気に笑いながら、アイスクリームを食べている少年へと目を向ける。

側から見たら仲睦まじい姉弟にしか見えないが、彼の目には、少年がとんでもない存在であることが視えていた。

自分たちが回収している特級呪物である指……その本来の保有者たる呪いの王、両面宿儺。

無邪気な笑顔を見せながら、少女と共に過ごしている少年からは、それと同じか、下手したらそれ以上の呪力が揺らめいており、暴走でもしたらどうなるかわかつたもんじゃないと考える。

「明らかに特級……だよなあ……。しかも特級の中でももつとやばいタイプのそれ。なんでこんなのがファミリーが集うショッピングモールなんかにいるの。」

青年は、自身の表情が引き攣っていることを嫌でも理解する。これまでいくつもの呪いを祓ってきた彼であっても、背筋が凍りそうなほどの気配だった。

次に青年は、少年と一緒にアイスクリームを食べている少女へと目を向ける。

無邪気に笑いながら、一緒にアイスクリームを食べている恐ろしい存在のことを、彼女は怖がっている様子がない。

むしろ彼女は少年を受け入れており、彼との間に確かな繋がり……契約とも取れる結びつきを得ているようだつた。

つまり、あの少女は共に過ごしている存在を受け入れており、取り憑くことを許していると言うわけだ。

「……なんで平氣でいられるのかめちゃくちや疑問に残るけど、仲がいいってことだけはわかるね、うん。」

雰囲気からして、多分、少年の姿を持つ呪いは、少女に危害が及ばない限り何かすることはないと考えることができる。

では、少女に危害が及んだり、少女が害されたと感じるようなことが発生したら?

間違いなくその瞬間大規模な被害が発生し、これまでとは比にならないほどの死者が辺りに転がるだろう。

…………あれ、絶対呪霊どころじゃない。祟り神とかそんな分類にあたるよね。なんのかまでは詳しく調べてみなきやわかんないけど……あ、いや、でも祟り神つて絞れたりする?となると、正体はすぐにわかるかな。まあ、眼で視てもいいんだけど、視ても大丈夫な奴?なんかダメな気がするんだけど。

思考をぐるぐると回しながら、ジツと少年と少女を見つめる。すると、不意に少年の方と自身の視線が絡み合つた。

その瞬間、青年は背筋を駆け上がるような寒気と、あまり感じたことがない恐怖にも似た感情に一瞬取り憑かれる。

確かに絡み合つた少年の瞳。それが、不気味な色を持ち、間違いなく自身を睨みつけていたのだ。

じゃん!!

慌てて顔を背け、少年の視界に入らない場所へと移動する。こんな感情に襲われることなんて滅多にないと腕をさすりながら、人混みに紛れてその場を後にする。

その際、もう一度確認するように少年と少女へと目を向ける。少年はすでに視線を青年から、隣にいる少女の方に向けており、先程の氷水に放り込まれたかのような寒気を感じるような姿ではなく、こちらに目を向ける前の無邪気な少年のような雰囲気に戻っていた。

「……はは。流石にあれは僕でも骨が折れそうだね。ていうか、あれって倒せるの? 封印までしか行き着かないとかならないよね?」

自身の力の強さには自信がある。しかし、これまでのようく、周りに被害を出すこと

なく祓うことは不可能なんじやないかと思えてしまうほどの呪霊……いや、呪い神と言つてもおかしくなさそうな存在。

もし、あの力を少年の隣にいた少女が行使するようなことになれば、どれだけの悲劇が発生するのだろうかと、割り出せない答えに頭を悩ませながらも、青年……五条 悟は、まずはどうするべきかを思案する。

…………あの子、こつち側の管轄にするべきかもしれないな。いつ、誰を呪うかわからないし、無意識に力を暴走させてしまう可能性も否めない。年寄りたちには見つからないようにしないといけないかな。見つかった瞬間、あの子は間違いなく死刑扱いになるだろうし、それに少年の方がキレたりなんかしたら、間違いなく上層部は全員アウトになつて消える。まあ、正直あいつらの考えには嫌気が差してるから庇い立てするつもりはないけど、呪いの種類によつては一族全員が……つて可能性もかなりある。流石に、上層部みたいな連中以外の一般人……上層部の親戚……遠い親戚もか……。そういう言つた存在までも捕捉するレベルの呪いとかになつたらまずいし。とりあえず、まずはあの子らにどうやつて接触するべきかを考えないとなう……。

あの子に接触した瞬間、祟られたりしないよね？なんてことを考えながらも、五条はショッピングモールを後にする。

敵対することなく穩便に終わらせる方法は……と思考回路を動かしながら、ひとまず

高専に戻り、そのあと時間を見て二人組の様子を観察することを決めるのだつた。

そんなことが、アイスクリームを食べている間に起こつていいとは思つていかない少女、瑠風は、祟り神の少年、太歳星君と一緒に、時間いつぱいショッピングモールを満喫するのだつた。

## 05. セイと瑠風の日常は……

あれから時間は経ち、夕暮れ近く。

私と太歳星君は、再び電車を利用して、帰宅路へとついていた。

「わっはー！ いっぱい遊べて楽しかったぞー！」

「それは良かつた。」

「なあなあるかるか！ またショッピングモールに行こうな！」

「うん。時間が取れたらまた行こうか。今度は映画館とかにも行つてみたいね。」

「映画館？」

「そ。家にはテレビがあるよね？ あれの何倍もある大きさのスクリーンで映像を見て楽しむんだよ。まあ、おしゃべりとかはできないけどね。他にもお客様がいるから、騒いだら迷惑をかけてしまう。」

「迷惑は良くないなー。」

「その通り。だから、映画館の中では静かにしどかなきやいけないんだよね。」

「りよつか！ 映画館に行つた時はちゃんと静かにするぞ！」

「セイは偉いね。」

「わはー！ るかるかに褒められたー！」

「で、映画館には行つてみたい？」

「うん！ その映画館つて奴、ワガハイも行つてみたいのだ。」

「じゃあまたショッピングモールに行く機会があつたら映画館にも行つてみようか。早起きすることになるかもしねないけど、セイは大丈夫？」

「もちろん大丈夫なのだ！ 楽しみが増えたな。」

にこにこと笑顔を見せる太歳星君の姿から、本当に楽しみにしてくれていることがよくわかる。

こんなに無邪気な子が、まさか太歳神と呼ばれる祟り神であることに、気づける人はいるのだろうか？

まあ、呪術師や呪詛師に分類する人たちはすぐにわかってしまうんだけど。  
その道のプロ集団なわけですし。

だからこそ、六眼持ちの五条先生には会いたくないんだよね。

だつてこの子が祟り神だとバレたらどんなことになるかわからないし。

ああ、でも、一番会いたくないのは呪術界の上層部かね？

五条先生は多少なりとも融通を効かせてくれるところがある分、まだマシな分類かもしれない。

逆に上層部となると、即行で死刑じやなんじやと騒がれるだろう。  
正直、あの人らのクズっぷりはかなりのもんだからね……大嫌いだから見つかりたくない。

「るかるか？どうしたんだ？」

「うん？ そうだね……ちよつと嫌いな奴らがいるから、そいつらには会いたくないし、見つかりたくないなって考えていただけだよ。」

「るかるかにも嫌いな奴らがいるのか？ どうする？ 崇つとくか？」

「……是非ともと言いたいところだけど、今のところは害されてないから放置でいいかな。もし手を出してきたらその時は任せせるよ。」

「りよつか！」

嬉しそうにこちらの依頼を引き受ける太歳星君。

マジである老人たちが何かしてきたら彼にどうにかしてもらおうと思いながら、ぶらぶらと揺れる太歳星君の手をゆるく握る。

すると太歳星君は、すぐに私の手を握りしめて、わはーと御満悦。

しかし、すぐに何かに気付いたような反応を見せ、その場で警戒するように辺りを見渡し始めた。

「セイ？」

「……るかるか。気をつけて。何かくる！」

何かがくるつて……と口から出そうになつた声は、悍ましい方向のような声により搔き消える。

何かが猛スピードでこちらの方へと走つてくる気配。

それは、あまりにも覚えのあるものだつた。

今日の朝、見ていた夢……この世界での御子神 瑠風と言う存在の記憶となる夢。そこに現れていた呪いが型を得たもの……呪靈。

つまり、こいつは私が太歳星君を狙つてこつちの方へとやつてきたと言うわけだ。

そこまで分析した瞬間、目の前に砂埃が舞い上がる。

一時的に奪われた視界。だが、砂埃の間間に存在している薄い部分からはちらちらと明らかに人でもなれば動物でもない異質な見た目をしている存在が見えていた。

「なんのトラブルなく過ごせると思つたのに!!」

「るかるか、ワガハイの後ろに早く隠れて！こいつはワガハイがやつづけるのだ！」

呪靈をやつづけると言つてくる太歳星君に領き、彼から一定の距離を取る。

同時に太歳星君は、目の前にいる呪靈めがけて走り出した。

「るかるかには指一本触れさせないぞー！約束したからなー!!」

声音は子どもらしいというのに、纏う気配は禍々しく、呪いの神であることを改めて

認識してしまうほどの気迫を見せる太歳星君。

でも、纏う力はとんでもないと言うのに、不思議と彼のそれは怖いとは感じない。

太歳星君が私を守ると約束をしてくれたからだろうか？それとも、彼は必ず私の味方をしてくれると理解しているからだろうか？

おそらくはその両方。太歳星君は必ず守ると約束してくれた。だから私も、彼を信じることができる。

襲つてきた呪霊めがけて走つた太歳星君は、一瞬にしてその姿を青年のものへと変化させ、同時に異形の四本の腕を出現させる。

そのまま、こちらを襲つてきた呪霊に殴りかかつてそのまま潰し……いや殴りかかつて潰した！

「待つて太歳星君!!まさかの物理なの攻撃!?」

「……こっちの方が早いから。」

「た、確かに早いけどね……？」

「こいつらは……崇るのは難しい。逆に強くなるかもしれないから。でも、こうすればこいつらはすぐに消える。だから、早い。」

「そ、そななんだ……？」

「……瑠風。気をつけて。まだ、いる。」

「！」

まさかの排除方法に対するツッコミを入れる中、太歳星君から紡がれた言葉に思わず固まる。

まだいる？どこに？気配は感じないので辺りを見渡していると、不意に体を悪寒が貫く。

慌ててその方に目を向けてみれば、そこには巨大な呪霊が現れていた。

「うわ！？」

急いで距離を取るように太歳星君の方へと走り出す。

すると、太歳星君は一瞬にして私の側にやつてきて、四本の異形の腕のうちの一本で呪霊を頭から叩き潰した。

その際私の体は残りの異形の腕と、普段使いされている二本の腕、計五本の腕で包み込むように抱きしめられる。

断末魔を上げることなく、呪霊は蚊のように潰された。

まさにブチツと言う効果音が合いそうな状況だ。

潰された呪霊はその場に肉片やら血やらわからない何かを撒き散らして絶命する。

太歳星君が腕のおかげでその飛沫を浴びることはなかつた。

「瑠風……大丈夫か……？」

「うん。ありがとう、セイ。助かつたよ。」

「瑠風を守るつて、約束したから。」

太歳星君が小さく笑いながらこちらを見てくる。

その姿に小さい太歳星君を重ねながら、優しく彼の頭を撫でる。

その瞬間、太歳星君の体がふわりと禍々しいオーラに包まれた。

オーラが霧散すれば、いつもの小さな太歳星君の姿が現れる。

「るかるか、怪我はないか？」

「うん。」

「それならよかつたのだ！」

久々に呪靈に襲われたなど思いながらも、互いに無事だつたことを喜ぶ。

これで平穀無事に自宅の方へ……

「祟り神の中でもそれなりに有名どころである太歳神こと太歳星君を引っ付けてるにも関わらず体調を崩すどころか、守つてもらいながら過ごしてるとつてすごいな。しかも友好的に接して過ごしてるとかウケるんだけど。」

「…………Oh……。」

…………聞き覚えのある中村〇一ボイスが鼓膜を揺らし、思わず引き攣った笑みが出てしまう。

ギギ……と壊れたブリキの人形のように背後を振り返ってみれば、そこには銀髪目隠のナイスガイ。

「いつか見つかるとは思つたけど、こんなに早く見つかるとは思わなかつたよ……。ねえ……五条先生……。」

五条悟と邂逅してしまつた瑠風と太歳星君。  
その姿を遠巻きに見て いるものが二人いた。

片方は少女。片方は外国からやつってきたと思わしき女性。

人は自身の碧眼と、琥珀色の瞳の中に二人と一騎の祟り神を映す。

「おやおや。見つかつてしましましたね、彼女。」

「大丈夫かしら……マスター……。」

「問題はないと思ひますよ？あの銀髪の方。彼女と太歳神に危害を加えるつもりはなさそうですし。」

「でも、あの方は呪いを祓う人で、なおかつお強い方なのでしょう？助けなくともいいのかしら……。」

「まあ、もしも危害を加えそうであれば、その時は私たちも出るわたくしとしましよう。ですので、もう少し様子見をば……。全く……呪いが蔓延する世界とは言え、私を護衛の一人として無意識のうちに召喚するだなんて、随分とまあ変わり者がいたものですねえ。しかも、彼女の宝具を自身の能力に変換しているとは思いもませんでした。ですが、使い勝手は割といいかもしれませんね。短時間の領域展開だけで、かなりのスペックとして作用するようですし。」

「でも、まだマスターは気づいていらっしゃらないのでしょうか？」

「まあ、気づけるほどの記憶はまだないようですから。ですが、いずれ必ず気づくことになるはずですよ。意識を失うほどの疲労とともに。」

「意識を失う……？」

「ええ。彼女が内側にある力に気づくのは、少しでも道を誤れば命を失つてしまふ現場でしようから。いわゆる、銀髪の方のような呪いを祓う立場になつたら、ようやく自覚できるかも知れない……と言つたところでしよう。ですが、あれを使うとかなり体力を消耗するので、頻繁に使わせないようにならなくてはなりませんね。なんせ、本来ならば人間如きが扱つてはならない技ですし。あれは、わたくし私たちのような存在だからこそ使えるもの。ゆえに、人間が使えば本来命を落とします。まあ、彼女に関しては、それを力バーする特異体質があるようですから、意識を失う程度でなんとかなるようですが。」

「それなら、私たちもあまり無茶をしてはならないわね。」

「ええ。とはいって、この流れなら彼女は間違いなく呪術師わたくしが集まる場所に連れて行かれでしようし、周りが無茶をしないとも限りませんから、私たちも行動せざるを得ないでしよう。これらのお代は、最期にまとめて請求するとしましょうか。タダ働きなど認めんですので。」

「私は……マスターと遊べればそれでいいのだけど……。」

「あなたは子ども。わたくし私は社会人。立場が違えば報酬が変化するのは当然ですわ。なので、あなたは決して私の邪魔わたくしはしないでくださいましね？」

「邪魔はしないわ。だつて、私とあなたはマスターを守る力を振うために召喚されたのですから。でも、マスターに無茶なことをするようであれば、その時私は何をするかわからないから。」

「……まあいいでしよう。報酬をしつかりといただくまでは、私も彼女に無理難題を突きつけるつもりはありませんし。その分、利子はきつちりとつけますが。」

遠巻きに瑠風たちを見据える一人組の間にわずかながら険悪な空気が走る。しかし、瑠風たちが移動する様子を確認するなり、すぐにその険悪ムードを振り払い、その後を追い始める。

彼女たちの頭の中には、今はとりあえず、自分たちを呼び出す原因となり、この世界

でのみの主人を護衛することのみが過ぎていていた。

### 【瑠風＆太歳星君】

ついに五条と接触してしまった二人組。

五条が現れた際、太歳星君は威嚇するように瑠風の前に出て彼を威嚇し、瑠風はどうとう最強呪術師に見つかってしまったと肩を落とした。

### 【五条 悟】

瑠風が少年を太歳星君と呼んだことにより、彼が道教の太歳神であることを確信。

とんでもない祟り神連れてんのに平然としてるし、むしろ友好的に接してるとかウケるんだけどと笑っていた。

【遠巻きに瑠風たちを見ていた二人組】

実は瑠風と合流していなかつただけで、彼女が呪術廻戦の世界で目を覚ました瞬間、連鎖的に召喚された方々。

瑠風をマスターと称しており、なおかつ彼女が使える術式も領域展開も知つてている様子。

それを瑠風が自覚していないことも、それを使用した際の弊害も、瑠風の特異体質も知つていて、今のところ本人に告げるつもりはない。

仲はあまりよろしくない様だが、自分たちが何のためにこの世界に顕現しているのか理解しているため、軽い言い争いはするが、消滅させるつもりはない。

## 06. 思いがけない合流

「……どうぞ。」

「うん、邪魔するよ。」

「…………。」

最強呪術師と出会して数十分後。

私は、彼、五条 悟を自宅の方にまで招いていた。

私が彼を連れて帰った時、母さんがすごく驚いていたことは記憶に新しい。

彼の顔の良さと、体調を崩しているのをたまたま見つけたからここまで送りにきたという清々しいまでの嘘に騙された姿もね。

で、まあ、母さんがお礼をしたいとか、もう遅いですからとか言つて、彼を夕飯に誘つたのは数分前。

五条 悟……いや、内心でも年上……さらには一応教師でもある人をフルネーム呼び捨ては失礼か……。

……五条先生は、母さんが口にした、夕飯を食べて帰らないかという質問に対し、躊躇うことなくそれじやあお邪魔しますね？と素晴らしい笑顔（目隠しなし）で承諾しや

がりました結果、夕飯ができるまで、なぜか私の自室で待つことに。

——なんでおの部屋なんだよ。つか目隠し外して笑顔とか正気かこの人？自分の顔面の良さ理解しての反応だよね絶対。マジふざけんな。母さんが骨抜きになつたらどうすんだよこの野郎。まあ、イケメンだからと言つて、母さんが一回りも年下の人に現を抜かすことはないだろうけどさ。ジャニを応援する年上ファンくらいつしょ。

「さてと……じゃあ、ちよつと僕と話をしようか。その前に、君の名前を聞かせてもらつてもいいかな？」

「……そういえば名乗つてませんでしたね。御子神 瑠風。それが私の名前です。」

「瑠風ね。僕は五条 悟。この東京にある呪術師の学校で教師をしてるよ。」

「呪術師……。」

「そ。世界には結構呪いが存在していてね。それを祓うことができる人間がいるんだ。で、僕が勤務しているのは、そんな呪術師が集まる場所……つてところかな。僕も呪術師をやつててね。これまで結構祓ってきたかな。」

知つてます……と口が裂けても言えない。

そんなこと言つたら、いくら調べても一般ピープルという結果にしかならないであろう私が、なんでそんなこと知つてるんだって話になるし。

そうなつたら面倒臭いことこの上ないことになるのは確定するし、実は別の世界からこつちに来ていて、この世界は漫画になつてたんですよ……なんて突拍子もない説明をしたところで誰が信じるというのか。

むしろ精神科に飛ばされるわそんな話したら。  
だから黙つておく。

「その呪いを祓う人が、私に何か用ですか？」

まあ、理由なんて簡単に想像つくけどね。

だつて、私の側にいるのは太歳神とも呼ばれている祟り神、太歳星君。  
呪術師である五条先生が、呪いの塊や発生源と言つてもおかしくないこの子のことを見逃すはずがない。

祓うか利用するかのどちらかを迫つてくると言つたところだろう。

もちろん私は彼を祓わせたりしない。

利用する……という表現は正直したくないけれど、彼には何度も助けてもらつてい  
る。

彼がいなければ、私は呪霊に執拗に狙われる人間になつてしまふから、離れてほしく  
ない。

……幽霊とか、悪霊とか、そういう奴らつて、自分たちを認識することができる存在

を襲う傾向があるって話があるし、多分、私もそれに近い性質なのだろう。

でも、どうしてこんな性質を持ち合わせて生まれたのかはわからない。

なんらかの原因があるのは、間違いないと思うのだけど、それを探ることは今のところ難しい。

そう考えると、呪術高専に通うことで謎を解明することができるかも知れないし、どつちみち太歳星君を素直に奪わせるわけにもいかないか。

「そこ」にいる子、太歳神とも呼ばれてる祟り神だろう？」

「大人しく祓わせるとでも？ もしそうだとしたら、こちらも考えがありますが。」

「……るかるか。コイツのこと祟ろうか？」

「うん、ちょっと待つて？ 僕のこと祟ろうとしないで？ それしたらどうなつちやうか知つてるよね？」

「あなたの血縁を中心に、親戚の全てが死ぬでしようね。」

「洒落にならないからやめて。解呪することはできるかもしれないけど、間違いなく時間がすごくかかるし、その内にどれくらい死んじやうかわからないから。」

太歳星君の崇るかという言葉に即行でストップをかけてくる五条先生。

まあ、別に崇るつもりはないけど、一つの奉制としては有効だつたようだ。

今はいいよ、と太歳星君に告げる。

今はつて何?つて五条先生に言われたけど、その質問はスルーしておいた。

「僕は君らを害するつもりはないよ。流石に祟り神とは言え、神格相手にいくら力がある僕と言えど手出ししない方がいいことは理解してるからね。その子が君のことを守つてることも知ってるから。あの場にいたしね。それに、契約を結んでるみたいだし。どんな条件で結んでるのかまではわからないけど、契約者が害された瞬間、その子がこちら側どころか人類相手に敵対する可能性は十分ある。まあ、そこら辺は弁えてるから安心してよ。」

五条先生が、私と太歳星君に危害は加えないと告げてくる。  
くだらない冗談は言う人だけど、嘘を無駄に口にする様な人じやないことはわかるから、これは嘘じやないと判断する。

それに、彼が口にした言葉はもつともだ。  
太歳星君は祟り神。神は余程のことがない限り約束を違えない。  
これは、太歳星君にも言えることだ。

私が約束を違えたりしない限りは、こちらを守るという約束、契約は遂行される。  
つまり、現在もまだその約束、契約を継続している私を害するということは、神格を敵に回すに等しい愚行。

流石に最強呪術師と言えど、祟り神……というか、神格持ちにまで手を出した場合、自

分だけは助かっても周りに生じる被害がとんでもないことになることはわかるようだ。

「じゃあ、何のために来たんですか？」

となると、彼が私たちに接触した理由は勧誘に絞られる。

別に問題はないけどね。

むしろ、呪術高専に通わせてもらえるのであれば、それだけでかなり助かる。

太歳星君がこの世界にいる理由。私が持ち合わせている呪霊に狙われやすい特異体质。

そう言つたものを調べる機会がたくさんあるだろうから。

「その前に、少しだけ質問してもいいかな？」

「質問？」

「うん。」

五条先生からされた質問は、太歳星君とはいつ頃から一緒に過ごしているのかや、太歳星君とはどんな契約を結んでおり、どの様な条件を設けているのか……呪術に関しての知識とかは持っているのかと言つたものだつた。

太歳星君と一緒に過ごし始めたのは小学生から。

太歳星君と交わした契約は、守る代わりにして欲しいことや太歳星君が望んでいるものを必ず返すという内容。

呪術に関しての知識は皆無であり、呪術師なんてものは初めて聞いたこと（実際は漫  
画やアニメの影響で知つてゐるが）と言つた答えを返した。

私の返答を聞いた五条先生は、なるほどと小さく呟く。

そして、最後の質問があると告げてきた。

「最後の質問……？」

「うん。これは、瑠風に對する質問じやないんだけどね。」

「？」

私に對する質問ではないとはどういう意味なのか……素直に疑問を浮かべているこ  
とを知らせる様に首を傾げる。

しかし、それは次の五条先生の言葉と、それにより現れた存在により答えを理解する  
こととなる。

「瑠風と接触した時からずつと僕のことを見察しているよね。君らも相当ヤバい存在み  
たいだけど、瑠風の知り合いか何かかな？」

五条先生が視線を向けたのは、私と太歳星君がいる場所のさらに後ろ。

彼に倣う様に背後へと視線を向ける。

その瞬間、その場には光の粒子が降り注ぎ、爪先から第三者たちの姿を作り始めた。  
「……どうやら、お気づきのご様子で。ああ、でもある意味で必然的なかもしません

ねえ。太歳神は祟り神であり、呪いの塊の様なもの。<sup>わたくし</sup>私は獸たちの怨嗟より発生した悪靈であり、同時に自然神の側面を持ち合わせている獸。呪いに敏感で、なおかつ厄介な眼を持ち合わせていると思わしきあなたならばなおのこと。ああ、ですがお気をつけてください。流石のあなたでも邪神の巫女は精神がやられてしまうかもしないので。」「そうね。例えどれだけ強い方でも、私のことはその眼で視ないことをおすすめするわ。特に、悪い子になつた私のことは。」

「今の姿でも十分危険な氣もしますがね。」

辺りに響くのは二人の女性の声。

その二人も、太歳星君と同じように、聞き覚えのある声だつた。

まさかと思い、目の前に広がる光景に眼を見開けば、光の粒子が消えていき、一人の女性と少女が姿を現した。

「……確かに、そつちの女の子もヤバいものがついてるのはわかってるんだけどね。それ以上に君の方がヤバいと思うのは僕の気のせいじゃないよね？見た感じは普通の女性のようにしか見えないけど、その割には随分と禍々しいものが覗えるよ？」

「否定はいたしませんわ。なんせ、これが<sup>わたくし</sup>私です<sup>わたくし</sup>ので。ですが、今はその時ではないですしこうして演じてているのです。それとも、<sup>わたくし</sup>私の本性……お見せいたしましようか？ねえ？呪術師最強とも謳われる、五条 悟様？」

辺りに重苦しい空気が流れる。

しかし、今の私はそれを気にしている暇なんてなかつた。

どうしてここにこの二人がいる？私がこの世界に生まれ落ちると同時に連鎖的に顕現したつてどういうこと？

ねえ……コヤンスカヤ。アビゲイル。

## 07. 五条悟からの勧誘

「なんで……」ヤンスカヤとアビゲイルがいるの？」

ピリピリとした雰囲気の中、五条先生と言葉を交わしているヤンスカヤとアビゲイル。

私は、この状況がよくわからず、混乱したように問いかける。

すると、コヤンスカヤが私の方に目を向けては、口元に笑みを浮かべる。

「もちろん、<sup>わたくし</sup>私とアビゲイルさんを、あなたが自身の身を守るために召喚したからですわ、マスター。<sup>わたくし</sup>私たちはあなたのサーヴァントとして、顕現しておりますので。」

「私のサーヴァント……？ なんで……？」

「それに関しては詳しく述べることはできません。ですが、<sup>わたくし</sup>私たちが呼ばれた理由は、あなたの体質と関わりがある……とだけ申しておきましよう。こちらに關しては、あなた自身で気づいていただかなくては意味がないので。」

「でも安心して、マスター。私たちは問答無用でマスターの味方だから。あなたを害する者が現れた時は、私と狐さんと太歳星君さんで全てを終わらせるわ。」

穏やかな笑みを浮かべながらも、かなりの爆弾発言をしているアビゲイル。

よく見ると額には鍵穴が。どうやら第二再臨状態でやつてきたようだ。

……まあ、この発言に関しては、あとで注意するとして、コヤンスカヤが口にした、二騎のサーヴァントがやつてきた理由。

詳しく述べてもらえないみたいだけど、私の体質と関わりがある……と言う発言に、少しだけ眉を顰める。

かなり重要なことを彼女は知ってるんだな……。

できれば教えて欲しかったんだけど……。

「……話は終わつたかな？」

そんなことを考えていると、五条先生から声をかけられる。

彼の方に目を向けてみれば、なんか目隠し取つていた。

うわ、イケメン。

……じゃなくてなんで目隠し取つたんだあんた。

「ええ。わたくし私たちの話は終わりました。」

「……なんで目につけたそれを外したのだ？」

「うん？ そこのコヤンスカヤ……だつけ？ 彼女が口にしたことが少し気になつてね。

ちよつと瑠風のことを見てみたんだよ。それでびつくり。瑠風。君つてばなんか厄介なものを引っ提げてるみたいだね？ 呪物……とは少し違うような氣もするし、呪物と表

現することもできる、特異物質。階級を当てはめたしたら……特級……いわゆる、一番階級が高く、危険性が計り知れないくらいヤバイものが宿つてゐるみたいだよ。」「え？」

いつのまにか目隠しを外していた五条先生に、太歳星君が外した理由を問う。すると、五条先生はサラッと私の体の中に特級レベルの物質が入り込んでいると指摘してきた。

その言葉に驚き目を丸くする。いつたい、何が入り込んでいると言うのか……。

「……それって、るかるかに害がある奴か？」

「いいや？ どうもそれは彼女の身を守るために機能してるみたいだからね。祝福のようなものだと僕は思うよ。でもね、祝福も時には呪いになることがあるんだよ。行き過ぎた祝福はまさにそれ。過保護なまでに発動するから、周りを無条件で傷つけることがある。」

「でも、るかるかが傷つくことはないんだろう？」

「それはもちろんその通り。むしろ、瑠風を守るために発動するから、彼女はいろんな攻撃を防いでしまう。少しだけ僕が持つてゐる術式に近いみたいだけど、性質としては結構タチが悪いんじゃないかな。僕の場合は意識して使用できるけど、瑠風の場合は無意識下で常に発動しているような感じ。他にもいくつか特殊な術式を持ち合わせてゐる様

子があるけど、これって言わない方がいいんでしょ？」

「ええ。こればかりはマスターご自身で自覚し、認識していただかなくてはなりません。もちろん、誰かに教えてもらうと言うのも一つの手であることは理解しておりますが、術式を使うならば、外部から言われて認識するよりは、マスターご自身で自覚し、認識する方がよほどマシかと思われます。なんせ、彼女の主な力となりうるであろうもの……この世界で言う術式と称すことができる力は、人の身である者が扱つていいものではございませんので。」

「……うん、なんか聞き捨てならないような言葉が聞こえてきたような気がするけど、今は指摘しないでおくよ。で、話を戻すけど、瑠風が宿してるのは、瑠風を守るために機能してる。だから、瑠風が傷つくことはまずないんだけど、その反面、瑠風以外の存在は傷つけ、最悪命を奪うような効能を発揮しちゃうみたいなんだよね。まあ、敵意に反応するみたいだから、敵意さえ向けなければ被害はまずあり得ない。でも、ただの喧嘩だけでそれが発動してしまう恐れがあるから。コントロールはそれなりにできた方がいいと思うんだ。それに、コントロールすることができるようになれば、自分から外敵を排除できるようになるかもしない。」

私の中にある強力な力。私の身を守るためだけに発動している何かしらの祝福。  
それは時に無意識のうちに人を攻撃し、最悪の場合、相手が命を落とすことがある。

その話を聞いて、私は少しゾッとした。

自身がどれだけヤバイ状態だったのか、五条先生の指摘により気づく。つまり、私はくだらないことだけでも人を殺めてしまう可能性があつたわけだ。身を守るために与えられた祝福……でも、その理屈なら確かに呪いとも捉えることができる。

いつたい、誰がそんな祝福を私にかけたのだろう。

おそらく、過去の私が出会った何かなんだろうけど、夢で見た太歳星君と出会った過去までしか記憶はない。

過去、太歳星君以外の何かと出会ったのは確かだと思う。

その先だけ、まるで靄がかかつたかのように思い出せないから。

「……私自身が得たわけではなく、外部からかけられたと思われるこの力は、コントロールすることができるんですか？」

「もちろん。確かにそれは外部にかけられた祝福だけど、自分の意思で発動させるさせないのオンオフの切替えも、その力を逆に利用して戦うための糧にすることも可能な力みたいだからね。多分、かけた張本人は、君自身にできれば戦ってほしくないし、そのまま守られる存在でいて欲しいと望んでいるんだろうけど、いざと言う時は力を使つて闘うことも必要だと考えていたんだろうね。じやなきやそんな選択肢を用意すること

なく、守るためだけのものへと変えているはずだよ。」

その説明を聞いて、私は少しだけ考え込む。

予想通りの結果になりそうではあるけど、これは、私だけじゃなく、周りのみんなのことも守るために必要であるはずだ。

まあ……元から見つかつたらどうするかなんて、すでに決めているようなものだつたんだけど。

「私、この力をコントロールできるようになりたいです。それに、どうやら私は、幼い時の記憶をいくつかどこかへと落としてしまつたみたいですから、それを見つけるためにも行動をとつた方がいいと思うし。」

静かに口を開き、自分の意思を五条先生に伝えれば、彼は小さく笑ったあと、手にしていた目隠しを再び装着し始める。

やつぱり疲れるんだな、それ……なんてことを考えながらも、五条先生を見つめていれば、彼は明るい口調で言葉を紡いだ。

「よし！じゃあ君は高専行きね。その力をコントロールするためには、相応の技術を学べる場所に行かなきゃ意味がないし。行き過ぎてもはや呪いレベルになつては過保護なその力を使いこなせるようになるまでいろいろ教えてあげるよ。」

その言葉に小さく頷けば、五条先生は満足げに笑い、優しく頭を撫でてきた。

ワオ、イケメンに頭撫でられちゃつたよびっくり。

「…………ところで……私、入学する高校決まっちゃつてるんですけど、どうしたらいですか？」

「ん？ ああそちら辺は安心して。こつちが必要な手続きを済ませるし、君の親もちゃんと言いくるめて高専に通えるようにしどくから。つてことで、三人目の高専新入生だよ、おめでとう！」

「…………喜んでいいのかな？」

「…………そうですねえ……ご自身の気持ちに素直になればよろしいかと。まあ、あまり喜ばしくないような気もいたしますが。」

「…………ワガハイ、なんかコイツ嫌い。」

「え？…………ひどくない？」

「基本的に、私たちはマスターから離れたくないんですもの。私たちに手を出さないと言つてはいるけど、それでも私たちの繋がりを切ることができるように力を持つてゐる存在には、あまりいい気持ちは抱かないわ。」

「アビゲイルさんは…………まあ、呪いというよりは、彼の外来の方々のうちの一柱の巫女…………依代のようなものですから、あからさまに気分が悪くなると言つた状況には陥ることはなさですが、わたくし 私や太歳神は怨嗟や負の感情と言つたものから生まれた呪いの

ようなもので、呪いを祓う方に対して本能的に嫌悪感を抱くもの。マスターがそちらに行くというのであれば同行いたしますけど、あくまで私はマスターのサーヴァントですので、決してそちら側の味方になるわけでもなく、あなたの方の指示に従うわけでもない……」とすることだけはお忘れなきよう。』

そんなくだらないことを考えていると、太歳星君とアビゲイルが左右から私の体に抱きつき、五条先生にジト目を向ける。

そして、コヤンスカヤは堂々とした相変わらずの立ち振る舞いで、太歳星君の嫌い発言にひどいと返しながら笑う五条先生に対し、自分たちがどのような存在であり、自分たちはあくまで私と言う人間にしか従うつもりがないと告げる。

「だろうね。君らはあくまで瑠風と主従契約を結んでる存在であり、彼女の内側にある力より生まれた呪力の塊のようなものだもん。まあ、でも、それくらいは問題ないよ。周りに被害が出ないなら、自由に過ごしてもいいから。』

三騎からの視線を浴びても、余裕が崩れない五条先生には流石と言う言葉しか返せない。

……何はともあれ、私も呪術高専に通うことが決定した。

これで……少しは人を助けることができるようになるかな。

## 08. 記憶のカケラ

不思議な夢を見た。

私が今の私になる前の、いわゆる転移前の私の記憶。

視界はそれなりに高い。地面の距離や見える景色からして、中学生ぐらいだろうか。春の花が咲き誇る昼下がりの道のりを歩き、記憶の私はどこかへ向かってる。

記憶の私の視点のようだけど、この体を自分で動かすことはできないようだ。多分、記憶を追走しているだけだから、動くことができないのだろう。

そういうれば……転移前の世界でも、私は生まれた時から東京にいたわけじやなかつたと、流れる景色を眺めながら思う。

どの県で過ごしていたのかは覚えてないけど、東京じやない場所だつたことだけは確かである。

『……こんにちは、——さん。』

『おや……瑠風じやないか。久しぶりだね。』

『うん。久しぶり。』

そんなことを考えていると、記憶の私は穏やかな声で誰かに話しかける。

景色は田舎を思わせる砂利道ではなく、古びた神社へと変わっていた。

おそらく、この記憶の私がさつきまで向かつていたのはこの神社だったのだろう。

神社には狩衣を着た誰かがいる。

声はどこか低く、色気を含んでいるような穏やかな声だ。

誰かに例えるとしたら、井上○彦さんだろうか。

どことなく、某刀の上杉公が使つていたとされる、一文字のお頭さんのような雰囲気の声をしている。

『今日はどうしたのかな?』

『……ちよつと、お話をしたかっただけ。』

『?……どうしたんだい、瑠風?どこか、すぐ寂しそうに見えるが……』

その人の顔はわからない。いや、思い出せないが正しいのだろうか。

思い出そうとすると、靄がかかっているようになり、少しだけ頭が痛くなる。

悪い記憶ではないと思うのだけど……。

いつたい、目の前の男性は誰なのか……昔の私と親しいようではあるけど、どうして

思い出せないのか……いくつか浮かぶ疑問の中、記憶の私は言葉を紡ぐ。

『あのね……私、来月からこの地域からなくなっちゃうんだ。親が仕事で都会の方に行くから、それについて行かなきやいけないの。向こうの学校に受かつちやつたしね。』

ポツリポツリと紡がれた言葉は、呪術廻戦の世界に来た私によく似た状況を説明するためのものだつた。

私の言葉を聞いた狩衣の男性は、一瞬驚いたような表情をしたあと、どことなく寂しそうな笑みを浮かべ、そうかと一言呟いた。

相変わらず目元から上は見えないけど、声音から十分寂しいという感情が伝わつてくる。

『ごめんなさい。私がいなくなつちやつたら、あなたが消えちやうのは知つていたんだけど……母さんたちが、高校を卒業するまでは側で成長を見たいからつて一人暮らしを許してくれなくて。おばあちゃんも……つい最近亡くなつちやつたし。』

『謝らなくとも大丈夫だよ。いつかこうなることはわかつっていた。わかつっていたんだ。だから覚悟はしていたさ。……だが……うん。実際にそれを告げられると……やはり、寂しくなつてしまうね。君と過ごすこの穏やかな時間は、とても楽しくて好きだつたらな。』

『…………。』

どこか悲しげな声音で紡がれた言葉を、記憶の私は答えることなく下を向く。

少しだけ視界が歪んでいるのは、きっと彼女の涙のせいだろう。

他人事のように言葉を聞くしかできない私の意識。でも、ひどく悲しいと思つてしま

まつてているのは気のせいじゃない。

これは、この時私が感じていた気持ち。それを思い出した。

不意に、記憶の私に影が差す。同時に感じたのは温もりに包まれる感覚。

視界に広がるのは男性の狩衣の布。記憶の私は、彼の腕に抱きしめられている。  
『泣かないでくれ、瑠風。君の涙は得意じやない。私も苦しくなるし、悲しくなつてしま  
うからね。』

穏やかな声音で宥められ、優しい手付きで頭を撫でられる。

それを合図にしたかのように、私の両目からはぽろりぽろりと大粒の涙がこぼれ落ち  
ていき、地面や男性の狩衣にシミを作っていく。

頭上から小さく漏れたような笑い声が聞こえてきた。仕方がないなと言うような、ど  
こか呆れているけど優しいものだ。

涙は得意じやないと言つていたのに、私が泣いてしまつたからだろうか。

でも、彼は突き放すでもなく、怒るでもなく、私が落ち着くまで抱きしめてくれてい  
る。

『……落ち着いたかな、瑠風。』

『……うん。ごめんなさい。』

『謝らないでと言つたはずだ。君は何も悪いことをしていいのだから。』

しばらくは涙を流した記憶が続いていた。しかし、ずっと見つめていればその記憶は終わり、記憶の私と神社にいた狩衣の男性が、神社に併設されている古びた家の玄関に座つて話す記憶が現れる。

記憶の私の顔はわからないけど、きっと目元が腫れているのだろう。

それほどに長く、彼女は涙を流していた。

でも、狩衣の男性は気にしていないのか、穏やかな聲音で言葉を紡ぐ。

『……瑠風。遠くへと行つてしまふ君に、私から贈り物を贈らせてもらうよ。』

『贈り物?』

『ああ。君が寂しくないように。君がこれから先で深く傷つかないように。いざと言う時は、私がすぐに君の元へと駆けつけることができるよう。』

『——さん……。』

『ここ』の私は、君がいなくなつてしまつたら確かに消えてしまう。だが、君が私を忘れた  
りしない限り……仮に忘れてしまつたとしても、心のどこかで覚えていてくれる限り、  
私は完全に消えることはない。だからこそ君に託そう。私からの祝福と共に。』

ふわりと両頬に大きな手が添えられる。その手により顔は上に向かされ、吸い込まれ  
そうなほど美しい紅玉の瞳と自身の瞳が重なり合う。

ようやく見えたその顔は、何よりも美しく氣高いものであり、同時にどこか強大な力

を持ち合わせている存在だつた。

『あなた……は……』

息を呑むような美しさを持ち合わせている存在を見て、ようやく記憶ではない私自身が言葉を紡ぐ。

だが、その瞬間視界は全てノイズにより塗りつぶされていき、私の意識も遠のいていく。

『瑠風。私は君のことを愛してしまつた。だからこそ与える祝福と力だが、これはきっと、いつか過剰なものへと変わつてしまふだろう。だとしても私は、君を手放したくはない。できることなら全てをこの場で奪い去つてしまいたいとも思つてしまふほどに。祝福を与える前にこのようなことを言うなどどうかしているとは思うが、これだけは告げさせてもらう。……すまない。そして愛している。例え君がどこまで遠くへと行つてしまつても、必ず見つけ出すための証を刻み込んでしまうほどに。』

どこか遠くで、しかしすぐ近くにいると錯覚してしまうような声が鼓膜を揺らす。

最後に見えたものは、美しくも悍ましい存在の端正な顔が、私の方へと近づけられる記憶だつた。

? . . \* . . ? . . \* . . ? ? . . \* . . ? . . \* . .

? . . : \* . . ?

「…………今のは…………？」

不意に意識が浮上する。

ぼやける頭と視界の中、私はポツリと小さく呟く。

何か夢を…………大事な記憶を見ていたような気がするのだけど、雲がかつたように曖昧で、何を見ていたのかハツキリと思い出せない。

「るかるか…………。」

そんな中、すぐ近くから聞き慣れた声が聞こえてきた。

すぐに声の方へと目を向けてみれば、そこには太歳星君がいて、なんだか心配しているような視線が送られている。

「…………どうしたの、セイ？」

どこか不安気な様子を見せている太歳星君に声をかければ、彼はぎゅっと私の手を握りしめてきた。

その手は少しだけ震えていて、何かを怖がっているようだつた。

「セイ…………？」

「…………さつき…………。」

「うん?」

「さつき……るかるかから、普段は感じることがない大きな力を感じたのだ。ワガハイやあの狐、あびあびとは全く違う力だった。」

「……セイでもなく、コヤンスカヤでもなく、アビーでもない大きな力……。」

「うん……。」

「……そつか。」

太歳星君の言葉に対し、小さく呟くように相槌を打つ。

おそらく、私が見ていた夢に関わりあるものだろう。でも、夢でハツキリと見ていたはずなのに、その力を持つ者が誰なのか……曖昧になつていて思い出せない。

どうして思い出せないのだろうかと考える。小さい時の記憶だから? 転移する前の記憶だから? それとも、何かしらの外的要因によるものなのだろうか?

そんなことを考えながら、近くにある目覚まし時計に目を向ける。

時計が指示しているのは午前3時。高専の方へと移動するのは昼間だつたし、アラームをかけているのは7時。

まだ起きるにはあまりにも早すぎる。

「……もう一眠りするか。」

「るかるか、まだ寝るか?」

「うん。」

「じゃあワガハイも寝るのだ。」

「そうだね。じゃあ寝ようか。」

「うん！」

そこまで確認した私は、再びベッドに横になる。太歳星君も同じように横になり、私の体をギュッと抱きしめてきた。

抱き枕じゃないんだけど……と少しだけ苦笑いしたくなつたが、太歳星君が満足そうにしているし、指摘はせずに抱きしめ返す。

「わはー。るかるかあつたかいのだ。」

「セイもあつたかいよ？」

「ワガハイもあつたかいのか？」

「うん。」

「そつかー。ワガハイもあつたかいんだな。」

へにやんと笑う太歳星君の頭を優しく撫でれば、彼はすぐにウトウトし始める。

程なくして寝息が聞こえてきて、彼が眠りについたことがわかつた。

小さくお休みと呴いて、自身も眠りにつこうと目を閉じる。

その際、一瞬だけ自室の出入口付近に、穏やかな笑みを浮かべる狩衣の男性がいたよ

うな気がしたけど……あれは、気のせいだつたのだろうか……？

## 09. いざ、呪術高専へ

不思議な夢を見て二度寝を決めて、かけていたアラームで起床する。

結局、自分が見ていた夢がなんのかはわからなくなつてしまつたけど、どうしてかまた見るような気もするし、今はとりあえず気にしないでおくことにしよう。

念のために太歳星君に、夜中に感じた力は感じるか聞いてみたら、今は感じないって話だし、多分、大丈夫。

「おはようございます、マスター。」

「うん。おはよう、コヤンスカヤ。アビーもおはよう。」

「ええ。おはようございます、マスター！」

「……夜中は起こしちやつてごめんね、セイ。」

「確かにびっくりしたけど、大丈夫だぞー！あ、忘れてたな。はんなまー！るかるか！」

「おつと。確かに忘れてたね。はんなま、セイ。」

「そんなことを思いながら、私は三騎に増えたサーヴァントたちと挨拶を交わす。

「そういえば……アビーとコヤンスカヤはサーヴァントって言つてたけど……私、今呪なんて……。」

「…………あつたわ。」

そんなもんあつたつけると自分の体を探してみれば、くつきりと右手の甲に令呪が浮かび上がっていた。

なんだろうこの形……流星……のように見える。

なぜ流星……？ フオーリナー中心だから？ それとも太歳星君が地上を巡る星だからなんだろうか……。

もしかしてコヤンスカヤ（闇）の影響で？ ……どれもあり得そうだな。

「マスター？」

「どうしたのだ、るかるか？」

「おや、ようやく令呪を見つけましたか。いささか遅すぎませんこと？」

「…………うるさいな。サーヴァントを連れて動くことになるとは思わなかつたから知らなかつたんだよ。」

無言で令呪を見つめていると、アビーと太歳星君が不思議そうな表情を見せる。

コヤンスカヤの指摘はちよつと一言余計だつたので軽く言い返しておいた。

「昨日までは令呪なんてなかつたのに……」

「そうだつたのですか？ それはおかしいですねえ……。わたくし 私たちは、マスターがこの時代に生まれ出でた時にはすでに契約を結んでいたはずなのですが……。」

「え？ ここに生まれた時から？」

「はい。となると……何かしらの細工がされていたのかかもしれません。私たちをサーヴァントとして認識したら令呪が発生するとか……そんな感じの何かが仕掛けられていたとか。まあ、こちらに来る前の記憶が戻る前に令呪なんてあつたら、周りからなんだこの癌は、みたいな感じに気味悪がっていた可能性もありますねえ。」

「ああ……まあ、確かに、それはあり得るかも。この世界には、本来サーヴァントは存在しないし。」

「ええ。ですので、それを避けるためにも隠されていた可能性があります。マスターがサーヴァントという存在を認識できるようになつた上、自身が持ち合わせている力をうまく扱えるようになりたいと望むまで。」

コヤンスカヤの言葉に、なるほどと小さく呟く。

本来ならばこの世界に存在しないはずの神秘。サーヴァントとそれを使役するマスター……そして、マスターが手に宿す令呪。

側から見たらかなり不気味なものと言えるだろう。ただでさえ、この世界には呪霊と呼ばれる異形化した呪いが存在しており、それを見ることができる人間が少なからずいるのだから。

それに、どうやらコヤンスカヤたちはサーヴァント……ではあるけど、魔力ではなく

呪力により顕現しているような状態のようだから、呪術師や呪詛師には姿を消していくも視えるようだし、もし、呪術師の上層部とかに見つかっていたらどんな目に遭うかわからない。

だから、私がこの力を扱いたいと望まない限り、令呪は現れなかつたというのも少しは納得できる。

「そういえば、この令呪は通常の令呪と同じもので、使つたら一画ずつなくなるのかな……」

「そうですねえ……どちらかと言うと、カルデアの方に近いかと思われます。特殊な令呪ですので、<sup>わたくし</sup>私たちにバフをかける程度のものであり、一画消費しても時間経過で復活するタイプみたいですから。」

「……それ、どつかに魔力供給源ならぬ呪力供給源があるってことでは？」

別の世界で聖杯戦争とかやめてよね。

いや、そもそも聖杯があるのかわからないけどさ。

「まあ、この世界は呪力が溢れているような場所のようですし、もしかしたらそこら中にある呪力が供給元になつてゐるのかもしませんよ？」

「それはそれでなんかイヤだな……。」

「どんだけ呪力が世界中に溢れてんのよ。怖いつての。」

コヤンスカヤの言葉に、少しだけ表情が引き攣る中、供給源はいつたいどこにあるのか少しだけ考える。

この家なのか、それとも自分の体の中にある何かのせいなのか……あ、なんか嫌な予感がしてきたから考えるのやめよう……。

「……とりあえず、荷物まとめるか。」

「手伝うわ、マスター。」

「ワガハイも手伝うぞるかるか！」

「では、私は少々マスターのクローゼットを漁りますね。」

「いやクローゼット漁るなよ。」

「何をおっしゃいますか。漁るに決まっていますでしょ？なんせあなたは女子高生。  
もうちょっとオシャレに力を入れても構わない年齢なのですから。それに、一応私は  
NFFサービスのトップを務めている者ですよ？多少はオシャレをしていただかな  
くては困ります。」

「めんどくさ……。」

「何か？」

「…………ナンデモナイデス。」

コヤンスカヤの目がちょっと怖かつた。

自分と契約をする以上、マスターも一匹の獣に過ぎないとか、洋服と言い理屈と言い、人間はどうして裸になることを嫌うのかとか言つていたくせに、オシャレさせるんかい。

あれか？あつちはいわば神としての側面が全体的に出てるからであり、こつちの自分は人間に擬態して生活している部分が出てるからとかなのか？

ていうか、コヤンスカヤはカルデアの記憶あるんだ。

太歳星君は曖昧にある状態で、アビゲイルはほとんど覚えてない状態に見えるのに。  
「私が愛玩の獣であることをお忘れですか？他のサーヴァントとは違うのは当然でしょ  
うに。」

「いや心を読むな。」

「マスターがわかりやすいのが問題かと。読んだ覚えはありません。」

……どうやら、ビーストと通常のサーヴァントはかなり違うようです。

太歳星君は通常のサーヴァントとはどこか違うような気もするけど、忘却補正とかないのかね……。

ゲーム内では、直接彼を藤丸立香たちがカルデアに連れて帰った感じだったから、あの島の出来事を覚えていただけってことかな。  
まあ、なんでもいいや。

「るかるか。これはどうするんだ？」

「それは持つて行くよ。そつちは持つて行かない。」

「マスター。ぬいぐるみさんたちはどうするのか決めているの？」

「……少しだけ持つて行くつもり。なんか落ち着くから。」

「まあ、可愛らしい。まるで幼子ですねえ？」

「うるさいよコヤンスカヤ。」

余計な茶々を受けながらも、順調に荷物を纏めて行く。

こつちの下着を見たコヤンスカヤがダサくありません?とか言つてきたけど、まだ高校生だから問題はないでしょ?が。彼氏がいるわけでもないんだし。

女ならば下着にも気を使うべきではとか言うなし。それは大人になつてからでいいだろ。

別に私は胸が大きいわけでもないんだから。

「……こんなものかな。」

「それなりにコンパクトにまとまりましたねえ。」

「……気のせいかしら? コヤンスカヤさんの側に、結構大きな荷物がある気がするのだけど。」

「おい狐……なんなのだその荷物は……」

「こちらですか？もちろん、マスターの私服ですわ。しつかりと選別しておきましたので、お出かけの際はこちらを着ていただきます。そういうえば、あのペンギンの衣装は……？」普通のサイズのようでしたが。」

「セイの寝巻きだよ。この子が欲しいって言つたからね。値段的にも十分買えるものだつたから買つたんだ。」

「ああ……なるほど。彼女と過ごした記憶が、曖昧ではあっても存在しているのですね。」

「みたいだね。だから、それも荷物に入れてあげて。」

「畏りました。」

必要な荷物をまとめることができて一安心。

あとは、そろそろ迎えに来る五条先生を待つだけだ。

そう考えながら、それなりに片付いた部屋をベッドに腰掛けながら眺めていると、玄関のチャイムが鳴り響く。

「瑠風く。五条先生がお迎えに来てくれたわよ～？」

「うん。今行く。」

同時に聞こえてきた母さんの声に返事を返し、まとまつた荷物を持って自室から出て行く。

そのまま玄関の方へと向かえば、そこには五条先生が立つており、ヒラヒラと私に手を振っていた。

彼の背後には大きめの車が一台。太歳星君たちも乗れるようにしているのだろう。まあ、私がいるだけで四人分だからね。仕方ないね。

「やつほー瑠風。準備はいい？」

「ええ。大丈夫です。」

「オッケー。じゃあ高専に向かおうか。本来なら面接とかあるんだけど、瑠風はちょっと特例って言うか、他人から危害を加えられそうになつたら何が起ころかわからない爆弾状態だからね。なんとか免除してもらえるよう説得しておいたから、そのまま高専に入れるからね。」

「……面接で危害が加えられるつて何…………？」

「……まあ、いろいろあるんだよ、いろいろ。」

まあ、知つてますけどね。悠仁が夜蛾学長にやられていたし。

確かに、あれをやられたら何が起ころかわからないわな。五条先生曰く、私の中にある特異物質は私に対して攻撃性のあるものや危害を加えようとするものに反応してカウンター的に相手に攻撃を引き起こすものらしいし、コントロールできていない以上、試すための攻撃に反応したこっちの力が相手を殺めるとか言う過剰防衛が入る可能性

があるようだし……。

「……深くは聞かないことにしどきます。」

「うん、そうして。」

普段は余裕な様子を見せる五条先生が苦笑いを溢すとかレアでは?

なんて、彼の表情を見ながら考えていれば、玄関から母さんが出てくる。  
すぐに母さんに視線を向けてみれば、母さんは穏やかな笑みを浮かべながら、私のこ

とを見つめていた。

「行ってきます、母さん。」

「ええ、行つてらっしゃい。たまには連絡を入れてよ? 父さんがいないと、母さん一人になつちゃうんだから。」

「もちろんだよ。」

「……気をつけてね。」

「うん。」

何のために出てきたのかはすぐにわかつた。だから私は、母さんと短く言葉を交わしたあと、五条先生に目を向ける。

五条先生は小さく笑みを浮かべながら、私の方に手招きをしてきた。  
それに従うように近づけば、車のドアが開く。

これに乗り込んだら私は呪術高専の生徒。すぐには自宅に戻れなくなるけど、自分の中にある力をコントロールし、欠けてる記憶を見つけるためだ。

最後に母さんの方に手を振つて、車の中へと乗り込む。

あ、運転席にいるの伊地知さんだ。とりあえず軽く挨拶だけはしておいた。

「じゃ、行こうか。」

五条先生も車に乗り込み、ドアが閉まると同時に車は動き出す。

どんどん離れて行くこの世界での自宅。原作に関わる準備が、また一歩進んだのだと改めて認識するのだった。

# 10. はじめまして、夜蛾学長

車に揺られて山の中。程なくして現れるのは、城や寺を彷彿とさせるような大きな和風建築。

東京都呪術専門高等学校と書かれた正門前を見て、本当に呪術廻戦の世界に来たんだなど改めて考える。

いやあ……憧れがなかつたわけじやないけど、まさカリアルでこの学校を見るにこなるとは思わなかつた。

とりあえず今言えることは……：

「……広くない…………？」

この一言のみである。

いや、マジで広いなここ。いつたいどれくらいの敷地があるんだ……。

「そう？ 普通じやない？」

「普通じやないと思ひます。」

いや、思いますじやねーわ。普通じやねーわ。

いくら呪術師がこの学校を起点として動いていると言えど、これだけの広さは敷地を

持て余すでしょ。

呪術師つてそこまで多くないって言つたの先生ですよね？

あれか？ずっとこの学校を拠点にしてるから、感覚バグでも起こしてらつしやる？色々ツツコミを入れたくなりながらも、リアル呪術高専を見渡す。辺りには山と呪術高専の建物しかない。

何というか、ここだけまるで隔離されているかのような感覚に陥つてしまうな……。

「それじやあ、一応学長に挨拶しに行こうか。この学校のまとめ役だし、顔を合わせないと怒られちゃうからね。」

「わかりました。」

先行して学校の敷地内へと足を運んでいく五条先生についていくように、私も敷地内へと足を踏み入れる。

……本当に呪術高専に足を踏み入れちゃったよ。最高つて気持ちと、この学校で上手くやつてけんのかなつて疑問を抱く。

まあ、それなりに生活はできると思うけど、呪術廻戦のキャラクター、みんな好きだから興奮で鼻血とか出ないよね？

「わはー！すっごく広いのだー！今日からここで生活するのかー！」

「マスターに嫌がらせをするような方がいないといいのだけど。」

「そのような輩がいたら、あなたの手でS A N 値直葬コースにでも送つて差し上げればよろしいのでは？ そう言う精神攻撃、お得意でしよう？」

「それはわかっているのだけど、マスターを傷つけるような方がいらしたら、私、抑え切れる自信がないの。だつて、マスターを傷つけるような方はいらっしゃないじゃない。」

「まあ、過激だこと。わたくし 私、ちょっと引いてしまいます。」

「マスターに害する者は必要ないと思つてるもの。狐さんだつてそう思うでしよう？」

「はあ……わたくし 私の意見……でござりますか？ そうですねえ……。基本我関せず状態でいるのでなんとも……。なんせ私は雇われ秘書のようなものですので。あとは、まあ、別にマスターが気にしないのであれば、私はどうとも思わない主義ですから、同意はし兼ねますわ。」

「あなたはマスターが傷つけられてもいいの？」

「別にそつは言つていないでしよう？ マスターが本当に、面倒だなー？ 邪魔だなー？ こいつら消したいなー？ ……と思わない限り、こちらから何かをするつもりはないと言つだけの話です。流石にマスターがそのような感情を抱くようなら、黙つているつもりはございません。」

「あびあび。るかるかを傷つけるような輩がいたら、ワガハイたちだけでどうにかしてやればいいのだ。狐は基本、るかるかの意見に従うだろうからなー。」

「その通りです。呪いたい。祟りたい。殺したい。終わらせてしまいたいとマスター本  
人が望まぬ限り、または、愚かな方々が虎の尾ならぬ私の尾を踏みつけるような愚行を  
やらかさない限り、私はどうこうするつもりなどありません。それに、これらの領分は  
太歳神の領分でしよう? 私に意見を求めるのは、少々お門違いじゃありませんこと?」  
「……マスターのサーヴァントなのに、マスターが傷つけられても気にしていなければ  
何もしないの?」

「マスターのサーヴァントである以前に神ですので。基本的には様子見しか致しませ  
ん。その際にギルティが見つかった時は裁きますが。」

……なんか、すぐ側でかなり物騒な会話がされているような気がする。  
ていうか、コヤンスカヤに関しては、キレたら即行で辺り一面が焼け野原と化して悲  
劇しか生み出さない気がするな……。

「……ちょっと瑠風のサーヴァントたち、物騒過ぎない?」

「……通常運転です。」

「通常運転かー……」

く。  
本当に大規模爆発が起ころるレベルの爆弾じやん……ウケるんだけど五条先生が呟

でも、ドン引きしているのがよくわかるような聲音だ。少しでも核に刺激を与えたたら

爆発し、爆発物処理班を呼んでも解除できないのではレベルのものが三騎もいるんだから無理もない。

ていうか、アビーちゃん……やつぱりマスターがチ勢なのね……。太歳星君も結構ぶつ飛んでいらっしゃる。

コヤンスカヤはこつちが望まない限り何かしらの制裁を与えないらしいからまだストップが利くみたいだけど、多分……いや、絶対に神様の逆鱗……彼女の場合は尻尾を踏んづけられたらかな……？ そんなことやらかすようなことをしたら、間違いなく都市が丸々消し飛ぶな。

らいでんにっこう  
雷天日光・禍音星落火流鍾まがねぼしらっかりゅうすいは、対界宝具だしね。

そんなことを考えながら、五条先生について歩き続ければ、呪術高専内の一室に辿り着く。

「戻つたか、悟。」

「ええ。ちゃんと連れて来ましたよ。」

その瞬間、五条先生に声がかかり、五条先生はそれに応える。

視線を新たな声がした方へと向けてみれば、サングラスに髪を生やしたヤのつく自由業でもやつておられますか？と聞きたくなるような容貌をしていらっしゃる男性が一人、チクチクとカワイイを作っていた。

……………ヤーさんがカワイイを作ってる…!!

思わず原作で悠仁がしていたようなツッコミを心の中でする。夜蛾学長……この呪術廻戦の世界に出てくる人物の一人であり、呪骸と呼ばれる呪いを込めて操作することができる依代を使う呪術師。

ヤーさんじやないのはわかつてているんだけど、見た目のせいでヤーさんなオツサンがカワイイぬいを作つてるのを見ると、あまりにもシユール過ぎて言葉を失つてしまつた。

「……その子が祟り神を連れていると言う少女か。」

「そうですよ。視たらわかるでしょ？」

言葉を失つて夜蛾学長を見つめていると、彼はこちらをじつと見つめ始めた。

「……いや、違うな。彼が見てるのは私じやない。」

夜蛾学長を警戒するよう見つめながら、私に抱きつく太歳星君とアビー、それと、私の少し後ろの方に立ち、堂々と彼を見据えているコヤンスカヤのことを視ている。

「……悟。私は、祟り神を連れているとしか聞いていないんだが？」

「あ、言い忘れてた。実は彼女、祟り神だけじゃなく、なんか他にもヤバイの引き連れていたんですよ。しかも、全部特級レベルで、中には世界規模に影響を与えそうなのもいたりいなかつたり。」

「…………はあ…………。」

夜蛾学長が深い溜め息を吐く。うん、吐きたくなる。

報連相はちゃんとしないとダメでしょ五条先生……。

「えつと……とりあえず、はじめまして。今日からお世話になる御子神 瑞風と言います。私の側にひつついてる男の子は祟り神の太歳星君で、女の子はちょっと特殊な事情を持つてているアビゲイル。そして、私の付き人のコヤンスカヤです。私が持ち合わせている呪力により顕現している式神のようなものと思ってください。まあ、式神と示すにはあまりにも力は強大すぎますがね。なんせ、戦闘機一機分くらいの力は余裕で持ち合わせてますから。五条先生から、自分の中にある力は制御できるようにしておかなくては無差別に人を殺しかねない代物であると聞かされたので、その使い方を学ぶためこちらに足を運びました。よろしくお願ひします。」

早速五条先生のちよつとした適当な部分を知つてしまい、苦笑いをこぼしたくなりながらも、夜蛾学長に挨拶をする。

面接は必要ないと言われたけど、念のためここに来た理由を口にすれば、夜蛾学長は小さく頷く。

「ああ。ようこそ、呪術高専へ。……しかし、よくそれだけの存在を側に置きながらも平然と過ごしていられるな。」

「この子たちは基本的に私に対する害意や敵意を消しにかかる子たちなので、余程のことがない限りは力を使わないんですよ。まあ、私を侮辱したり、攻撃したりすると反射的に行動を起こし、こちらの指示を聞くことなくそれを行つた者を滅ぼさんとするようですが……。なので、五条先生と学長さんが上層部の方々に私のことを報告することをしないと約束してくださり助かりました。私のように呪いを扱う者、意識をしていくとも外敵を排除するための呪いを持ち、ばら撒く恐れがある者、または、すでにばら撒いてしまつた者は規定により処断されると五条先生が伺いました。特に、ばら撒き被害を出した者は、問答無用で死刑扱いにされてしまうとも。もし、そのようなことがあつたら、間違いなく上層部の方々は全滅するし、血縁者共々全ての命が消され兼ねませんからね。」

「……太歳神と呼ばれる祟り神の怒りに触れれば、一族全てを祟られることも、その太歳神が君を大切にしていることも悟から聞いたのでね。少しでも君に敵意が向かないようになつたまでだ。流石に、太歳神の祟りは、こちらでも手に余る。」

「でしようね。神様の力は偉大ですから。」

私の言葉を聞き、夜蛾学長が少しだけ渋い顔をする。

何気ない言葉でも敵意認定をされてしまつたら、問答無用で太歳星君や、私の中にいる力が反応し、守るための攻撃に転じる可能性があるため、言葉を選ぼうとしているの

だろう。

その姿に少しだけ笑つてしまふ。でも、その気持ちは別に、わからないわけでもなかつた。

神は寛大だと言うけれど、少しでも地雷をつついてしまつたら瞬く間に蔓延する呪いを持ち合わせている祟り神の力は、想像するだけでも恐ろしいからね。

それに、私の中にはサーヴァント以外の強大な力がある。

でも、それは未知なるもので、なおかつ私でも認識することができないのだから、余計に恐怖を抱いてしまう。

「ですが、安心を。私はこの子たちのマスターなので、ある程度抑えることは可能です。神格を完全に抑え込むことはできませんが、多少の抑止力にはなりますよ。」

とはいえ、サーヴァントに関してはマスターとサーヴァントと言う主従関係のようなものが存在しており、令呪がある限りは指示を聞くと言う縛りが存在しているから、ストップをかけることはできるはずだ。

だから、よほどのことがない限りは、彼らを使って数多の命を終焉に導くことはしないだろう。

「こちらも、上層部に気取られぬように努力をする。……が、呪術師が起点としている呪術高専で過ごす限り、絶対に見つからないと言うことはまずあり得ないと思われる。だ

からその時は、その者たちを抑制してくれ。」

「ええ。できる限りそうします。まあ、限界もあるので、そこら辺は悪しからず。」

「……悟。彼女を寮に案内してやれ。」

「わかりました。じゃあ、学長に挨拶も済ませたし、瑠風がこれから生活することになる寮に案内するよ。ついてきて。」

「はい。」

太歳星君たちをできる限り抑制することを夜蛾学長に約束すれば、夜蛾学長は、少しだけ複雑そうな表情をしながらも、五条先生に私の案内を頼む。

五条先生はすぐに案内を引き受けたのち、寮に案内するからついてきてと私に言つてきた。

了承するように頷いた私は、夜蛾学長に会釈をしたのち、歩き始めた五条先生のあとを再び追いかける。

次に会えるのは誰かな。

# 11. はじめまして、伏黒くん。

五条先生に案内されながら、校内を歩くこと10数分。前方の方に漫画やアニメでも見ることがあつた呪術高専の寮が見えてきた。

うわあ……とうとう来ちゃつたよこの寮に！ 伏黒くんとか既にここで暮らしてんのかね？

もし、ここにいるんなら、是非とも挨拶しておきたいものだ。重要人物だしね。

「と一ちやーく。つてことで、ここが今日から畠風が暮らすことになる寮だよ。」

「ここが……。生徒が少ないので、随分と大きな寮ですね。」

「否定はできないね。でも、表向きは宗教関連の学校扱いされてるわけだし、これくらいはしとかないといけないんじゃないかな？」

「……まあ一理ありますね。」

「でしょ？」

五条先生と会話をしながら、寮の中へと入り、五条先生の後を追いかける。

しばらくして五条先生はある一室の前で足を止めて、手にしていた鍵で扉を開錠した。

「ほい。」

「うわ!?」

徐に鍵が宙へと放り投げられる。慌ててそれをキャッチすれば、ナイスキャッチと褒められる。

でも、私は呆れの感情しかなかつた。鍵を投げるか普通……。そりやまあ、鍵は金属でできているから、落としたくらいじや壊れたりはしないけどさ、それでも万が一落下の衝撃で少しでも曲がつたら使い勝手悪くなるんだぞ……。

溜息を吐きたくなりながらも、手招きをする五条先生の元に近づけば、先程彼が解錠したドアが開けられる。

視界に広がるのは真っ新な一室。掃除はしつかりされているようで、埃は被つていなし舞い上がりもしない。

「ここ」が瑠風の部屋ね。好きに使つていいから、君が過ごしやすいようにカスタマイズしてもいいよ。」

「模様替えしていいんだ。」

「まあね。だつて、これから長く使う時があるだろうし、規定規定ばつかだとちよつと嫌でしょ?」

「まあ、確かに。」

「模様替えするのかー?」

「うん。とりあえず、荷解きしていこうか。」

「では、私はマスターの服の方を。」

「こつちのお荷物は、私とマスターと太歳星君さんでやつていきましょう。」

「そうだね。……まあ、言わなくともわかるとはいますが、とりあえず服とかも出すので、五条先生は一旦外に出てください。」

「じゃあ、瑠風は荷解きをささつと済ませちゃって。僕は君の同級生になるもう一人の生徒を呼んでくるからさ。またあとでね。」

「……わかりました。」

こんな間取りになつてゐるんだ……と、漫画やアニメでは一部しか出てこない与えられた個室を見渡していると、五条先生が部屋は自由にいじつていいと言つて部屋を出て行く。

その背中を見送った私は、すぐに持つてきた荷物を順次解いていき、どこに何を置くのかを太歳星君やアビーに教えるながら片付けを始める。

……が、口元がにやけそうになつて少しだけヤバイ。

だつて、呪術廻戦の重要な人物である伏黒くんと、寮に移動してすぐ出会うことになるのが確定したんだよ？

呪術廻戦の世界の重要人物に出会えるって、なんだかテンション上がらない？  
まあ、一番みたいのは植物トリオ＆五条先生の絡みとか、植物トリオと二年組の交流  
とかだけさ。

まだ原作が開始されていない現状を考えれば、それはもうちよつと先になつちやうん  
だよね、どう考えても。

……彼らが出会した瞬間、物語の歯車も一気に回り始めることも理解しているし、そ  
の分、原作で命を落としていつた人たちのカウントダウンも始まるから、ちよつと複雑  
な気持ちもあるけど。

……もちろん、私は出来る限り人を助けるつもりだ。例えどんな手を使つても。  
少しでもいい。被害を最小限に抑えていく。

でも、必要な物語も維持する必要はあると思う。……今はどうすればいいかわからな  
いけど。

「……るかるか？どうしたんだ？眉間に皺が寄つてゐるのだ。」

複雑な気持ちのまま思案していると、太歳星君が私の顔に触れ、むにりと頬を摘んで  
きた。

突然のこと驚いていると、翡翠のような緑色の瞳が、私の目を覗き込んで来る。  
「嫌なことがあつたのか？」

「……違うよ。少しだけ考え方をしていただけ。上手くやつていけるかなってね。」

「そかー。うん、るかるかならここでもきっと頑張れるのだ！それに、ワガハイたちもいるからなー！」

「マスター」が不安になる必要はないと思うわ。だって、私たちも「ヤンスカヤさんもいるもの！」

「……そうだね。みんながいるから大丈夫か。」

「当たり前じゃーん！だつてワガハイたちは強いんだからな！」

「私も、いざと言う時はマスターをしつかり助けるわ。危なくなつたら遠くへと逃してあげることもできるから。でも、逃げるのは本当にダメな時だけで、とつきゆーじゅれい……？も、ある程度は倒せるもの。」

「……そうなの？コヤンスカヤ？」

「そうですねえ……。私たちは、マスターの呪力により顕現している状態ですが、機能性としては最終再臨の状況と変わりませんし、なんなら、普通にLV・100を超えてるくらいには力がありますので、特級とされる呪霊にも難なく善戦することは可能です。特に、祟り神である太歳神こと太歳星君は、逆に呪霊を糧にすることで自身の強化を永続的に可能にしている状態ですので、ひたすら呪霊を狩り尽くすこともできますわ。」

「……そんなスキル太歳星君にあつたつけ…………？」

「（）に召喚された際、あなたが彼に付与した一つの特性です。」

「…………は？」

「おや、こちらは無意識でしたのね。あなたは自身の力を使うことにより、他人に新たな特性を与えることができる術者ですのよ？ 効能は一時的のようですが、戦闘時は常に魔力ならぬ呪力回収率アップが与えられているような状態になるそうです。攻撃時に呪力を吸収し、永続強化が行われるというおまけ付きで。」

「…………ちよちよちよ、待つて待つて待つて！？ なんでそんな能力あるの！？」

「そこは詳しく述べできません。ですが、それがあなたが持つ力の一つであることは断言できます。ちなみに、普通の人間にも何かしら与えることができるようですが……まあ、むやみに使うべき能力では無いので、とりあえずは私たちのよ（わたくし）うなサーヴァントのみに使用する方がよろしいかと。呪術師や呪詛師に見つかったら厄介なことにしかならないでしようし。」

「厄介過ぎるわ！！ なんでそんな力持つてんの私は！」

「厄介者に愛された結果の果てですわね。なにせあなたは……おつと、これ以上はお話し方（わざ）がよろしいかもせんね。彼らも指摘されたことをきつかけに見つけてもらうよりは、マスターご自身に思い出してもらいたい、見つけてもらう方がよろしいで

しようから。」

「ヒントくらいちょうどいい!?」

「わたくし  
私がから言えるのは厄介者×2に気に入られてしまい、愛されてしまつた結果、大量の貢物をされまくつてることくらいしか申し上げることができんねえ。」

「厄介者×2!?」

「はい。もちろん、その×2がどなたなのかはこちらから告げることはありません♡」

ハートがつく勢いでとんでもない発言をしてきたコヤンスカヤに絶句する。

厄介者に好かれた結果、大量の貢物をされまくつて何!?

でも、発言からして数は絞れるわけで……いや、肝心なことに関して何も教えてもらえてないじやん!!

「あーもう！記憶が曖昧になつてから何に好かれたのか全くわからん！」

「曖昧な記憶は何かしらの原因で封じられている状態になつていてるからのようですねえ

……。地道に思い出して封印を解くしかないかと思われます。」

「……術が関係してるってことはよくわかつたよ。」

記憶を封じないと不都合が生じるのか？それとも、別の理由で封じられていたりするのだろうか……。

とりあえず、術を使う何かが原因であることは理解できた。

でも、それは呪術？それとも魔術？使える本人にしかわからないような、不可思議な力？

いつたい、私の記憶を封じている力は何なわけ？  
ぐるぐるぐるぐると思考を回しながら頭を抱えていると、部屋のドアが三回ノックされたことに気づく。

「感じ取れる気配は二つ。どうやら、あの呪術師がマスターの同級生とやらを連れて來たようですね。」

「……みたいだね。開いてますよ。片付けも終わらせてあるので、どうぞ。」

「お邪魔するよー。」

コヤンスカヤから扉の向こう側にある気配は五条先生と第三者の気配であることを教えてくれたので、入室許可の言葉を返す。

すると、私の言葉を聞いた五条先生が、邪魔するの一言を口にしながら、ドアノブを開けて入ってきた。

彼の後ろには黒髪の少年。間違いなく重要人物の一人である伏黒 恵である。

「……五条先生……彼女が……？」

「そ。さつき説明した恵の同期になる御子神 瑠風ちゃんね。見ての通り、結構とんでもないの連れ歩いてるんだけど、彼女に危害を加えない限りは向こうからも見限られな

いみたいだから安心していいよ。まあ、怒らせたら間違なく祟られるから気をつけないといけないけど。」

「祟られるつて……」

「るかるかを傷つけたらたうたうる、ぞく!!」

「…………あ、これ絶対マジのやつだ…………。」

太歳星君がいつもの口調で話しかけながら、威嚇程度に呪力を纏う。

すると伏黒くんはすぐにマジのやつだと呟き冷や汗を滲ませていた。

その姿に思わず苦笑い。威嚇程度の呪力であつても、祟り神の呪力となれば必然的にかなり強くなるからね。

わずかでも背筋が凍つてしまふだろう。……まあ、私は背筋が凍るようなことはないんだけど。

使役してゐる本人だからか……それとも太歳星君が好意的だからなのか、はたまたその両方の理由なのが……。

神のみぞ知るとはまさにこのことだろう。

「驚かせてごめんね。私は御子神 瑞風。見ての通り呪靈……に近い存在を使役してゐるタイプの人間だよ。君の目に映る三人は、私の呪力により顕現してゐる。戦闘は基本的にこの子たちがしてくれて、私は後ろでバツクアツプする感じの戦い方になるとと思うけ

ど、呪術高等に通うことで、自分の中にある力を使いこなせるようになりたいからここにいる。よろしくね。」

「ああ。俺は伏黒 恵。ざつくりとだけど、五条先生から話は聞いてる。まあ、最初は特級呪霊級の存在と、祟り神を連れてるなんて話を聞いて、んなわけないだろとか思つたけど、マジだつたんだな。」

実際に見てよくわかつたわ……と少しだけ引き気味に伏黒くんが呟く。  
引かないでくれと言いたかったけど、状況的に引くなと言う方が無理な布陣だつたな、これ。

祟り神、外なる神がいる場所へ通ずる銀の鍵兼外なる神の巫女、自然を生きる獣たちの怨嗟から生まれた自然神であり、破壊神であり、靈基としては10万トンの質量をしている元愛玩の獣の幼体だし。

さらに私は、自分の力を使うことにより、このサーヴァントたちに新たな特性を付与し、一時的な強化を行うことができるみたいだから、伏黒くんが引くのも仕方ないことである。

「小さい時から守られてる感じがしてるから私はもう慣れてるし、何とも思わないんだけど、伏黒くんは今日初めて接触したからちよつとビックリするし、警戒もしてしまうよね。でも大丈夫。五条先生の説明の通り、敵意を向けない限りは遊びたい盛りの子供

も二人と、仕事ができる敏腕秘書だから。」

「待て待て待て。情報量が多過ぎるだろ。」

「あはは！特級呪霊レベルの三体をそんな風に紹介するとかウケるんだけど。」

「ちなみに、この子は太歳星君で、こつちはアビゲイル・ウイリアムズ。私の後ろに控えてるのはコヤンスカヤだよ。フルネームはタマモ・ヴィツチ・コヤンスカヤだけど。」「出身国バラバラかよ。ていうか太歳星君って……それ、中国の方の特級の祟り神だろ……。そんなの連れてるつて規格外過ぎる。」

「否定はできないかな……」

「心強い味方が増えたつて思えばいいと思うけどな。」

「そうかもしれないんですけど、祟り神を連れた呪術師つて……。それつて、下手したら俺らもとばっかり食らいそうですよ。」

「怒らせなきや大丈夫つて瑠風も言つてるから大丈夫大丈夫。彼女に関しては、上層部にも詳しく話してないしね。呪術師に適性を持つてる女の子を見つけたから呪術高専に通わせることにした。術式はまだわかつてないから、わかり次第報告するつてね。あとは、まあ、怒らせたら寿命が縮むかもしれないから怒らせないようになつて言つといたよ。祟り神を連れてることは言わなかつたよ。それ言つたらこつちが被害のとばつちり受けれるかもしれないからね。上の連中つて頭硬いし、似たようなことしか言わない

だろうから。瑠風に敵意を向けさせないようにするために、これからも報告は真実と偽りを混ぜてはぐらかすつもりだよ。」

「それ、大丈夫なんですか?」

「まあ、何とかなるんじやない?」

「……適當だな。」

「……」の人、そういうところあるから覚えておいた方がいいぞ。」

「伏黒くん辛辣……まあ、覚えとくよ。」

「……二人してひどくない?」

なぜか少しだけ伏黒くんと仲良くなつた。もし、ストレスマツハになつたりしたらいつでも愚痴りに来ていいからね。

ストレス発散、大事。

なんてことを考えていると、太歳星君が伏黒くんをジーツと見つめていることに気がつく。

伏黒くんも太歳星君の視線に気づいたようで、少しだけ訝しげな目を彼に向か始めた。

二人の間に微妙な空気。警戒と警戒のぶつかり合いかと首を傾げて眺めていると、太歳星君がにぱつと笑った。

「めぐめぐはるかるかと友達になるのかー？それならワガハイも友達になるー！」

「……は？」

急な友達になる発言に、伏黒くんが呆気に取られたような表情を見せる。

まあ、祟り神から友達になるつて言われたらな……。ポカンとするのも無理はない。にしても、ふしふし呼びかと思つてたけどめぐめぐ呼びなんだね、太歳星君……。

脳内にちよつとエンドレスナイト流れちゃつたけど、うん、忘れよう。

「……よかつたら仲良くしてあげてよ。セイは確かに祟り神と呼ばれている存在だけど、普段は純粹無垢な男の子でね。祟り神としての力がある程度制御できるから、無闇矢鱈に誰かを祟ることもないし、いっぱい遊べるのが嬉しくて、友達をいっぱい作りたいらしいんだ。」

「……まあ、呪力は感じるが、害意は感じないな。」

「君が私に敵意を向けていいからだよ。さつきも言つたように、この子らは私に対する敵意に反応して行動するのが基本なの。だから、敵意を向けてくる外敵に対してもは容赦ないけど、敵意を向けてこない味方は傷つけない。」

「そうか。まあ、気が向いたらな。祓う側からしたら、すぐに仲良くしろってのも難しい話だ。」

「……だつてさ。」

「ん～……まあ、今はそれでいいや！ いつか一緒に遊ぼうな、めぐめぐ！」  
「僕は？」

「…………じょーはなんかヤだからバスするのだ。」

「え……。」

「…………ブフツ」

「ちよつと恵!? 何笑つてんの!?」

「あ、ヤベ……。」

「あははは！」

くだらないことを考えたり、この場で起こったことに対する笑い声をあげたり、なかなか賑やかな顔合わせとなつた。

でも、伏黒くんと仲良くなれそうな気配があるのは確かだし、さつきまで抱いていたちよつとした不安もだいぶなくなつた。

命を落としたり、生死不明に追い込まれたり、術式が使えなくなつてしまつたり……さまざまな状況に陥る人たちをみんな助けることができるのかつて不安が完全に拭えたわけじゃないけど、まあ、とりあえず今は未来のことを想像するより、今できることをやっていくとしようか。

最初の転機は入学して数ヶ月後に起ころるであろう宿儺の器の誕生。次に、少年院に発

生する特級呪靈との戦闘、および一時的な悠仁の死。

次が順平くんとのいざこざで、その次が京都校との交流戦……そして、渋谷事変と死滅回游。

私が一番関わりそうなのはここら辺の出来事だろう。

禪院姉妹の悲劇に関しては、どこまで与することができるかはわからない。

ただ、今考えないといけないのは、これらの物語が発生するまでに自分の力に対する理解を深めることといったところだろうか。

あと、可能であれば獄門疆の回収もしておきたいところ。まあ、回収した後はしばらく悠仁たちとは別の行動を取らなくちゃいけなくなるだろうけど。

……メロンパンの油断を誘うなら、五条先生は封印される道を選ぶべきかな。んで、封印されたそれをさつさと回収してダミーを設置は狙う方がいいかも。

なんにせよ、大まかな道のりはそのままに。そんで被害は最小に。

これを狙つて動かないとね。

最悪、アビーに門を開いてもらつて、そのまま被害に遭いそうな人たちを渋谷から全部追い出さないとかな……。

やることが多いから大変だと思いながらも、目の前にいる伏黒くんと五条先生とのちょっとしたひと時を満喫する。

スタートダッシュを完璧に決めることができたらいいな。

# 瑠風のサーヴァント風ステータス

御子神 瑠風 サーヴァント風ステータス

クラス：フォーリナー or キャスター（異世界からの転移者だから前者かな？）

属性：中立・中庸

真名：御子神 瑠風

時代：現代

地域：日本

筋力：D 耐久：D (EX)

敏捷：C 魔力（呪力）：EX

幸運：C+ (EX) 宝具（領域展開）：B

保有スキル

?????特権 EX

備考：ネロ・クラウディウスが持つ皇帝特権と同種のスキル。しかし、瑠風は皇帝ではないため、皇帝特権というスキル名ではなく????特権というスキル名になつていてる。  
自分自身や自分以外に新たな特性やスキルを与えることができるスキルで、これによ

り太歳星君に戦闘時永続呪力吸収状態と戦闘時永続強化状態が付与されており、戦闘中呪靈を狩れば狩るほど強大な力を発揮することを可能にさせている。

### ?????の加護・暴 EX

瑠風に付与されている何者かの加護。この加護は瑠風に向けられる敵意に反応してカウンター発動する力であり、回避不能の呪詛返しの加護と化している。本来ならば瑠風の意思により操作可能なのが、曖昧な記憶スキルの影響であらゆる敵意や些細な衝突だけでも発動する暴走状態になつていてる。

### ?????の祝福・抑 EX

瑠風に付与されている何者かの祝福。この祝福は、瑠風の基本的なステータスに作用するスキルなのだが、曖昧な記憶スキルの影響で、本来のステータスを抑制する原因となつており、呪力以外全てが一般人と変わらない状態にある。

### ?????ノ寵愛 B+(EX)

瑠風に与えられている何者かからの寵愛という名の貢物。瑠風の力を最大限発揮するための特殊スキルなのだが、彼女が誰から寵愛を与えられているのか覚えていないため、本来の力が発揮できておらず、祝福や加護の抑制、暴走に繋がっている節がある。

### 曖昧な記憶 A

瑠風に付与されているデメリットスキル。このスキルの影響により加護、祝福、寵愛

スキルが阻害されており、能力が本来の力とは違う方向に発動してしまった原因となつている。

これを消すには、曖昧な記憶を完全に思い出さなくてはならないのだが、A相当のスキルとなつていていたため、簡単には解除することができない。

### クラススキル

#### 領域外の生命 B

異世界から転移してきた影響により会得していたスキル。外側の生命体の影響によるものとは違い、漫画やアニメの世界だった場所に、三次元からやつてきたという状況がスキル発現の原因となつたと思われる。

あり方は闇のコヤンスカヤやアビゲイルとは違うらしい。

#### サーヴァント使役 C (B+)

サーヴァントを召喚することができるスキル。本来ならば、特定の属性、または呪いや恐怖に付随して生まれた存在全てを召喚することができるのだが、それらは全て加護と祝福に支えられることにより可能にする能力であるため、曖昧な記憶の影響により、本来の力を發揮することができなくなつているため、ランクがかなり落ちており、現在側にいる三騎のサーヴァント以外は顕現させることができなくなつている。

宝具

領域展開・

種別：対軍宝具

レンジ：30000

最大補足：100

あるサーヴァントが保有している宝具を、呪術廻戦の世界に転移した日に特権を無

意識のうちに使用して自身の領域展開へと変化させた能力。

コヤンスカヤ曰く、これを使用することにより味方側の強化等を可能にし、援護することができるようになるのだが、本来人の身で使役していいものではないため、使用後は必ず意識を失ってしまう。

使用できる時間も短時間で、1時間持つかわからない能力となつてるので、味方全体に強化を施して短期決戦に持ち込むことが主な使用用途となる。

強化以外にも、いくつか作用する特殊バフをかけることができるらしいが、それがどのような能力なのか、コヤンスカヤは語ろうとしない。

知りたければ聞くのではなく、自ら使用することをお勧めいたしますとは彼女談。（もつとも、曖昧な記憶の影響がある限り、使用するのは難しいようだが……）

• • • • • • • • • • • • • • •

この情報は、何者かの力により秘匿されています。  
この情報は、何者かの力により秘匿されています。  
この情報は、何者かの力により秘匿されています。  
この情報は、何者かの力により秘匿されています。  
この情報は、何者かの力により秘匿されています。

## 12. はじめまして、先輩方

呪術高専にある寮へと引っ越してしばらくした頃。

私は伏黒くん……改め、恵くんと結構仲良くなつていった。

まあ、仲良くなつたきつかけは五条先生の無茶振りに振り回されたことに対する愚痴を私が聞いたからなんだけどね。

何日が前に、恵くんがあまりにも疲労困憊でストレスマツハ状態だったもんだから、何があつたって聞いてみたんだよ。

そしたら出てくる出てくる五条先生に対する愚痴。

その日も突発的に無茶振りをされて、それをこなして帰ってきたところだつたらしい。

お疲れ様としか言えなかつたよね。でも、何もしないわけにもいかないし、かと言つて五条先生に何かできるわけでもないしつつことで、とりあえずココアと焼いたクッキーをあげた。

なんでクッキー焼いたのかつて？ H☆I☆M☆A!!だからだよ。

一般ピーポーだつた分、私は呪術師のこととか（原作知識があるとは言え）詳しく理

解できているわけじやないし、自身が持ち合わせている能力を上手く使いこなすことが  
できていない状態だから、現場に行くのは許可されてないんだよね。

少しでも敵意が触れたら大爆発する兵器のようなものだから、周りに被害が出る可能  
性が否めないらしいし。

だから、五条先生も呪術に関しての知識を得るまでは、もうちょっととゆっくりしてて  
と言つてきたのである。

一応、ちらほらと五条先生に教えてもらつたりしはいるけど、いまいちわかつております  
ません。

……で、まあ、しばらくは学んだら寮に戻つて、五条先生や恵くんが教えてくれたこ  
とをノートにまとめて復習したりとかその繰り返しができないんだよね。

だから時間に軽く余裕ができるから、暇潰しにお菓子を作つてみたり。

そんな中起こつたのがこの出来事でね。とりあえず話だけは聞くよつてクツキーと  
ココアを用意して、愚痴を吐き出すための場を設けたわけで。

そしたらそれが効果抜群だったのか、頻繁に恵くんがこつちの部屋にやつてくるよう  
になつた。

決まつて顔色は悪く、ストレスマツハの状態異常で。

出てくるのももちろん五条先生に対する愚痴。それでスッキリしたら世間話と言つた

感じだ。

……原作開始したら、ますます恵くんストレス漬けになりそうな気がするんだけど気のせいかな……？

ああ、恵くん呼びに関しては、なんか自然とそうなつていた。あまりにも頻繁にお茶会と言う名の愚痴吐き出し大会が開催されるもんだから、思わず伏黒くんじやなくて恵くんつて呼んじやつたんだよね。

それで、あつと、ヤベ、と思つて謝罪したら別に下の名前で呼んでもいいってさ。で、流れで伏黒くん、御子神つて呼び方が、恵くん、瑠風に変わつた。

ちなみに、太歳星君やアビーは私と仲のいい恵くんを見て、完全に友達認定をしたりする。

コヤンスカヤはあまり呪術師に興味がないのか、あまりアクションを起こしたりしないけど、影から姿を現す式神が獣型だからかそれなりに気に入っている様子がある。やつぱり獣が大好きなんだね……。

……と、まあ、そんな感じに、恵くんとは友人関係になつていて。お茶飲み仲間とも言えるけどね。

基礎的な知識は教えてくれるから結構助かつてるし、別に嫌と言つわけではないのだけど。

今日は甘さ控えめのビターチョコレートクッキーと、恵くんが好んで飲んでいるコーヒーって感じのお茶会メニュー。

何回かお茶会を繰り返しているうちに、少しずつ恵くんの好みがわかつてきただので、それを組み合わせて彼に出していた。

恵くんは次々と私が好みを把握していくもんだから結構びっくりしていたけど、今は特にきにしていないのか、こつちにお礼を言つてはもぐもぐ食べ始めていたり。うん、気に入ってくれてよかつた。

「へえ、本当に女子の部屋に入り浸つてんだな、恵。」

「意外だなあ。どうどう恵もそんな年かあ。」

「こんぶ。」

そんなことを思いながら、今日も恵くんの愚痴を聞いていると、アニメで聞いていた新たなキャラクターの声が聞こえてきた。

驚いて声がした方へと目を向けてみると、そこには禪院真希さんとパンダと狗巻棘先輩の姿があつて……いやいやいやほぎやああああああああああああ!?

「うお! って禪院先輩! なんでここに?」

「苗字で呼ぶなって何回も言つてるだろ。」

まさかの登場人物に内心で思わず荒ぶる。このタイミングで真希さんたちに会うと

は思わなかつたんですが!?

つて言うか目の前で繰り広げられてる親戚同士の会話、原作でもあつたよねえ!?

「つか、この部屋呪霊が三体いるじゃねーか。どうなつてんだ。」

「なんか二体ほどそんじよそこらの特級とは比べ物にならないのいるしね。」

「しゃけ。」

「あつちの子どもも、一見なんの変哲もない子どもに見えるが、とんでもねー呪力があるし……なんだこの部屋?」

「……えつと……私が率いてる呪霊……のようなものですね?」

「まあ……パンダが喋つていらつしゃいますねえ。これは……なんでしよう? 獣のようで獣じやない……ですが、パンダという見た目は非常に気に入りました。」

「え、俺?」

「コヤンスカヤ、ステイ。お気に召すのは構わないけど、ちよつかいは出さないでよ。」「んもう……わかつておりますわ、マスター。少しだけ残念ではありますが、眷属にするのはやめておきます。」

「……今眷属つて言つてた?あの姉ちゃん。」

「言つてたな。」

「しゃけ。」

めちゃくちゃ興奮していたけど、コヤンスカヤの一言で冷静さを取り戻す。

わかつてるとか言つてたけど、私が止めなかつたら容赦なく眷属化してたよね？勘弁してくれ。呪術キヤラに危害なんか加えたくないぞ。

メロンパンとメロンパン率いる特級連合は別だけど。むしろコロコロしてやりたいけど。

あ～……でも脹相は微妙なところだな……。敵に回れば仕留めて、悠仁の味方をしている間は手を出さない方がいいかな？

うん、このほうが良さそうだな。

「で、恵。こいつ、新入生だろ？」

「はい。御子神瑠風つて言つて、何日か前からここで過ごしてます。」

「恵くんの反応からして、呪術高専の先輩方ですかね？はじめまして。御子神瑠風と言います。私の右側にいるこの子は太歳星君で、左側にいるのがアビゲイル。ベッドに座っているのはコヤンスカヤで、全部私が連れ歩いている呪霊に近い存在です。」「太歳星君とか言うヤバイやつを連れて歩くな。」

「おかげ……」

とりあえず自己紹介と、連れているサーヴァントの紹介をすれば、即時に太歳星君に対するツッコミが飛んできた。

まあ、そうだよね。祟り神だもんね。そりやそんな反応にもなるわ。  
でも、この太歳星君は悪い子じやないんだけどなあ……。

「大丈夫ですよ。私に敵意が向かないのであれば、この子は基本的に遊びたい盛りの無垢な子どもです。確かに、ずっと土の中に埋まつてて、掘り起こされたら掘り起こした者を崇つて、また埋め戻されるの繰り返しだつた子ですが、力のコントロールが可能なので、無闇矢鱈に誰かを崇ることはありません。私に敵意を向けられたら話は別ですが。」

そんなことを思いながら、太歳星君は確かに祟り神だけど、自分に敵意が向かない限りは崇ることはないから大丈夫だと真希さんたちに話す。

少しだけ寂しそうで……とても悲しそうな表情をしている太歳星君を優しく抱きしめて、優しく頭を撫でながら。

私の言葉を聞いた太歳星君は、一瞬だけ驚いたような表情でしたが、すぐにいつもの無邪気な笑顔を浮かべ、ぎゅっと私を抱きしめ返す。

……アビーが太歳星君に対してジトーととした目を向けていたから、とりあえず反対の手で頭を引き寄せ、軽く頭を撫でつけた。

それが嬉しかったのか、アビーの機嫌は治つたご様子。につこにこの可愛らしい笑顔を見てくれたよ。

「……まあ、その姿を見たら納得できるけどな。」

「だな。呪力はかなりヤバイけど、害意は感じないし。」

「しゃけ。」

すりすりと私に擦り寄りながら、へにゃんとした柔らかな笑みを浮かべる太歳星君を見ながら、真希さんたちが言葉を紡ぐ。

多分、一年前の真希さんたち……さらに言うと、乙骨先輩という非呪者でありながらも、助けてくれた優しい人がいたから、多少なりとも反応が丸くなつてくれたの……かな?

まあ、なんにせよ、すぐに受け入れてくれそうで安心したよ。

「私は禪院真希。あんま苗字で呼ばれんのは好きじやねーから、真希って呼んでくれ。」

「パンダだ。よろしくな。こつちは狗巻棘つて言つて、呪言師つて呼ばれる言葉に呪いがのせられる術式持ちだからおにぎりの具材しか話すことがない。まあ、それなりに過ごしてりやなんとなく言いたいことがわかつてくると思うぞ。」

「高菜。」

「もう一人二年がいるんだが、今日はそいつ任務に就いてるから会えるかどうかわからんねーけど、黒制服じやなく白制服を着てるやつだから、見かけた時にでも挨拶すりやい。一応、私たちからもあいつには言つとくけどな。」

「ありがとうございます。あ、よかつたらクッキーディズ。甘さ控えめになつてますけど、まあ、お近づきの印にでも。」

「ありがとな、瑠風。」

「甘さ控えめ……つてことはまさか……？」

「ツナマヨ。」

「待つてください。なんですかその目。もしかしなくとも誤解してませんか？ 瑠風とは別に変な関係じや……」

「え!? 下の名前で呼び合つてる!?」

「ニヤニヤしないでください!!」

……なんだろう。0巻の乙骨先輩と真希先輩に下世話なお節介を披露していたパンダが目の前にいる。

そしてなぜか巻き込まれた。いや、まあ、誤解してもおかしくない状況かもしれないけどさ。

私なんかよりも恵くんにお似合いな女性はきつといふと思うんだけど。

ていうか、こんなイケメン生徒の恋人とか絶対私には務まんないから。

「パンダ先輩。恵くんの言う通りですよ。彼はただのお茶飲み仲間であり同級生です。どこのG.L.G.のせいでストレスマツハによくなつてゐるから、愚痴を聞くついでにクツ

キーを用意したんですよ。甘さが控えめなのは、恵くんが初めて愚痴りにきた時、少しだけ表情を聾めていらっしゃったので、もしかして甘すぎるのはちょっと苦手なのかな？って思つて、調節した結果です。ストレス発散のためのお茶会のはずなのに、それでストレスがかかるのは元も子もありませんし、なにより、せっかく誰かに食べてもらいうのなら、美味しいと思つてもらえるものを作るのが道理ですよ？」

「おつふ……」

「つたく……瑠風。この畜生の話は真に受けなくていいからな。私も前やられてイラつとしたけど、まともに受けたえするだけ時間の無駄だ。」

「おかげ。」

「……。」

「……？ どしたの恵？」

「……いや。」

「お？」

「つーーー！ なんでもないです！」

何やら妙な反応を恵くんがしているようだけど、これはツッコんでもいいのだろうか

いや、やめておこうかな。逆にストレスになりそうだし。

「ん。このクツキーゆめえな。」

「しゃけ、しゃけ！」

「え、俺も食べる！」

「……パンダなのに食べれるんですか？」

「瑠風。パンダ先輩はただのパンダじゃないから問題なく食えるぞ。」

「あ、そうなんだ。」

「お、本當だ。めっちゃ美味い。」

「それはよかつた。」

私が作つたクツキーは、どうやら皆さんに好評だつたらしい。元々お菓子作りとか好きだつたから嬉しいことである。

まあ、お菓子にスキル全振りしすぎたのか料理は簡単なやつしか作れないのだが……。

「セイ。アビー。コヤンスカヤ。みんなも食べていいからね？」

「わはー！やつたのだー！」

「ありがとう、マスター！」

「では、わたし私もいくつかいただきますわ。マスターが作るお菓子は絶品ですわ。これば

かりはわたし私も偽りなしの感想を言えます。料理は可もなく不可もなく……と言つた平凡

な味にしかなりませんが。」

「……うるさいな。仕方ないだろ。お菓子作りとは全然違うんだから。」

「ところでマスター？ お菓子を売る仕事にご興味は……？」

「いや、お金取れるレベルじゃないから。」

「そんなことはありませんのに……。」

絶対に売れると思うのですけど……とか言つてるコヤンスカヤを無視して、私は一つの袋を棚から取り出す。

袋の中に入っているのはクツキーで、目の前にある甘さ控えめのクツキーとは違い、普通に甘いクツキーだ。

ミルクチョコのチップ入りクツキーにナツツ入りのクツキー。そして、ジャムを乗せたクツキーに、アイシングクツキー。

それぞれ数は二枚ずつ。合計六枚の手作りクツキーだ。

「瑠風。どうすんだそれ？」

「見てればわかりますよ。」

「「？」」

私の手元にあるクツキー入りの袋を見て、真希さんが疑問の声を上げる。

狗巻先輩とパンダ先輩も不思議そうに首を傾げる中、恵くんだけは私がクツキー入り

の袋を取り出した理由を知っているため、見たらわかると一言告げる。

同時に聞こえてくるのは廊下を走るような地響き。これを取り出した原因となる人がこの部屋に真っ直ぐやつて来る。

「ちよつとちよつとちよつと!!僕だけ除け者にしてティーパーティーってひどくない!?僕も仕事頑張てるんだけど!?甘いものちようだい!!」

「ほい、甘いものです。」

「いで!?ちよ、くれるのは嬉しいけど投げないでよ瑠風!!ていうかたまに瑠風の攻撃が僕に当たるのなんで!?」

「自分が持つてゐる能力を軽く利用してゐるだけですが。」

「ええ……? 僕の天敵になる能力なんだけど……。」

「最近見つけました。面白いですよ、先生の術式を貫通させるの。」

「楽しまないで?」

地響きが止まると同時に私の部屋のドアが勢いよく開く。それに合わせて一時的な防御強化状態解除を自身が持つ力を使つて付与した私は、ドアを開けた張本人、五条先生の顔面目掛けてクツキー入りの袋を投げつけた。

いやあ、なんとなく無下限による無敵つて貫通できるのかなつて試してみたらあつさり五条先生の術式を貫通するもんだから面白い。

解除不能なバフでなければ対戦正防衛すらも無視することができるタニキの強化後コインヘンを元に使えるようにしてみて正解だつた。

五条先生の術式つて、身の危険を感じないものであれば意外と剥ぎ取れるんだよね。だから、自身の中にある新たな特性を付与する力を利用して、一時的にそれを剥ぎ取る力を自身に使い、その状態でクツキーの袋を投げつける。すると、クツキー入りの袋にも同じ効果が一時的に付与されるから、顔面キヤツチを強いることができる。

まあ、投げる際の動きを悟られたら無下限を意識的に使用されちゃうから防がれるけど、動きが見えなければ綺麗に決まるものだ。

「ぶつあははははは!!」

「マジか。悟がクツキー顔面キヤツチな上にダメージ受けてるぞ。」

「おかげ。」

「ふ……………ね？ 見ていたらわかつたでしょ？」

「ちょっと真希と恵!! 笑わないでくれない!? あーあ!! 先生傷つきました!! つてことで瑠風!! 責任とつて僕にシュークリームを献上しなさい!! もちろん手作りで!!」

「残念ながら、本日の瑠風ちゃんパティスリーは閉店致しましたので、またのご来店をお待ちしております。」

「はあ!? それはないでしょ!? 無理矢理シャツターこじ開けちゃうよ!?」

「きやーおまわりさーん。こつちにお店のシャツターを無理矢理こじ開けようとするG  
LGがいまーす。」

「ちょ、ま、るか……るか……!!これ以上笑わせんな……腹が捩れる……!!」

「つ～～～～……!!」

「既に笑い死んでるの一名いるな。」

「しゃけ。」

恵くんとお茶会をするようになつてから、こつちが作るお菓子の匂いを嗅ぎつけてやつて来る五条先生が現れるようになつて、それからしょつちゅうやるようになつたやり取り。

未だに見慣れてない恵くんや、うずくまりながら肩を震わせる真希先輩が笑い死にしそうになつてるのを横目に行つたそれに対して、冷静な様子を見せるパンダ先輩と狗巻先輩の二人。

それを見た私は小さく笑いながら、机の上にあるカフエオレを口にする。

いい加減泣きそうになつてるような、キレそうになつてるような五条先生に、明日はシュークリーム作るので、今日はそれで我慢してくださいと告げることで宥めるのだつた。

……生徒に宥められてクツキー。ボリボリ食べ始めた五条先生は、情けなくもちよつと  
可愛らしかった。

### 13. 瑠風の武器

真希さんたちとも仲良くなり、数週間が経つたころ。私は、自身の戦闘に必要なものは何かと考えていた。

自分が持ち合わせている何かしらの力。それを解放するにはまだ少しだけ時間がかかりそうだった。

でも、このままじや呪術師として動くことができないから、お荷物コースが確定である。

呪術を扱えるようになるのはもちろん必要なことだけど、出来ることなら多少なりとも戦闘ができるようになつておきたい。

「コヤンスカヤ。」

「こちらに。どうかなさいましたか、マスター？」

夕方の赤に染まりゆく空。それを確認するなりカーテンを閉めて、部屋の明かりを点ける。

そして、頭を働かせるためにと甘めのココアを用意して、飲みながら頼り甲斐のあるアドバイザーへと声をかける。

まあ、まともな返答が返つてこない可能性も否めないけどさ。それでも、ダメ元で質問をするくらいは問題ないと思うんだ。

「……私が持つてるあらゆる力を付与する力のことなんだけどさ。これを使ってどれだけの自己拡張ができるかとかわからないかな?」

「自己拡張……にござりますか……。そうですねえ……一人に永続的な拡張を施すのであれば、一、二個くらいが限界かと思われます。一時的な拡張……いわゆる、一時的なバフの付与等ならば無限大に可能ですがね。」

「へえ……これには答えてくれるんだ。早めに聞いておけばよかつたな。……それってさ、私が何かしらの武器を持つことも可能だつたりする? 呪いに関連した武器とか。」

「呪いに関連した武器ですか?」

「そ。こっちの世界で言う、呪具に分類する武器だね。使いたい武器が一つあるんだけど……。」

「……ふむ……まあ、可能だとは思いますが。ですが、それってかなり負担がかかる武器を扱うつもりでは? もしそうだとしたら、あまりおすすめは致しませんが。」

「……負担がどれだけになるのかはわからないけど、扱えるようになつたらそれなりに使えるんじゃないかなつて思つてる。呪力を乗せることで火力も上げることができるだろうし。」

「……なんとなく、呪いがこもつた武器という言葉で察してはいますが、念のためにお見せいただけます? どのような武器を」所望なのかを。イメージはござりますのでしう?」

「わかった。」

コヤンスカヤの言葉に頷き、私は手元にあるものを出現させる。

それは、ゲイ・ボルク。見た目は赤の槍だけど、心臓を穿つたと言う事実を発生させることにより発動させることができる呪いの朱槍。

呪霊には心臓がないからランサーのような即死を発動することはできないだろうけど、ゲイ・ボルクの回復阻害を発動させ、動きを鈍らせることができるならば、呪霊を始末するために活躍できるのではないかと思つてる。

まあ、一時的な能力の付与を利用すれば、タニキが使う【抉り穿つ魔殺の槍】レベルを放つこともできるけど、こつちの限界まで力を上乗せして投擲することになるだから、一発使用するのが限界だろう。

多分、ぶつ倒れるだろうし。

「やはり、アルスターの光の御子であるクー・フーリンのゲイ・ボルクでしたか。」

「うん。本来の効能を全のせしたら間違いなく倒れるから、使う場は限られるけどね。特に【抉り穿つ魔殺の槍】はぶつ倒れるだけじゃなく、身体にも何かしらの異常が出る

だろうから、使う場所は考えないといけないと思う。効能的に呪霊を廻殺できるのはこつちだから、できれば何回も使いたかったけど。で、こつからが本題なんだけど、「刺し穿つ死棘の槍」の方なら、メインウェポンとして使い勝手がいいと思わない?かのアルスターの英雄のように、心臓を穿つたという因果を作つて放ち、即死させるような芸当は呪霊に通用しないだろうけど、回復阻害の呪いならかけることができるんじゃないかな。」

「まあ、呪霊は呪いの塊ですので、まず心臓がなくとも動きますからね。心臓を穿つたという因果を作つても致命傷にはなりませんし、意味がありません。ですが、回復阻害ですか…。それくらいならば、呪力を消費したからちよつと疲れたな…程度の負担で使用できですね。呪霊の回復が阻害できればその分勝率も上がりますし、特級と呼ばれる階級の呪霊などの回復も阻害できれば、祓う時の負担がかなり軽くなるでしょう。」「でしょ?だからゲイ・ボルクの力を借りることができないかなって思つてさ。」「どう思う?とコヤンスカヤに問い合わせれば、彼女は小さく頷く。それは、紛れもない賛同の意味を込めたものだつた。

同意してくれたことによかつたと呟く。そして、私は自身にゲイ・ボルクを使えるという特性を付与した。

状況に応じて【刺し穿つ死棘の槍】、【突き穿つ死翔の槍】、【抉り穿つ廻殺の槍】の三

種類を変則的に使えるように。

「抉り穿つ麿殺の槍」を使用した場合は残ってる呪力に応じて、動けなくなるように条件を設けて。

「オルタニキさんが使う【抉り穿つ麿殺の槍】を使用した場合は呪力の残量に応じて動けなくなる……ですか。」

「うん。すっからかんになつたら、この世界で使われている反転術式をかけてもらつても一ヶ月は動けなくなると思う。呪力の消費量は一応コントロールできるから、どれだけの範囲に【抉り穿つ麿殺の槍】を放つか決めて使用すれば、数日で動けるようになるけどね。でも、やっぱり撃てるのは一戦闘に一発のみが限界かな。【刺し穿つ死棘の槍】は連発できるけど。」

「当たり前でしよう。マスターが使用するそれは、本来、その宝具を持つ者が使用するからこそノーリスクで放てるというものの。人の身であるあなたが使用していいものではないのですから。バツクアップを利用して、『使用できるのは戦闘時に一回だけ』。『使用したら動けなくなる』と言う縛りを設けなくては使えるはずがありません。ああ、『呪力の残量によつて動けなくなる期間が長くなる』という縛りも使うのでしたね。これらは妥当の縛りでしよう。まあ、どちらにせよ使用したら動けなくなるだけで終わるのは奇跡に等しいです。【刺し穿つ死棘の槍】も、本来なら動けなくなつてもおか

しいのですから、なおさらには。

「でも、贊同はしてくれるんだね。」

「ええ。わたくし私たちがマスターを不測の事態に追い込むことはまずないと言い切りますが、万が一と呼ばれる事態は神の身であつてもいつ起るかわからないと言うもの。低確率であつても可能性がわずかにでもあるとすれば、マスター御自身にも身を守る術を一つくらい所有していただければ、安全性が上がりりますので。ですが、よほどことがない限り、使用は控えていただけますね？」

「……わかつてるよ。無茶して倒れたら意味がないからね。そう言えば、なんとなく私はこれ以上何かしらの能力拡張ができる気がするんだけど、間違いない？」

「はい。その通りでござります。マスターはこの地に生まれ落ちた際、自身が持ち合わせておられる能力を付与する特性を使用し、永続的に使える能力を一つ獲得して生まれ落ちておりますので、今回の能力拡張により、永続能力枠は埋まっています。こちらの方は……まあ、いわば、領域展開のようなものですので、使う場所は限られていますね。ついでに、この能力と、此度付与した能力は併用することも可能です。しかし、併用した場合は間違いなく呪力が素寒貧になると思われますので、使用することはおすすめできませんね。」

「……なるほど。教えてくれてありがとう。」

少しづつなら情報を開示してくれるんだと思いながらも、コヤンスカヤに感謝を述べる。

彼女はどういたしましてと一言口にしたのち、他にご質問は？と聞いてきた。ないことを示すように首を左右に振れば、そうですかという短い言葉だけが返ってきた。

「るかるかも戦うのかー？」

さて、使う武器も決めたし、次は槍の使い方を学ばないといけないな……と考えながら、呪力により顕現させたガイ・ボルクをくるくる回していると、太歳星君が話しかけてきた。

視線を太歳星君に向けてみれば、どことなく心配そうな表情を浮かべている。小さく笑いながら小さな頭を優しく撫でて肯定すれば、心配そうな視線はさらに強くなつた。

「マスターは私たちが守るから、マスターは戦わなくても大丈夫なのに……。」

「そんなわけにはいかないでしょ。二人が心配してくれているのはよくわかるけど、呪術師の世界で生きるためにも、戦う術を一つくらい持つておかなきや。だから、私はこの槍を借りるんだよ。この世界で生きている間だけね。」

「でもでも、るかるかに傷ついてほしくないのだ。」

「ありがとう。でも、こればかりは譲れない。」

何を言われても、ゲイ・ボルクを使用する意思は変わらないことを告げれば、太歳星君とアビーが拗ねたような表情をする。

そして、ベッドに座る私の体をぎゅうぎゅう抱きしめてきた。ちよつとアビーの力が痛い気がするけど、決めた以上はやめるつもりないからね？

「あまり使わせないためにも、我々は気を抜くことなくマスターの代わりに戦闘をこなせばいいだけの話です。あくまで呪いの朱槍はいざという時の最後の砦。まずは、マスターに敵を近づけさせないことを最優先にして行動を取ればよろしいかと。」

手にしていたゲイ・ボルクを消し、ぐりぐりと抗議するように頭を押し付けてくる太歳星君とアビーの二人の頭を撫でていると、コヤンスカヤがあくまでゲイ・ボルクは不測の事態が起こつた際の最後の砦であり、基本的には自分たちが呪霊を一掃すればいいと口にする。

それによりようやく納得いったのか、太歳星君とアビーは渋々私に抗議するのをやめた。

コヤンスカヤにありがとうと告げれば、お気になさらずという言葉とともに、いざと言ふ時以外は絶対にゲイ・ボルクを使うなと念を押す言葉を残す。

苦笑いをしながらその言葉に頷けば、満足げな笑みを彼女は浮かべた。

「……とりあえず、明日から真希さんに呪具を使い方を教えてもらおうかな。あとは、槍術をネットで調べたり、タニキやクーニキの戦闘時の動きを思い出したりといろいろしないとね。」

翌日からやることを脳裏に浮かべながら、ベッドの上に置いていたスマホを手に取る。

この世界にF a t e関連のものがないため技術をものにするまで時間がかかりそしだけど、少しずつやれることをこなしていくこうか。

……タニキが召喚できたらいいんだけど、多分無理だよな。  
はーしょんぼり……。

# 14. 瑠風のお仕事見学 出発編

真希さんに武器を使った戦い方を教えてもらいながら過ごし、呪術高専で過ごすようになつて一ヶ月を回る頃。

筋力の少なさを呪力を利用することによりカバーしながら、いつものように槍を振つていたら、瑠風、と五条先生から名前を呼ばれた。

「どうしました、五条先生？」言つときますけど、お菓子はありませんからね。」

「え、僕、毎回お菓子を集りにくる人つて思われてる？」

「思われてるだろ。」

「思われてるだろなあ。」

「しゃけ。」

「思われてるでしうね。実際、五条先生が瑠風に話しかけてる時、当たり前のようにお菓子ちよだいって言つてるし。」

「否定はできないけど今日はそんなんじゃないって！お菓子はほしいけど！」

「やつぱりか。」

「おかげ。」

「やっぱり菓子目当てじゃないですか。」

「瑠風が作るお菓子が美味しいのが悪いと思うんだけど……じゃなくて、本当に今日はそれが目的じゃないから。あ、今度シュークリーム作ってくれない？」

「…………。」

サラッとお菓子のリクエストをしてくる五条先生に対して思わず無言になる。本来の目的ついでにリクエストをしてくるんじゃない。本当に甘いもの好きだなこの人。

いずれ糖尿になるのは？まあ、それはそれとして……

「……ま、茶番はここまでにして。」

「うん、茶番つてちょっとひどくない？」

「なんの用ですか？見ての通り訓練中なんですけど。」

手にしていた竹槍をくるくると回しながら、話しかけて来た本来の理由……いわゆる本題を話すように促す。

基礎的な動きは完全にマスターできたから、現在応用を教えてもらつての途中で、せつかく楽しく訓練していくのに邪魔されてちょっとだけおこだぞ。

「うん、そろそろ瑠風も現場に出ていいかなって思つてさ。今日、恵の任務について行つてもらつて、見学＆実戦つてことにしようつて考えたんだよね。僕もついて行くから、

安全面は保障するよ。」

「実戦……ですか……。できるかな……。」

「瑠風なら大丈夫だと思うよ？ だつてほら、ここにくる前も、一級相当の呪霊を祓つてたでしょ？ そこの祟り神様がね。でも、それじやあ実戦にはならないから、二級相当は太歳星君やコヤンスカヤ、アビゲイル、あとは二級の呪術師である恵にやつてもらつて、四級から三級相当の呪霊を相手取る時は瑠風も戦闘に加わるつて感じにしようかなって。今の瑠風なら、十分四級や三級を倒せるだろうしね。ただ、二級辺りになると、今の瑠風じやちよつと厳しいだろうから、突つ込んだらダメだけどね。」

「…………なるほど……？」

五条先生が私に話しかけた本当の理由は、そろそろ実戦に出てみようと言うものだつた。

現在の私なら、三級までなら普通に祓うことができるから、とりあえずの訓練と言うことだろう。

五条先生も、一応様子見として付いてくるみたいだし、少しだけレベルアップするためのチャンス……なんだろうか。

「マスター。」

頷くべきか否かと考えていると、コヤンスカヤが耳元へ口を寄せて話しかけてきた。

なんだなんだと目を向ける。すると、コヤンスカヤは少しばかりお耳を押借いたしますと告げ、再び耳元に口を寄せて来る。

「マスターが獲得した能力の使い方や、槍を使った戦い方にに関してですが、マスターが持ち合わせている大元の力を利用すれば、自然と脳内にインプットされます。最初のうちはオートで動く感じになると思いますが、身体能力や体力が追いついて来れば、かのアルスターの光の御子と同じ動きができるようになるかと。まあ、いわゆるチュートリアルというやつですね。なので、一旦は戦闘に出ても問題はないかと思われます。しかし、後日筋肉痛になる可能性はかなり高いので、記憶の片隅には入れておくとよろしいかと。」

「……ちよつと待つて？ なんで私の能力そんな感じなの？」

「まあ、マスターを大切にしている誰かさんのせいでしょうねえ。祝福だの加護だのは、行き過ぎると異常なまでのステータスになりうると言うわけですわ。なんにせよ、使えるものは片っ端からご使用なさるのが吉です。そうすれば、マスターが持ち合わせる本来の力も解放できると思うので。」

「ええ……？」

コヤンスカヤから告げられた言葉に思わず困惑する。平凡だったはずの私に、なんでそんな溢れんばかりの祝福と加護が付与されているのか理解できない。

元の世界で何かしてたつけ?かなりの徳を積んだ記憶は全くと言つていいほどにないのですが?

「いずれわかることです。すでに力の抑制は少しづつ外れておりますので、来るべき時に疑問の答えを得ることができますわ。それまでの辛抱です。んふふ……最初に枷が外れるのは、どちらの記憶でしようねえ?」

楽しげに笑うコヤンスカヤに思わず表情を顰める。この敏腕秘書、完全に楽しんでやがるな?

ていうか、記憶の枷が外れたら、自分の能力がわかるようになるのか……。それなら、早めに記憶を戻すべき……なんだけど、一体それはいつになるのやら……。

「こちらから今言えることはこれくらいです。そうですねえ……もう一つ真実を明かすとしたら、マスターのステータスや能力は、誰から与えられた力であるかを認識するまではランクダウンしていると言つたところです。認識することができれば、力の枷は少しずつ外れていき、最終的にはかなりの強さを会得し、多くの人を助けることができるようになる……と言つたところでしようか。ハッピーエンドを掴み取れるほどの強大な力が、マスターの中にはありますので。その力を理解した時、せいぜい欲にまみれぬよう、気をつけてくださいましね?」

そんなことを考えていると、コヤンスカヤから忠告のような言葉をかけられる。

欲にまみれぬように……つて、随分と意味深なことを言つて来るものである。

やつぱり私の中にあるのは、万能の願望器と呼ばれてるアレなのか？表情を軽く曇らせながら、コヤンスカヤを見つめていれば、彼女はくすくすと小さく笑う。

自身の中にある力がアレである可能性を頭の片隅に置いておきながら、私は五条先生に視線を戻す。

「任務同行の件、受けます。どれだけやれるかはわからないけど。」

「……瑠風ならそう言つてくれると思ったよ。」

惠くんの任務に同行する件を承諾すれば、五条先生が満足げに笑う。そして、私と惠くんに視線を向けて、静かに口を開いた。

「任務には今から向かうから、準備を済ませて。正門の方に伊地知が車を回してたはずだから、そこで合流ね。」

これからどうするかを指示したのち、五条先生は私たちに背を向けて立ち去つて行く。

それを見送った私は、小さく溜め息を吐いたのち、真希さんに訓練をつけてくれたことへの感謝を述べ、一旦準備をするために、寮の方へと足を進める。

すると、恵くんがすぐ私の隣に並んできた。

なにやら物言いたげな視線を感じたため、恵くんに視線を向ける。

「あんま、無理すんなよ瑠風。危なくなつたらすぐに逃げろ。」

どうやら私のことを心配してくれたらしい。少しの顰めつ面を見せながら、静かな声でいざと言う時のことときを告げて来る。

それが少しだけ嬉しくて、私は小さく笑いながら、恵くんの言葉に頷いた。  
やることは全てして、それでも力不足になれば、戦闘から離脱すると言ふことも一緒に告げた。

恵くんは少しだけ安心したような表情を見せては、口元に小さく笑みを浮かべる。

「それじゃ、さつさと準備を済ませて行くか。」

「そうだね。」

短く言葉を交わしては、自分たちが過ごしている寮の部屋へとバラバラに移動する。さて、呪霊相手に、私はどれだけ立ち回れるのだろうか。

# 15. 瑠風のお仕事見学 現場到着編

準備を済ませて伊地知さんたちと合流し、今回恵くんが向かわされた現場へと到着する。

そこは、お墓が近くにある廃村であり、もう人がほとんどいなか、崩壊寸前の木造建築がちらほらと存在している場所だった。

五条先生曰く、この村は数年前から人が寄り付かなくなつて行き廃れていつたのとどちらしく、すでに村に住む人は誰一人としていないのだとか。

でも、この雰囲気のせいもあり、肝試しをするために足を運んだ人間がそれなりにおり、肝試しを行つた人々は何かしらの不調を訴えるようになつたらしい。

中には自殺にまで行つてしまつた人間もいるようで、こつちの方に恵くんが向かわされたとのことだ。

「うつわ～……確かに雰囲気ある……。」

「…………」

「ん?・どうしたのセイ?」

廃村のあまりにも雰囲気ありすぎる姿に、肝試しをしたくなる気持ちもわかると納得

していると、すぐ近くにいる太歳星君が、なにやら警戒状態に入り、一つの方角を見つめていることに気がつく。

不思議に思いながら、太歳星君にどうしたのかと問いかければ、彼は自身が見ていた方角を指差しながら、静かに口を開いた。

「……るかるか。めぐめぐ。ごじょー。こっちの方角は大凶だよ。」

「！」

太歳星君の言葉に思わず目を見開く。それは、今、太歳星君が述べた方角はあまり良くなきものが危険が存在していると言うこと。

つまり、呪いの発生源がこの方角にある可能性が高いということだ。

「……へえ。太歳神ってそんな能力あるんだ。」

大凶の方角を口にした太歳星君の姿に、少しだけ五条先生が関心を抱く。

まあ、あまりよろしくない方角を見定める能力は、何かしらの役に立ちそうだしね。関心を抱くのも、わからなくもない。

……それはそれとして、だ。

「……どうしますか？五条先生。」

「そうだねえ……とりあえず、まずは弱いやつをちやちやつと片付けちゃおうか。一般人もここはいらないみたいだし、さくさく進めるよ。」

「わかりました。」

五条先生が任務を始めると口にしたので、私はすぐにコヤンスカヤとアビーを呼び出す。

姿を現したコヤンスカヤとアビーは、どちらも第三再臨状態の姿へと変わっていた。恵くんと五条先生が反射的に警戒態勢を見せる。どうやら、こっちの姿のコヤンスカヤたちの呪力はいつも以上に強大であり、呪術師にとつては、ピリリとした空気になってしまうらしい。

「コヤンスカヤとアビーは攻撃範囲が広いから、少しずつでいい。片つ端から呪霊を始末して。セイは私と一緒に行動。私が取り漏らした呪霊をお願いできる?」

「りよつか!」

「かしこまりました。では、一旦こちらの秘書モードをやめ、戦闘寄りのわたくし私として蹂躪し尽くして参りましょう。」

「太歳星君さんだけで大丈夫かしら?」

「む!! ワガハイだつてやればできるのだ!」

「それならいいのだけど……。弱い子たちを全部終わらせたあと、すぐに合流するわ、マスター。早く行きましょう、狐さん。」

「わたくし私に命令を出せるのはマスターだけなのですが……。」

そんな二人のことなど気にしていないのか、コヤンスカヤたちはいつもの調子で会話をを行う。

少しだけ喧嘩腰になつてゐるような様子があるけど、おつ始める様子はないらしい。まあ、喧嘩されても困るんだけどさ……。

「ああ、コヤンスカヤ。ちょっとといいかな?」

「はい、なんでございましょう?」

そんなことを思いながら、私はコヤンスカヤの名前を呼ぶ。コヤンスカヤはすぐに私の声に反応して、すぐ近くにまで寄つてくれた。

そんな彼女の頭に軽く手を乗せた私は、自身の能力を発動させる。

あらゆる対象に、新たな特性を追加することができる能力……それを使うことにより、コヤンスカヤがFGO内で使用していたあらゆる地域の獣を取り込み、自身の眷属へと変える能力の対象範囲を呪霊にまで広げたのである。

「これは……」

「使えそうな呪霊がいたら、自身の糧にするなり、自身の眷属にするなりと自由にしても構わない。」

「…………んふ…………ですか。では、ありがたく使わせていただきますわ。」

「次はアビー。君には、太歳星君と同じ力を付与しておくよ。」

「太歳星君さんと同じ力というと、呪靈を倒していけばいくほど能力が上がる戦闘时限定の能力よね？」

「そうだよ。」

「ありがとう、マスター。この力を使つて、もつともつと役に立つて見せるわ。」  
続けるようにして、私はアビーにも新たな特性を付与した。と言つても、太歳星君にも付与してある戦闘時のみに発動する呪力ドレインによる強化能力と変わらないけど、戦闘時に常に強化していくことが可能なら、それだけでもかなりの戦力を保持することができるから使い勝手がいい。

コヤンスカヤにはこっちよりも自身の眷属を増やすことによる戦力補充の方が相性いいと思うから付与はしなかつたけどね。

まあ、でも、取り込んだ呪靈を自身の呪力に変換できるようにはしているから、いざと言う時の呪力補給源にはなる……だろう。多分。

「じゃあ、コヤンスカヤとアビーは別行動で。行くよ、セイ。」

「りよつか！」

私の指示を聞いたコヤンスカヤとアビーが一瞬にして姿を消したのを確認した私は、すぐに五条先生たちに視線を戻す。

すると、五条先生が私の方に目を向けたまま、穏やかで、しかし、どこか寒気を感じ

る声で話しかけてくる。

「……ねえ、瑠風。さつきの能力って何？見たことないものだつたけど。」

どうやら、私が使用した能力であるスキル付与に関しての質問のようだ。

とは言つても、私が持つてゐるこの能力の正式名称はわかつていない。ネロ・クラウディウスが使つてゐる皇帝特権の上位互換のようなものであることくらいはわかるけど。

なんて答えるべきか……ああ、そうだ。

「正式名称はわかつていませんが、能力効果は理解してます。いわゆる自分自身と、私が連れてゐるサーヴァントに新たな特性を一時的に付与したり、永続的な特殊強化を施すことができる能力ですね。使い方によつては、戦闘時のみ、呪霊を倒すことにより、倒した呪霊が持ち合わせていた呪力を吸収し、自身の強化にその呪力を回すことにも可能になります。そのため、最終的には特級すらも一瞬にして葬る力を会得することもできます。まあ、戦闘態勢を解けば効果は無くなりますが、永続強化の場合は、戦闘に入るたびに呪力ドレン効果が発動します。」

少しだけ考えたのち、先程使用した能力の効果を五条先生に説明する。

こちらの能力の効果を初めて聞いた恵くんは目を丸くして固まり、五条先生はなるほどと小さく咳く。

……なんか、五条先生にはこの付与能力の本質が見抜かれていそうだな。まあ、だか

らと言つて掘り下げるつもりもないようだけど。

「じゃあ、任務始めちゃおうか。」

五条先生が話を切り上げるように、任務を始めると口にする。すぐにそれに頷いて村の中に足を運べば、少しだけ寒気を感じた。

しかも、寒気の発生源は私のすぐ側。となると……

「……セイも戦闘態勢だね。」

「うん。こっちの方が、瑠風を守りやすいから。」

「ありがとう、セイ。」

「ワガハイは、当たり前のことをしてるだけだよ……？」

「そうだつたね。」

視線を横に動かしてみれば、やつぱり太歳星君が大きい方の太歳星君になっていた。先程寒気を感じたのは、彼が呪力のリミッターを外したこと意味するものだつたと言うわけだ。

あ、恵くんのお顔が真っ青……。すぐ近くで特級の呪力が一気に増えたからかな？

五条先生は、太歳星君の呪力をすぐ近くで感じっていても、「祟り神の呪力量やばすぎてウケる」とへラへラ笑つている。

最強の名は伊達じやないなあ……。肅正防御すら剥ぎ取る防御強化状態解除を使つ

たら普通に物理叩き込めるけど。

まあ、流石にしないけどね。

「恵くん。大丈夫だよ。確かに呪力量がおかしいし、臓腑の底から寒気を感じてしまうかもしれないけど、君がよく知る無邪氣な太歳星君と同じ子だし、ちゃんとした味方だからさ。」

「あ、ああ……。」

「あはは。やつぱりまだ恵にはちょっと刺激が強すぎたみたいだね。まあ、仕方ないけどさ。ガチもんの祟り神なわけだし。僕でも最初は冷や汗をかいたくらいには危険性が高い存在なんだから、無理もないよ。」

とりあえず、太歳星君の呪力に当てられて、少々顔色を悪くしてしまった恵くんに対しても、大丈夫だと言い聞かせるように声をかける。

それにより彼は落ち着いたのか、小さく頷きながら表情を引き締めた。

よし、恵くんの怯み状態も解除できたり、初任務を開始しようかな。

# 16. 瑠風のお仕事見学 戦闘開始編

恵くんが呼び出した玉犬と、私が連れている太歳星君が辿る呪霊の気配に従いながら、廃村の中を走り回る。

すると出るわが出るわの大量呪霊。魑魅魍魎の百鬼夜行かと軽くツツコミたくなるくらいには、結構の数が湧いて出る。

「呪霊大量すぎでは？」

「それな。」

恵くんが式神を使つて呪霊を祓う中、私はチラホラと現れる三級以下の呪霊を手にしているゲイ・ボルクを利用して倒していく。

コヤンスカヤからのアドバイスをもとに、人に能力を追加する力を利用して、戦闘時のみクー・フーリンの動きができるようにしてみたけど、これすごいわ。

本当に次々と呪霊を薙ぎ倒せる。戦闘なんて一回もしたことがないはずなのに。

なにこれチートじやん。でも、たまに人体つてこんな動きできんの？って言いたくなきるような動きがあるから、彼女が言っていた慣れるまでは筋肉痛になる恐れがあるって言う話は本当なんだろう。

「うわっなんか呪霊溜まりあるんだけど。」

「ああ。小さい呪霊が集まってる感じか。」

「ふーん。ねえ、ちょっと試したい技あるから試していいかな?」

「は?」

「呪力をそれなりに消費するから連発はできないけど、一発くらいなら多少疲れる程度でなんとかなるし。」

「いや、何をしようとして……」

「んー……対軍宝具?」

「……何だそれ?」

「見ていてればわかるよ。」

そんなことを考えながら呪霊を倒していると、目の前に小さな呪霊が大量に集まつてるのが見えてきた。

0巻の時に狗巻先輩と乙骨先輩が出会したあれみたいなやつだ。

低級呪霊の群れ……0巻のアレよりは小さいけど、それなりの数。

だからこそ、私のこれが役に立つわけで……。

手にしているゲイ・ボルクに流す自身の呪力を少しだけ増やす。すると、ゲイ・ボルクは赤い光を呼び始めた。

それを確認した私は、槍投げの構えをする。

「突き穿つ死翔の槍!!」

そして、ある程度呪力が宿つたことを確認したのち、手にしていたゲイ・ボルクを呪霊の群れ目掛けて放り投げた。

呪霊の群れ目掛けて真っ直ぐと飛んでいくゲイ・ボルク。少しの間飛翔していたそれに、変化はすぐに訪れる。

分裂……彼が単体に向かつて放つ【刺し穿つ死棘の槍】とは違い、魔槍の呪いを最大限開放して渾身の力で投擲することは、心臓に命中させるのではなく、一撃の破壊力を重視しており、相手に向かつて無数に分裂していき一発で一部隊を吹き飛ばすとされている。

因果逆転程の強制力はないが、一度ロツクオンすれば「幾たび躰されようと相手を貫く」という性質を持つため標的が存在する限りそこが例え地球の裏側だろうと飛んでいくのではと推察されているけど、実際見たことはないから謎である。

無数に分裂した朱槍は、目の前にいた呪霊を一匹残らず貫いた。次々と消滅していく呪霊の姿を見て、恵くんが目を丸くしている。

まあ、そりやびっくりするよね。何で一本の槍が無数に分裂した上、的確に呪霊を貫いてんだよって感じに。

それを聞かれても、これはそう言う性質なんだから仕方ないとしか言えないんだけど。

そんなことを考えていると、長物が風を切るような音が辺りに聞こえてくる。すぐに手を上に上げて手のひらを開いてみれば、そこにあるのが当たり前だと言わんばかりに、朱槍が綺麗に収まつた。

「……何でクー・フーリンが持つてる武器を使うのかと思つてたけど、こう言うこと?」

「はい。呪いの武器つて類だし、呪霊の数によつて応用が利くので。数が多くればさつきのを使うし、単体だけだつたり、不測の事態が発生した場合は少しだけ呪力を込めてそのまま突き刺せるので。後者の単体に叩き込む技なら心臓を穿つと言う因果を作つてから放つので必中になるし、なんらかの拍子にまれに外した場合も呪霊がすぐに回復できなくなるように回復阻害の呪いを残せるから便利なんですよ。ガンド……ルーン魔術の一種で、相手を指差すことにより病に陥れる、または病状を悪化させるつて能力も考えていたんですけど、複数の呪いを相手にする可能性を考慮すると、単体も複数体も相手にすることができるこれがやりやすいなつて思つて扱えるようにちよつと能力で自身をいじりました。」

「あはは。やることがぶつ飛んでるねえ……。」「よくやろうと思つたな。まあ、確かに応用は利きそつだが。」

「でしょ？」

槍の柄の部分で肩を叩きながら、恵くんの応用は利きそうと言う言葉に對して笑顔を見せる。

単体相手ばかりを相手にするなら本当にガンドでもよかつたんだけどね、コストは低いだろうし。

でも、今回みたいに低級でも複数体現れることがある可能性を考えたら、一体一体を指差すのめんどくさいからこうした方が早い。

まあ、その分呪力を消費するから、余程のことがない限りは連発に持ち込めないところが玉に瑕だけど、使い勝手の良さを考えたらガンドよりマシだ。

「さつきのを使うとしたらどれくらいの呪力を消費するのかな？」

「うーん……まあ、数値化するなら3桁くらいはガツツリ持つていかれますかね。少ししたら回復するけど。それで、単体に放つだけの方なら2桁くらいかな。」

「へえ……」

「ちなみに、全呪力を込めれば、さつきの以上の火力を出せる上、特級すらも一撃で消すことができるであろう技も一応ありますが、あまりにもコストが大きいし、最悪一ヶ月は動けなくなるので、余程のことがない限り使うつもりはありません。」

「まあ、それくらいの火力がある技なら、妥当と言えるリスクかな。」

「何でそんな技を作ったんだよ……」

「うーん……基本的にはサーヴァントたちが何とかしてくれるんだけど、万が一サー  
ヴァントが動き辛い状況が発生した場合、自分でも特級に対応できるように……かな。  
どんな呪霊が現れるかわからないからね。そう考えると、自分でも対処できるようにな  
らないといけないかなって。めちゃくちやでかいリスクできちやつたけど。」

「デカすぎるだろ。」

「まあね。でも、ジョーカーは持っていて損はないでしょ。」

「そうかもしないけどよ……。」

恵くんから心配気な視線を向けられる。なんだろう。絶対に使わせないようにしな  
きや的な意思も感じられる気がする。

まあ、でも、今はお仕事が先かな。

「呪霊の気配は?」

「……こっちの方はもういない。次は、あっちが多い……かな?」

「なるほど。呪霊多すぎでは?」

「…………。」

「…………五条先生?」

太歳星君に呪霊がいる場所を答えてもらう中、五条先生がやけに無言で一点を見つめ

ていることに気がつく。

不思議に思い彼に声をかけてみれば、どうやら恵くんも同じように疑問を抱いていたのか、2人分の声が重なつた。

「……ああ、ごめんごめん。ちょっと考え事をしててさ。……もしかしたら、僕も動かないといけなくなるかもね。」

「え……？」

五条先生の返答に目を丸くする。五条先生も動かなきやいけないって、それ特級案件つてこと？

いやいやいやいや、なんでお仕事見学の場でそんなことになっちゃうのさ。

「……瑠風。恵。警戒は怠らないで、なおかつ、身の危険を感じたらすぐにこの場から離脱して。サーヴァントたちの力があれば、すぐに離れることくらい簡単でしょ？」

「確かに簡単ですけど……」

「じゃあ、危なくなつたらすぐに離脱。これは一つの命令だから、ちゃんと聞いてくれるよね？」

五条先生から命令と言葉が出てくるつて相当なことだと思う。

つまり、ガチの特級案件つてわけか。……太歳星君も一緒に呪霊を倒していたから、呪力ドレインによる強化はできているけど、五条先生がそこまで言うとなると、素直に

従つた方が良さそうだね。

「わかりました。その時はすぐに離脱します。」

「うん。そうして。恵もね。」

「わかりました。」

五条先生の命令に素直に領けば、五条先生はそれでいいとばかりに笑みを浮かべる。

「それじやあ続けようか。2人とも、気を引き締めてよ。」

「はい。」

「太歳神。 いざと言う時は2人の離脱よろしく。」

「わかつた。」

太歳星君がいざと言う時は私と恵くんを離脱させることを承諾するなり、五条先生は村の中を歩き始める。

とりあえず、低級の呪霊は始末して行こう。

# 17・瑠風のお仕事見学 サーヴァント合流編

五条先生の忠告を守りながら、そこら辺に散らばっている呪霊をゲイ・ボルクを使って始末していく、時には太歳星君に呪力によるサポートを施して、一気に蹴散らしていくこと数分。

私の視界に一人の少女の姿が映り込む。鍵穴付きの扉からタコともイカとも形容することができない触手を呼び出して呪霊を捉え、引きちぎり、すり潰し、叩き壊していくその子は、間違いなくアビゲイルだ。

「アビー！」

「！あら、マスター！あなたの方から合流してくれるとは思わなかつたわ！待つててね。すぐにこいつらを消してあげるから！」

少女の名前を呼べば、金髪碧眼の愛らしい少女から、銀髪で薔薇色の瞳を持ち合わせている狂気の少女へと変貌していたアビゲイルはすぐに返事を返し、その場にいる呪霊の足元全域に鍵穴付き扉を出現させて、無数の触手で呪霊を殴殺する。

そして、この場にいた呪霊が全ていなくなつたことを確認しては、私の方へと駆け寄ってきた。

うん、いくら小さな少女でも、やっぱり第三再臨姿はちょっと露出が多いすぎるな……。流石にそれはいかがなものか……そう思つた私は、着ていた呪術高専の上着を脱ぎ、アビゲイルにさっさと羽織らせた。

「マスター？」

「あんまり女の子が肌を露出させたらダメだよ。」

「別に平気なのだけど、マスターが貸してくれるなら、遠慮無くこの上着は使わせてもらいうわ。それよりマスター、見てくれた？ 私、いっぱい呪霊を倒したわ！ 私の呪力もこんなに大きくなつたの！ もつともっと呪霊を倒して、全部全部私の呪力に変えてみせるわ！ そうすればあなたの役に立てるもの!!」

「そうだね。でも無茶だけはしないように。いくらサーヴァントの身であつても傷を作れば弱体化するからね。そこら辺はちゃんと覚えておいてね。」

「……わかつたわ。マスターがそう言うのであれば、無茶をしないように頑張るわね。それよりマスター。少しいいかしら？ さつき気づいたことなのだけど、この廃村、何か大きな力が眠つてていると思うの。お父様とはまた違つた、強大で悍ましい何かの力よ。」「……そうか。わかつたよ。」

アビゲイルから告げられた言葉に、思わず五条先生に目を向ける。すると、五条先生は無言で遠くを見つめたあと、小さく頷いた。

「うん。任務の難易度が上がつてゐみたいだね。もしかしたらアレがあるかも知れない。」

「アレってまさか……」

「そう。特級呪物の一つ、『両面宿儻の指』のうちの一一本だ。」

「！」

五条先生の言葉に、恵くんが言葉を失う。私も少しだけ目を細めた。

特級呪物、『両面宿儻の指』……呪術廻戦の原作に大きく関わるアイテムの一つ。四本の腕を持ち合わせていた呪いの王。その指を喰らつたことにより、物語の主人公である虎杖悠仁は呪いと戦う世界へと身を投じることになる。

そして、そんな悠仁が経験することになるのは数多くの出会いと別れ。打ち拉がれてしまうような、重苦しい試練とのぶつかり合い。

なんともまあ難易度がハード突き抜けてルナティック並みの世界である。  
……物語の元凶となる宿儻の指がこんなところにあるとは思わなかつた。

まあ、本当にあるかどうかは、目で見て確かめないといけないんだろうけど。「とりあえず、コヤンスカヤとも合流しましよう。もしかしたら詳しい話が聞けるかもしれません。バラけた時、彼女はセイが大凶と告げた方角の方へと移動していて、今もその付近で呪霊を倒しているようですよ。」

「彼女、あつちの方に行つたんだ。」

「わざわざ大凶の方に行つたのか……」

「まあ、狐さんならなんとかなりそうではあるけど。」

「彼女は……隕石のようなものだから、ワガハイよりも力はあるし……」

「そう言えばそうだつたわね。あの狐さんの宝具、10万tの衝撃をおこす隕石攻撃だもの。」

「ワガハイは……確かに祟り神なのだけど、物理的な能力だと、彼女に絶対に敵わない。」

「コヤンスカヤは能力関係の比較対象外にした方がいいと思うんだけど、私だけかな?」

「隕石つておい。」

「……瑠風が連れてる子たち、規格外すぎない?」

私たちの会話を聞いて恵くんと五条先生が引きつった笑みを浮かべる。

サーヴァントが規格外過ぎるのは当然だろうと言いたいけど、今話しているのが世界規模に影響を与える宇宙からの飛来物と何ら変わりない存在の闇のコヤンスカヤだからね……当然と言つていいのか悩みどころである。

でもなあ……カルデアのサーヴァントって世界規模に影響与えるものがかなりいるし、中には本気で力を発動させれば隕石の爆発による都市の消滅どころか、世界そのものをぶつ壊せる乖離剣持ちがいるしなあ……。

他にも敵味方関係なく弱体化させて自身が圧倒的な力を得たりする皇帝様とかもいたんだよなあ……。

……カルデアってやつは色々ぶつ飛んでるな。それだけあの世界がヤバイって話なんだけど。

「瑠風～？ 瑠風ちや～ん？ なんで遠い目してるのでかな？」

「瑠風……まさかとは思うが、あのコヤンスカヤって名前のサーヴァント以上に規格外な奴が手札にいるとか言わないよな？」

「……いやあ……手札にはいないと思うんだけど、私の知識内にはサーヴァントと呼ばれる存在が規格外のインフレを起こしてて内容がありまして……。私が持つてゐわけじやないんだけど、世界レベルでどんでも現象起こすサーヴァントってかなりいるんだよね。」

「絶対呼ぶなよ。」

「下手したら收拾つかなくなると思うから呼ばないでね？」

「呼ばないよ。……多分。」

「多分？」

「多分つて言つた？」

「……イツテナイデスヨー……」

しらを切るように言葉を紡げば、なんとも言えない視線を二人から向けられる。

あはは……そんな目で見ないでくださいお願ひですから。

でも……多分呼べないと思うんだよね……。何かしらの条件を満たせば呼べると思うけど、今はその条件を満たせていないような気がするし。

だから、まだ安心できると思うけど。

「そんじや、コヤンスカヤと合流しましようか。彼女の呪力が結構増えているし、相当の数の呪靈が出てるみたいですから。」

「棒読みがめちゃくちゃ気になるんだけど、まあ、彼女との合流が先か。」

「深掘りしてもよくわからないような気がしますけどね。」

そんなことを考えながらも、私たちはコヤンスカヤがいる方向へと向かっていく。

もちろん、道ゆく途中途中で呪靈が湧き出てくるけど、私と太歳星君とアビゲイル、それと、恵くんが使役している式神たちの力で全て薙ぎ払うことができる。

時折五条先生も呪力を纏わせた物理で呪靈をのして走り抜けるけど、基本は私たちに任せるみたいだ。

まあ、私のお仕事見学だもんねこれ。呪靈を祓うことがどう言うものかを学ぶためのチュートリアルなら、あまり先生も手を出さないか。

「瑠風。呪靈を倒した時に残る残留した呪力は、瑠風も吸収できると思う。」

「え？」

休息なしの真・格闘王の道をさせられている気分だなと思いつながら走り抜けていると、太歳星君から何やら気になる言葉を告げられた。

残留した呪力を吸収できるってなに？

「マスターの一つの特性よ。私たちみたいに、倒した呪霊の呪力を回収することができるので。あなたも、呪霊の呪力でわずかに回復することができるのよ。強い呪霊を倒せばその強さに応じた分沢山の呪力を回収することができて、自身の呪力やサーヴァントに流す呪力を増やせるわ。もちろん、そうすることに私たちの力は大きくなり、道具の展開もすぐできるようになるの。」

「マジか。知らなかつたな。」

初耳の能力を教えられ、少しだけ引きついた笑みを浮かべてしまう。

まさか、自分の特性に素で呪力を吸収し、いろんな力へと変更することができるようになつてているとは思わなかつた。

でも、それならゲイ・ボルクを使用する際に減少した呪力を少しづつ回収できるから助かるな。

ま、抉り穿つ方を使つたらそれも意味ないんだけど。

「瑠風？ 知らなかつたのそれ？」

「全くと言つていいほどに知りませんでしたね。どうやら私は、自分の能力を把握しきれてないみたいで。ですが、サーヴァントはそれらをほとんど知つてゐたいです。セイは……ちょっとよくわかりませんが。」

「ワガハイは……瑠風の能力を把握できていないと思う。瑠風のサーヴァント……であることは間違いないのだけど。」

「そう。」

……ふむ……やつぱり太歳星君は、私の能力を把握していないうようだ。

となると、考えられるのはコヤンスカヤやアビゲイルとは違う方法で顕現したから……つてことになるんだろうけど、その答えを探すのは今度でいいか。

「あ、いたいた。コヤンスカヤ！」

「おや、マスターではありますか。そちらの方は終わつたのですか？」

「うん。だから合流したんだよ。」

「なるほど。まあ、予想通りと言つたところでしようか。こちら、見ての通り、呪霊が次々と無限湧きしているものでして。」

「みたいだね。何か原因があると思うんだけど……」

「ああ……それでしたらおそらく、こちらの奥の方に原因があるかと思われます。明らかに、他とは違う気配が存在しておりますので。まあ、私の敵ではないと思ひますが。」

「もはや祟り神であるセイ以上の力になつてゐるもんね、今のコヤンスカヤ。いつたいど  
れだけの呪霊を取り込んだのそれ。」

「そうですねえ……10～20以上は取り込んで力へと変えさせていただいた気がしま  
す。あ、いくつか獣の怨嗟から生まれた獣型呪霊がいたので、しつかりと眷属化いたし  
ました☆」

「…………だろうね。視界にもちらほら映つてるもん。獣の姿をした呪霊。あと、君、回収し  
た呪力を利用して新しい獣型の呪霊作つただろ。」

「もちろんです。能力値としては、二級から準一級くらいでしようか？取り込みまくつ  
た呪力をこねこねと練りまして、新しく生まれ変わらせました。」

「まあ、戦力が増えるのはありがたいからいいけどね。」

「いや、呪霊が呪霊を取り込んで回収した呪力を使つて新しい呪霊を作んなよ。」

「呪霊操術ならぬ呪霊創術つてこと？」

「…………無駄に上手いことを言わないのでください、五条先生。」

「じゃあ、恵と瑠風はここから離れて。もし、本当に『宿儺の指』があるのでしたら、  
二級術師でも手に余る呪霊が集まつて來てるかもしれないからね。これだけ呪霊が集  
まつてると、封印がかなり脆くなつてゐる可能性もあるし、多分、いや、きっと二人にとつ  
てはちょっと荷が重い。」

「……わかりました。」

五条先生の指示を聞き、私と恵くんと、私のサーヴァントである太歳星君、アビゲイ  
ル、コヤンスカヤは、ここまで道のりを戻っていく。

少しだけ背後を振り返ってみれば、五条先生が私たちにヒラヒラと手を振つたあと、  
こちらに背を向けて奥の方へと走り去つていくのが見えた。

……なんと言うか、謎にカツコよく見えてしまつた気がするんだけど気のせいだろう  
か…………？

# 18・瞬間顯現、少女を守る神格の氣配

恵くんと一緒に廃村を駆け抜けること数十分。私たちは廃村の入口付近まで戻ることができた。

「呪靈が湧いてくる気配はない。とりあえずは一安心だろうか。

「呪靈の巣窟だつたな……」

「五条先生の話がマジなら、この廃村のどつかに特級呪物がある。となれば、呪靈のバーゲンセールみたいになるのは仕方ないことだと思うぞ。」

「特級呪物……確か、とんでもない呪い……呪力が宿ってるもののことを言うんだよね？」

「ああ。」

村の中に学校でもあつたのか？と呟く恵くん。

あらゆる感情の受け皿となる場所になつてゐるって原作でも言つていたし、もしかして、村の子供たちが通つっていた学校でもあるのだろうか？

そんなところに『宿儺の指』があるとか、とんでもないな。

原作開始前の数ヶ月くらい前だから、時期的には変わらないだろうし、ここにある指

の封印もだいぶ劣化していたのかな。

「『宿儺の指』は、呪物の呪いが強すぎるからな。もし、本当にここにあるのだとしたら、経年劣化で封印がかなり緩くなつてゐるはずだ。となると、もはやそれは呪靈にとつて力を底上げするための餌にしかならない。村で自然発生する呪靈も、その呪いを嗅ぎつけて外からやつてくる呪靈も桁違いになるのは目に見えている。ま、それは廃村の奥の現状を見てたらわかるだろ。」

「うん。まるで真・格闘王の道をやらされてんのかつてくらい連戦したね。」

「……急にカー○イの話すんな。」

……惠くん、カー○イ知つてるんだ。意外だつた。

「こんなに無限湧きするとは思わなかつたけど、封印が緩くなると、呪いを大量に呼び寄せることで本當だつたんだ。」

「ああ、そうか。瑠風はこつちに来てから呪いとか呪物のことも知つたもんな。その割には呪靈を使役してゐたが。でも、やっぱり現実味がまだ湧いてなかつたか。」「否定はできないかな。」

恵くんと話しながら、廃村の入口付近で五条先生の帰還を待つ。

今のところ呪靈の気配は奥の方にしかないけど、念のためにサーヴァントや惠くんの玉犬たちは、呪いが現れないか警戒をしている。

……奥の方から戦闘音が聞こえてくるな。五条先生がしつかりと呪霊を祓つてゐるだ。

ちよつと時間がかかるのは、無限湧きスポットになつちゃつてるからとかかな？一撃で沈めていそうだけど。

そんなことを思いながら廃村を眺めていると、辺りに寒気が発生したことに気づく。一番強い寒気を感じるのは……私の影！？

「「瑞風！」」

「「マスター！！」」

慌てて寒氣がする方へと目を向けると、同時に影の中から呪霊が現れた。

それは、明らかに二級ぐらいの力を持ち合わせてゐる呪霊だつた。

誰かの影に入り込むことにより、気配に気づかることなく近づけるのだろうか？影から浮上してくるまで、そこにいることがわからなかつた。

……………ヤバいかも。

呪霊の手にあり鋭い爪。それが私めがけて振り下ろされる。

躱すための猶予はない。サーヴァントたちも間に合わない。動搖により、ゲイ・ボルクを構えるタイミングを見逃してしまつてゐる。

この状態が指し示すことは……。

『低俗な呪い如きが、誰のもんに手を出そうとしてやがるんだ？消え失せろ。』

景色がゆつくりと動く中、不意に、脳内に響くような声が聞こえてくる。

それにハツとした瞬間、私に襲いかかって来ていた呪霊が一瞬にして消え去った。まるで、無数の刃でも食らつたのかと言いたくなるほどに、その身をバラバラに刻まれながら。

「え？」

突然のことに戸惑いの声をあげる。いつたい、私の目の前では何が起きた？

「瑠風！！」

混乱しなら目の前の現状を眺めていると、恵くんが私の名前を呼びながら走り寄つて来た。

すぐに彼の方に目を向けてみれば、その表情にかなりの焦りが浮かんでいる。

「ごめん、ちょっと油断したみたい。」

「いや、俺が気付かなかつたのも問題がある。悪かつた。怪我はないか？」

「うん。なんとかね。」

私のことを気にかけてくれる恵くんを安心させるため、小さく笑いながら無傷であることを伝えれば、彼はハツとしたような表情を見せたあと、ある一点を見つめる。

彼の視線を追つてみれば、先程バラバラにされた呪霊の亡骸がそこにはあつた。

「何が起こつたんだ？瑠風に襲いかかつたかと思えば、急にバラバラになつたように見えたが……」

「……わからない。ただ、呪霊がバラバラになる前に、声を聞いたよ。」「声？何も聞こえなかつたぞ？」

「でも、確かに聞こえたんだ。『低俗な呪い如きが、誰のものに手を出そうとしてやがるんだ？消え失せろ』……つて、どことなく殺意がマシマシで、どこか……懐かしく感じる声が。」

「……………そうか。」

恵くんの質問に答えれば、彼は短く返事をしたのち、傍らにいた玉犬に、目名前にある呪霊の亡骸を喰らうように指示を出す。

それを聞いた玉犬たちは、すぐに呪霊に近寄つて、その身体をバクバクと食らい始める。

「お疲れサマンサー。」

玉犬たちの餌なのかな……と無言で眺めていると、どこからともなく聞き慣れた声が聞こえてきた。

「こつちの方に呪霊出て来たんじやない？それなりに強めのやつ。恵なら倒せるレベル

「のね。」

「ええ。」

「狙いは私でしたけどね……。私の影に入り込んで潜んでたみたいで。それで、いきなりバツと出てきて襲つて来ました。」

「……え、マジ？ 怪我はしなかった？」

「はい。なんとか。」

私の返答を聞いて、少しだけ五条先生が安堵したように息を吐く。しかし、何かに気が付いたような反応を見せたのち、おもむろに彼は目隠しを外した。

「五条先生？」

急にイケメンフェイスを出さんでくださいとくだらないことを考えながらも、目隠しを外した先生に声をかける。

だが、彼は返事をすることなく、私のことをじつと見つめてくるばかり。

「五条先生。どうしたんですか？」

「ああ、うん。ちょっとね。」

首を傾げながら五条先生を見つめていると、無言で辺りを見渡したのち、再び私の方へと視線を戻す。

そして、何かわかつたのか、小さく笑いながらなるほどね……と呟いた。

何がなるほどなんだろうか？全くもつて理解ができない。

「瑠風。君、もしかして何かに助けられた感じ？呪霊や惠たちの呪力の残滓じやない、全く別物の……しかも、呪いなんかよりも厄介で強大な力の残滓が辺りに散らばってるんだけど。」

「…………確かに、助けられましたね。呪霊に襲われた瞬間、声が聞こえて来て、それで、一瞬にして呪霊がバラバラに刻まれました。」

五条先生の質問に答えると、彼はやつぱりね……と咳きながら、苦笑いをこぼした。「なんとなく気付いてはいたけど、今回のこれで確信できた。瑠風を守つてる強大な力。それ、完全に神格を持った何かの力だね。いつたい、何をやらかしたらそんな存在に好かれるんだか。」

五条先生から告げられた言葉にフリーズする。

は？私を守つてる力って、神様の力なわけ……？

「神格つて……そんなことあり得るんですか？」

「実際に目の前にいるつてことはあり得るつてことだよ。だけど、滅多にない……といふか、数千年に一度あるかないかの事象だ。これ、コントロールできるようになるのかわからなくなつて来た。まあ、それでもある程度は使いこなしてもらわないといけないんだけどね。」

五条先生の言葉に無言になる。まさか、私みたいなのが神格に入られてはいるなんて思わなかつた。

でも……なんだろう……？ 何か、思い出せそうで思い出せないような……だけど、何かしらの留め金が外れかかっているような……そんな気がするような……？

よくわからないモヤモヤに苛まれながら、どんな神格が私に力を与えているのか考える五条先生と一緒に首を傾げる。

その際、僅かに海のような匂いが鼻腔を通り抜けた気がするけど、海は近くにはすばし、気のせい……だよね？

潮風が不思議な力に首を傾げる中、濤声の中でその気配を感じながら、静かに目を閉じる者がいた。

それがいるのは現実から離れた世界。目で見ることは叶わずとも、少女の魂に刻まれた一つの海原。

その姿はいわゆる青年だつた。黒にも見える濃紺の髪を、海原を走る潮風が揺らす。しかし、その青年は不意に感じた何者かの視線に意識を向ける。

閉じられていた瞼を開き、海原と同じ蒼の瞳を虚空へと動かし、彼は小さく笑みを浮かべた。

「へえ……なかなか面白え眼を持つてゐるガキがいるじやねえか。完全とはいかないようだが、俺のことが見えてやがる。」

吐き捨てるように呟かれた言葉。声音はどこか穏やかで、心の底から楽しんでいるようなものだつた。

だが、青年が纏う氣配は一瞬にして下降して、寒氣を催すものへと変わる。

「誰の許しを得て俺を見てやがるんだか。力を持つてゐただけの人間如きが、無断で見ていいと思つてんのか？」

軽い殺氣と怒氣を含んだ声音が、海原の濤声に消えていく。

だが、青年は背後から聞こえて來た女の声を耳にするなり、その殺氣をすぐに霧散させた。

青年が声の方へと歩いてみれば、そこに黒髪の少女が横たわつており、胎児のように丸まつて眠つていた。

「……最近、こいつ寝返りを良くするようになつたな。ちらほらと声も聞こえてくるし、そろそろ俺を思い出す頃か？」

眠る少女の頬に手を伸ばし、無防備にさらされている頬に触れる。

先程までの怒りを纏つていた彼はどこへやら。その手つきは壊物に触れるかの如き柔らかなものだつた。

「……つたく。思い出さねえ方が幸せだろうに。俺を思い出しちまつたら、お前、また俺から逃げられなくなるぜ？ それでもいいのかよ。」

呆れたような声で青年は言葉を紡ぐ。しかし、その言葉と感情とは裏腹に、青年の表情には早く俺を思い出せと言う欲が見え隠れしていた。

海原のような蒼の瞳には、涼しげな色とは真逆の熱が宿つており、妖しい光がゆらめいている。

「……せつかく来世では好きなように生かしてやろうと思つたのによ。思い出したりなんかしたら、またお前は俺の水牢の中に逆戻りだぞ。人間との恋愛なんざ不可能で、結ばれることも許されない、自由とは程遠い生き方になる。それでもお前はいいつてのか？」

ポツリポツリと呟きながら、青年は鼻で笑い飛ばす。

それが嫌なら思い出すな。忘れていれば力に制限はかかるてしまふが、人として最期まで走り抜ける道を選ぶことができるようになるのだから。思い出すなら覚悟を持ってと、音にすることはない忠告をのせて。

だが、その忠告とは裏腹に、青年はさつさと思い出せと言う感情を荒波のように激ら

せる。

「そうすれば、自分という海神の檻に、再び閉じ込めることができるのだから。」  
 「まあ、もうしばらくはこの力は機能するし、こつちの力が効いている間にゆっくりと考  
 えるといいさ。記憶に触れるも触れないも、全てお前の意思一つで決められる。だが、  
 触れるという道を選んだ瞬間、お前は再び俺の手中へと收まることになるぜ？まあ、俺  
 自身はそつちの方がいいけどな。……さあ、どれくらいの期間、お前は俺の海から逃げ  
 られるかな。」

“逃がすつもりも毛頭もないが”……そんな呟きを最後に残し、青年は目の前で眠る  
 少女の魂に口付ける。

その姿を知るのは、この領域に響き渡る穏やかな濤声と、口付けをした当本人のみで  
 ある。

## 19. 記憶のカケラ part II.

呪霊が無限湧きしていたのは、廃村に残されていた“宿儻の指”的いだつた。封印が緩まつていたことと、そんなことを知らないで廃村に肝試しにやつてきた人々の負の感情が、かなり集まつていたことで、あのような事態になつていていたらしい。

“宿儻の指”を見せながら、そう説明してくれた五条先生。彼は、しばらく“宿儻の指”がありそうな場所を探してみると私たちに告げ、この日の任務の終了を口にした。

それを聞いた私は、そろそろ原作が始まるんだなと考へた。

“宿儻の指”から始まる、一人の少年の地獄のような物語。

その物語の中で、私はどんな立ち振る舞いをしたらしいのだろうか。

……廃村で私を助けてくれた神格の力を使いこなせるようになれるのだろうか。

そんな不安に駆られながら、自身に割り当てられた自室にて眠りについた。

程なくして聴こえて来たのは穏やかな濤声。

部屋の中で眠つていたし、海が存在しているわけないから、これはきっと私の夢。

でも、ただの夢ではないようだ。

感じ取れるのはどこか懐かしい神格の気配。鼻腔をくすぐるのは海の匂い。

頭を撫でてくるその手つきは優しくて、触れてくる温もりはとても温かい。  
夢はここまでハツキリとした感覚を感じない。だけど私は感じている。

どこか、前見た夢と似たような……だけど、あの時間軸よりはかなり昔のような……  
そんな気がする。

『よお。目を覚ましたみたいだな。』

不意に頭上から声が聞こえて来た。記憶の中の私は、その声に反応するように、ゆるりと体を起き上がらせる。

どうやら眠っていたようだ。この記憶の中の私は。

『――。』

音として聴こえない言葉が紡がれる。これもあの時によく似ている。記憶の中にいる誰かの名前を、口にすることができない状況に。

『お前の主神様がせつかく嵐海殿に連れて来てやつたって言うのに、眠つて相手にしてくれないとひどくねえか?』

『ごめん。ちょっと昨日夜更かしちゃつて。』

『は?夜更かし?なんで夜更かししたんだお前?まさかとは思うが、俺以外の奴と……』  
『ちょ、なんでそんな話になるのさ?!巫女の仕事をしていただけだよ!!』

『本当か?俺以外にうつつ抜かして浮気とかしたんじやねえのか?』

『そんなことできるわけないだろ。私は問題ないかもしだれなあけど確実に相手が死ぬし、そもそも私は——以外と夜をするつもりはないと何度も言つてゐるじやないか。』

だけど、あの時の記憶とは全然違う。あの時の記憶は、相手の顔を認識できなかつたのに、この記憶では、相手の顔も輪郭も、髪の色すらも把握できる。

目の前にいるのはガタイのいい青年。たくましい筋肉を持ち合はせている、黒い髪を持つ男性だ。

瞳の色は海の色。宝石に例えるならシーブルーカルセドニー。美しい鮮やかな蒼の瞳を持つ、大切な私の主神様。

……あれ？

なんで私はそこまで彼を認識できているんだろう……？

『まあ、そうだけよ。』

『心配性だね。大丈夫。本当にただ巫女としての仕事をしていただけだよ。なんせ、年末年始だからね。神々の領域に足を運び、言葉を交わすことが唯一許されている人間という立場にある分、無病息災や必勝祈願、他にも様々な祈願に引っ張り出されるから忙しいだけだよ。神々に近い分、私が祈祷すると効果がかなり出るらしいんだ。』

『まあ、人間つつても、ルカに名前を与えたのも、巫女つつて立場に座らせたのも全部

俺だからな。お前には俺とほぼ同格の神性があるし、ついでに言うと俺の——だし、そりやお前が起動したらかなりの効果が出るわな。』

『……ちよつと待つて？ 神性諸々の話ははじめて聞いたんだけど？』

『はじめて言つたからな。』

『私人間だよね!!』

『ああ。人間だな。寿命とかは人間と全く同じだ。だが、魂に宿つてる神性はこの海神様と同格だぜ？』

『なんですか!?』

『なんでって、当たり前だろ？ お前は俺の巫女であり、俺の魂の——なんだからよ。まああれだ。俺みたいな海神に気に入られて捕まつた時点でアウトつて奴だ。』

『惚れられた時点でアウトつてことか……!!』

『ご名答。ま、諦めて受け入れるんだな、何もかも。』

『すぐに受け入れ難い真実な氣もするけどね!!』

どこかの神社とは違う認識と状況に混乱しながらも、私は目の前で起こっている過去の自分と、神格を持つ青年のやり取りを眺める。

……人間だけど神性を持つていて、その神性は目の前にいる蒼眼の青年と同じもので、私は青年の——で……うん?——つてなんだっけ?

「へえ、随分と懐かしいもん見てんじゃねえか。」

「?」

引っ掛けりを覚える単語に首を傾げていると、背後から誰かに抱き寄せられた。

驚いて声の方へと目を向けてみると、そこには記憶の中にいた青年と全く同じ青年の姿があつた。

「いつの記憶だつたか……ああ、そうだ。お前がまだ十六歳の時の大晦日の記憶だな。俺が暮らしてゐる神殿である嵐海殿に連れて行つて、一人きりで年越しをしてやろうと思つてたのに、お前はグースカ寝やがつて……クソ姉貴の目から離れたつてのに夜伽もすることができなくて、そんでもちよいと苛立つてた時だつたな。」

言葉を失つて固まつていると、青年が目の前の記憶がいつ頃のものだつたかを口にして、懐かしむように笑みを浮かべる。

その姿をじつと見つめれば、彼は私の方へと目を向けて、穏やかな笑みを見せた。

「ルカ。これ以上記憶を眺めていたら、お前にかけといた記憶封じがぶつ壊れるぜ？ そ  
うなつたら最後、お前はまた俺のところに戻つてくることになる。まあ、お前の爪の先  
から頭のてっぺん、髪の毛一本から魂の全部まで元は俺のもんなわけだし、俺としては  
戻つてきてもらえる方がいいんだがな。ただ、今のお前は、俺の記憶を封じてゐるから  
自由に過ごせるようなもんで、俺を思い出したら最後、その自由は消え失せる。そう

言う縛り。そう言う決まり。そう言う繋がりが俺たちにはあんだよ。」

しかし、その穏やかな笑みはすぐに消え、真剣と言う言葉が当てはまる表情へと塗りつぶされる。

「……だからこれは一つの忠告。そして、一つの助言だ。人間としての当たり前の幸せを掴み、人間と言う枠組みの中での終わりを迎えたきや俺を思い出すな。多少能力の制限がかかるが、呪いを祓うだけの力を使うだけなら制限された能力でも十分いける。だが……もし、力を解放し、あらゆる生き物を救うために力を振るうと言うのなら、当たり前の幸せと当たり前の最後に別れを告げて俺を思い出せ。お前が持つ神性を取り戻しや、全員を助けることなんて容易くなるし、お前が使っていた武器も解放できる。」  
紡がれた言葉を脳裏で反芻する。

人間としての当たり前の幸せと、人間としての当たり前の終わりを迎えたければ記憶を封じたままに放置しろ。

当たり前を切り捨てる覚悟があるのであれば、記憶を全て思い出せ。

……なんとも難しい選択である。

でも、みんなを助けると言う意味では、全てを思い出す必要があるのか……。

「別にすぐに決めないといけないわけじゃねえよ。ただ、全ての力を取り戻すには、かなりのメリットとデメリットがあるってことを頭の片隅に入れときやいい。」

無言でどちらを選ぶべきか考えていると、穏やかな声で今決めなくともいいと告げられる。

考えるために外していた視線を青年の方へと向けてみれば、彼は小さく笑つて私のことを見下ろした。

「力を取り戻したいと思ったなら、俺のことを考えろ。そうすれば自然と俺の生得領域にお前は導かれる。ついでに、前思い出したであろう邪魔臭え狐野郎も呼んでやるからよ。だが、俺のところにやつて来て、記憶と力を解放した場合、お前はまた俺から逃げられなくなるぜ。体を交えることができるのも、睦ごとを囁けんのも、全部俺だけになる。つまり、俺以外の奴と恋愛なんてできなくなるし、子を成すこともできなくなるつてわけだ。まあ、俺が納得できる野郎となら、多少なりとも許してやらなくもないが、基本は俺優先になるつてわけだな。……よく考えてから俺のところに来いよ。」

青年の大きな手が私の両目を覆う。それに従うように目を閉じれば、意識が少しづつ遠くなつていくことに気づいた。

あの時と一緒。かの靈獸との記憶を思い出した時と同じだ。

でも、どうしてだろう？現実で目を覚ましたとしても、この夢だけは、この逢瀬だけは、忘れていないような気がする。

「そろそろ起きる時間だろ？なら、このまま現実で目を覚ませ。六眼持ちのガキンチョ

が、何かしらの知らせを持つてくるだろうしな。」

六眼持ちのガキンチョ……って、どう考えても五条先生なんですがそれは……。

ていうか、あの人をガキンチョ呼ばわりってなんだ。

「まあ、神代の頃から生きてるんでね。俺にとつちや、人間は全員ガキンチョなんだよ。ああ、だがルカのことはガキンチョ扱いしないぜ？お前は俺の大切な女。俺が唯一特別と見る愛し子だ。だから、自分もガキンチョだとか言う勘違いだけはすんじやねえぞ。」

人の心を読むなし。

言葉を発していいのにスラスラとこっちが聞きたい答えを口にしてさ。助かると言えば助かるけど、なんかちょっと解せない。

そんなことを考えていると、それも読んだのか青年はくつくつと喉を鳴らすような笑い声を漏らした。

「なあ、ルカ。」

ちよつと不服だと思いながら、意識を手放そうとしていると、穏やかな声で名前を呼ばれる。

同時に両目を覆つていた手が離れ、再び世界が視界に入る。

気のせいだろうか？先程まで見えていた記憶の景色とは全く違う景色が辺りに広がっているような……。

そんなことを考えていると、ふわりと体が傾いた。

背中から地面へと倒れていき、柔らかい布の上に倒れ込むことで体は静止する。見えるのは木造りの天井と、私の大切な主神様。

「お前をここで待っている。だから、できれば俺を思い出す選択を選んでほしい。だが、それじやあ幸せになれないと思うなら、俺を忘れて今生を謳歌してくれ。」

どことなく寂しげな笑みを浮かべながら、穏やかな声で言葉を紡ぐ彼の姿を見て、私は無意識のうちにその手を伸ばしていた。

触れたのは彼の滑らかな頬。相変わらず彼は暖かい。

私が手を伸ばしたこと驚いたのか、彼は一瞬目を丸くした。

しかし、すぐに小さく笑い、再び私の両目を片手で覆う。

「おやすみ、俺のただ一人の愛し子。俺はお前を見守っている。お前のことを求めてはいるが、お前の幸せも願っている。まあ、お前を世界で一番幸せにできんのは間違いく俺だろうがな。」

自信満々に告げられた言葉に、思わず小さな笑い声を漏らす。

彼の名前は思い出せないけど、主神としてではなく、ルカと言う一個人として、私も彼を大切にしていたことだけは記憶にあるから、とても懐かしいと思つてしまつた。

「ありがとう。うん、いざと言う時は君の元へと足を運ぶよ。その時が来たらお願ひす

るね、私の主神様。」

「ああ。」

短い会話を最後に交わし、私はこちらの意識を手放す。  
その際に感じ取れたのは、彼の唇の温もりだつた。

「……………マスター。マスター。起きてください、マスター。」「……………」

意に聞こえて来た声に目を覚ます。

静かに瞼を開けてみれば、そこにはコヤンスカヤの姿があつた。

どことなく表情は嫌悪というか、うげえ……とでも言いたげな表情が浮かんでいる。

「どうかしたのかな、コヤンスカヤ？」

「どうしたもこうしたもありません。なんて気配をさせてるんですか？明らかに神格の氣配なのですが？」

「ああ…………いや、きっと夢を見たせいだろうね。まあ、夢と称するには、あまりにも形がありすぎるのだけど。」

「……マスター？あなた、そのような話し方をされていましたか？」

「うん？ああ……これかな？まあ、ちよつといくつか思い出してしまったものがあつてね。少しばかり、こつちにも影響が出たみたいだ。」

「……どうやら、夢の中で彼に出会したようですねえ。」

「うん。」

「ですが、完全に思い出してはないみたいですね。」

「そうだね。思い出してしまつたら、確かな力を得る代わりに、いくつか縛りができるしまうから、まだ思い出していないよ。まあ、忘れていたら忘れていたで、別の縛りと抑制が入つてしまうのだけど。」

「でしようね。……思い出さない選択を選ぶのですか？」

「今のところは。」

「はい？」

コヤンスカヤに明確な疑問と言う感情が現れる。

今のところはとはいつたいどう言う意味ですか？つて聞きたいんだろうな。

そんなことを思いながら、私は静かに言葉を紡ぐ。

「今はまだ、記憶を取り戻したりはしない。明確に必要なタイミングが出てくるまでは封じておくつもりだよ。まあ、なんとなく近い将来必要になりそうな予感はあるけど

ね。」

小さく笑いながらそう答えれば、コヤンスカヤはしばらく私を見つめたのち、そうですがと小さく呟く。

「……」の話は終わりにしようか。ところで、なんか私に用事があつたんじゃないの？」  
 「ええ。確かに用事はあります。あなたからかの神格の気配を強く感じたので、思わず忘れておりました。五条さんからお話があるようですよ。指でも見つかりましたか？」  
 と聞いたところ、そんなにすぐ見つかるわけないよと返されたので、別件か、これからのことについてのお話があるのでないかと思われます。」

「そつか。わかつた。すぐ行くよ。」

とりあえずコヤンスカヤから話しかけて来ていた用件を聞いた私は、すぐにその場で寝巻きから制服へと着替える。

そう言えば、太歳星君とアビゲイルがいないような？

「太歳神とアビゲイルさんなら、マスターが目覚める前に部屋から出でていかれましたよ？」マスターが夢を見ている時に、とてつもなく大きな神格……さらに言うと、陰陽で示すところの陽……荒御魂と英雄神の側面を持つ、大海原の神格の強大な力が全体的にマスターを覆つていたので、息苦しさを感じたのではないかと思われます。悪性持ちからしたら、マスターが本来持ち得る能力は、少々居心地悪く感じてしまうので。」

「おつふ……そつか。お高めのお菓子か、好きなお菓子を買ってお詫びしないといけないね。」

「それがよろしいかと。あ、私はケーキと高級紅茶で手を打ちましょう。こちらもかなり不快感MAXでしたしね。もちろん、買ってくださいますよねえ？」

「あはは……了解……」

苦笑いをこぼしながら、コヤンスカヤの交渉を受け入れる。

かなり高い奴買わされそうだけど……まあ、なんとかなるかな。父さんからおかしな量のお小遣いもらつてるし。

そんなことを思いながら鏡の前に座れば、コヤンスカヤがすぐに私の背後に回つて來た。

「ん？」

「たまには気分転換に髪型を変えたらどうかと思いまして。少々櫛とシュシュをお借りしますわ。」

「え、あ、はい。」

不思議に思いながら眺めていると、私の手元からシュシュと櫛を取り上げて、こちらの髪を弄り始めるコヤンスカヤ。

髪質としては私と同じのようですねえ……とかぶつぶつ言いながら手際よくヘアア

レンジを施してくる彼女の姿を鏡で眺めながら、私は大人しくその場に座る。  
……さて、五条先生からの話とはなんなのやら。

## 始動、呪いの物語

### 20. 物語の始まり

五条先生からされた話は、これからも恵くんと一緒に行動を取り、任務にあたれと言う話だつた。

どうやら、今回の初任務でどれだけ私が動けるか分析した結果らしく、これなら恵くんと一緒に任務に当たつても十分動けると思つたようだ。

私としては願つてもないこと。これで、本格的に原作に介入することができるし、救済行動も取ることができる。

ちなみに、五条先生曰く、上層部に私の術式のことは話したとのことだ。

なんでも、あまりにも新しく入つた呪術師の力が不明瞭だから、話せ。さもないとそ

の呪術師の入学、及び活動を許可しないと言われたらしい。

脅してくるとかマジないよねー、本当、さつきとくたばつてくれないかなあの年寄りたち……と吐き捨てていた様子から、相当なストレスとなつたようだ。

で、まあ、とりあえず五条先生は私の術式を召來靈術しようらいれいじゆつと仮称し、自身の呪力を媒体にして、式神に近い存在を召喚し、使役することができる術式だと教えたらしい。

それを聞いた上層部は、未知数な能力であることに変わりはないため、かなり微妙な反応をしていたようだが、必ず呪術師として正しい道へと歩ませることや、もしもの時は自分が責任を持つて終わらせる条件として出して折れてもらつたようだ。

まあ、呪術師最強の男に今まで言われたら、向こうも黙るしかないと言うことだろう。

上は最強をあまり敵に回したくないだろうしね。

さて、これまでの出来事の説明はこれくらいだろうか。いつたい誰に説明していたのかはわからないけど、とりあえず大まかな内容はわかつたと思う。

では、ここからが本題だ。まあ、本題と言つても、今の私の状況についての話なんだけどね。

これまで私は、恵くんと一緒に行動を取りながら、いろんな任務に当たつていた。  
相変わらず戦うのはサーヴァントばかりではあるけど、それでも着々と任務をこなし  
ていき、ある程度は好き勝手できるようになつた頃。

私は、恵くんと一緒に呪術高専から離れた場所、宮城県へと足を運んでいた。  
そう。宮城県である。ついでに言うと、いる場所は杉沢第三高校で、月は六月。  
ここまで言えば、多くの人が気づくだろう。【呪術廻戦の原作が開始した】のだと!!  
そう、とうとう開始してしまつたのである。あの物語が。

杉沢第三高校にいる理由は、言わずもがな“宿儻の指”的回収のため。

五条先生が色々調べたところ、ここに20本のうち一本が置かれていたと言ふ話が浮上したわけだ。

もちろん、私はワクワクした。今まで紙越しでしか見ることがなかつた物語の世界に私はおりたち、そして歩んでいるのだと。

不謹慎だから、ニヤニヤするのはなんとか我慢したけど、ようやく訪れた原作開始の合図に、内心かなりテンションが上がつていた。

で、まあ、今は恵くんと一緒に、杉沢第三高校へと足を運んでいるわけだけど……「百葉箱!? そんな所に特級呪物保管すぎるとか馬鹿過ぎるでしょ。」

「アハハ。でも、おかげで回収も楽でしょう?」

「確かに楽かもしませんが、その代償に呆れと言う感情に苛まれてるんですけど。雑な保管は身を滅ぼしてしまいます。下手したらかなりの被害者が出るでしょう?」

〔それは言えてるね。〕

ま、案の定“宿儻の指”は百葉箱に雑に保管されているわけで……。この流れからすると、原作通りオカ研に持つて行かれているだろうね。

〔セイ。何か感じ取れるものはある?〕

〔うーん……すくすくの指の気配を一つ見つけるのは難しいなー……。なーんか、呪い

の気配がここから辺全体に広がつてゐるせいで、正確な位置がわからないのだ。」

そんなことを思いながら、念のためにと太歳星君に『宿儻の指』の気配は感じ取れな  
いか問いかける。

が、原作の恵くんが言つていた通り、呪いの気配があまりにも大き過ぎて判断し辛い  
ようだ。

そつか……と小さく呟いて恵くんに目を向ける。

私の視線に気づいた恵くんは、こちらの視線の意味を汲み取ることができたようで、  
首を左右に振つて、わからないことを伝えてくる。

既に拾われているのか拾われていないのか、それを確かめるために一応声をかけたん  
だけど、やつぱりダメかー……。

「これだけ呪いの気配が大きいと、移動している可能性を確かめることもできないね  
……。」

「ああ。廃村の時は、指を取り込んだ呪霊がいたし、五条先生の能力もあつてすぐに見つ  
けることができたが……。」

「とりあえず、百葉箱をまずは確認するべきかな。拾われていなければそれでいいし。」

「だな。」

恵くんのスマホをスピーカー状態のままにして、私たちは一齊に走り出す。

百葉箱の位置は既に把握できていたから、しばらく走ればすぐに辿り着くことができた。

「前の私だつたら絶対恵くんについていけずにバテてたな。」

「二年生と五条先生に体術とか教えてもらつたおかげだろうな。」

「うんうん、瑠風がしつかりと成長してくれて僕も鼻が高いよ。」

「そうですか。」

「あれ、反応が薄い……」

「とりあえず、百葉箱見つけたんで、中を確かめます。」

「恵もなんかちよつと冷たくない……？まあ、今はいいか……。頼んだよ。」

恵くんが百葉箱の取手に触れ、すぐにその扉を開く。本来ならば、そこにあるはずの“宿儺の指”。

だが、原作通りそこはもぬけの殻であり、呪物と思わしき物が入つてゐる入れ物一つ見当たらない。

あるのは特級の残穢のみ。うん、持つて行つたなオカ研。

「……ないですよ。」

「え？」

「現在恵くんと一緒に百葉箱の中を覗いているのですが、特級の呪力の残穢のみが残つ

ており、百葉箱自体はもぬけの殻です。」

「マジで？ ウケるね（笑）」

「笑い事じやないんですけど？」

「ぶん殴りますよ……」

「二人とも、それ回収するまで帰つてきちゃ駄目だから。」

「は？」

やつぱり持つていかれるんかいと呆れ返りながら五条先生の言動にツッコミを入れる。

しかし、『宿儺の指』を回収するまでは東京に帰つてきたら駄目だと言つたあと、ブツンと容赦なく切られた通話により、辺りには静寂が訪れた。

「…………なあ、瑠風。」

「何？」

「今度マジで五条先生を殴らないか？ 瑠風の能力ならできるだろ？」

「ああ、無下限強制剥奪コインヘン？」

「コインヘンが何かもうは知らないが、五条先生のあれ、解除できるんだろう？」

「できるね。」

「……殴らないか？」

「躱される可能性はあるかも知れないけどやつてみようか。」

「ああ、やろう。」

とりあえず、恵くんがかなりマツハでストレスゲージを溜めているようなので、五条先生を今度殴ろうと言う提案に乗つておく。

躱されるかもしれないけど、その時はその時でいつものようにお菓子とお茶をご馳走して愚痴を聞こう。

五条先生にはお菓子抜きにして、多分ダメージ入るだろうし。  
二年生組と恵くんと私で帰つたらティーパーティーだ。

「……探すか。」

「だね。でも、ここまで呪いが広がつていると見つけるまで時間がかかりそうだよ。」「なあ、瑠風が呼べるサーヴァントって、太歳星君とコヤンスカヤとアビゲイルの三騎だけなのが？」

「……うーん……どうだろう。今のところ呼べるのはこの三騎だけど、何かしらの条件を満たせば、他のサーヴァントも呼べると思うんだけど。」

「そうか。太歳星君は知らないのか？」

「んー……ごめんなぬぐめぐ、るかるか。ワガハイ、るかるかの能力は詳しくわからぬのだ……。あの狐やアビアビなら何か知つてるかも知れないんだけど……」

「……教えてくれなさそうだよなあ…………。」

うーん……と考えながら、早く『宿儺の指』を見つけ出すための方法を考える。

こんな時、気配を辿ることを得意としているサーヴァントが呼べたらいいんだけど、呼べるかどうかわからないんだよな。

新宿のアヴエンジャーとか呼べないかな…………。残穢連れそうなんだけど…………。

「…………おい、瑠風。」

「ん？」

「後ろ…………」

「はい？ 後ろ…………うおわあ！？」

どうしたもんかと首を傾げていると、恵くんが声をかけてきた。

後ろに何かあるのかと思い振り向いてみると、そこには今しがた考えていた新宿のアヴエンジャーの姿があり、思わず驚いてしまう。

「ガウツ」

「…………」

グルルルという唸り声を漏らす新宿のアヴエンジャーとどうしたの？？と言つてるような雰囲気を持つその上の人。

新宿のアヴエンジャーからは敵意を感じない。ガウツと一声吠えるだけ。

その鳴き声は、まるでさつさと用件を言えと催促しているようだつた。

「……協力してくれるの？ アヴエンジャー。」

「…………」

念のため確認するように、協力してくれるのかと問い合わせれば、フンッとアヴエンジャーは短く鼻息を漏らした。

同時に上の人がジエスチャーでその通りだと肯定してくれたので、思わず小さく笑みを浮かべた。

「瑠風？」

「……どうやら、他にもサーヴァントは呼べるみたいだね。彼らが特別に協力してくれることみたい。手伝つてもらおう。」

「……ああ！」

恵くんに新宿のアヴエンジャーが特別に協力をしてくれるらしいことを伝えれば、彼は、助かると笑いながら、新宿のアヴエンジャーに目を向ける。

そんな恵くんから新宿のアヴエンジャーは目を逸らし、さつさと指示を寄越せとばかりに尻尾で叩かれた。地味に痛い。

「本来なら、百葉箱の中にあるはずの特級呪物が無くなつててね。誰かが移動させたと

思うんだ。人間の匂いで気分が悪くなるかもしれないけど、ごめん。探してくれるかな？ 多分、呪物の残穢だけじゃ辿りきれないと思うから。」

「…………。」

とはいって、新宿のアヴァンジャーの気が変わつて協力してもらえないのは少し困るので、協力してくれる気力があるうちにやることを済ませようと考えて指示を出す。すると、遅いと言うかのように鼻息を漏らしたのち、開いている百葉箱の中に鼻先を近づけた。

残り香を覚えるように嗅ぎ始める新宿のアヴァンジャーをじっと見つめていると、静かにこちらを振り向いてきた。

「行ける？」

「——————！」

誰に物を言つていると言わんばかりの咆哮が辺りに響く。呪霊の状態であるため、非術師たちには聴こえない声。

だが、呪力を持ち、呪霊を観ることができる私と恵くん、そして、私が召喚している太歳星君には、大迫力のそれが聴こえていた。

「わはー！ アヴェアヴェやる気満々なのだー！」

「…………瑠風…………こいつは？」

「……そうだね。とある物語に出ていた復讐者とだけ言つとくよ。」

にこにこ笑顔の太歳星君と、冷や汗ダラダラの恵くん。対照的な反応を見せる二人を眺めながら、恵くんの質問に答えれば、獣の姿を持つ、復讐に燃える存在ってなんだつけ?と首を傾げた。

だが、不意に新宿のアヴァンジャーが動き出したことに気づくなり、すぐに頭を切り替える。

「見つかったみたいだね。案内を頼むよ。」

「ガウツ」

一声短く吼えるなり足を進め始めるアヴァンジャー。

その後ろに続くようにして、私たちは杉沢第三高校の敷地内を捜索するのだった。

## 21. “宿儺の指”を求めて

自身の術式（仮）を使用することで呼び出すことができた新宿のアヴェンジャー。

私と恵くんは、百葉箱の中や付近に残っていた残り香をたどりながら、杉沢第三高校の敷地内を歩き回る彼らの後を追いながら、『宿儺の指』を探す。

そんな中、不意に新宿のアヴェンジャーが足を止め、上の方を向いた。  
釣られて姿勢を動かしてみると、そこには呻き声を上げて校舎を眺める呪霊が一匹、  
ポールの上に存在していた。

「なんだこのラグビー場……？」

「死体でも埋まってるのかな？あれ、どう見ても二級レベルの呪だけど……。」

「ガウツ」

「…………！」

「ふんふん……。るかるかー。めぐめぐー。アヴエアヴエとなしなしは、この広いところには人の匂いはしないっていつてるぞー？」

「じゃあ埋まつてないのかな？」

「つてことは、『宿儺の指』の影響か？」

「かもしれないね……。」

死体が埋まつていたら大事件だつたから、実際になくてよかつたな……なんてことを  
思いながら、私は新宿のアヴェンジャーに目を向ける。

あれは殺さなくていいのかと言う視線を彼から向けられた。  
うーん……まあ、別にやつてもいいとは思うけど、これは祓うべきなんだろうか？

「瑠風。」

「ん？」

「さつさと回収しに行くぞ。」

「え？あの上のやつ放置して大丈夫？」

「ああ。ひとまずは後回しだ。確かに、二人でやれば祓えないことはないと思うが、余裕  
で祓えるとは限らない。だから、まずは先に呪物を回収し、安全を確保したあとでアレ  
を祓う。」

「ん〜……まあ、理にはかなつてるか……。了解。つてことで、アヴェンジャー。引き続  
き捜索を頼めるかな？」

「ガウツ」

狩つてくれとお願いするか否か考えていると、恵くんがまずは呪物を最優先すること  
を告げられる。

特級呪物を回収したあと、呪いを祓う方が安全だと。

確かに理にかなっている理由だ。そう思つた私は、新宿のアヴァンジャーに検索を続けることを告げた。

なんだ殺さないのかとどこかつまらなさそうな反応をされたような気がするけど、とりあえずスルーしておこう。

「このまま検索して見つからない……ってことはないと思うけど、万が一そうなつたらどうする？」

「そうだな……いざと言う時はあまり気が進まないが、一度学校を閉鎖し、呪いを祓つた後で隅々まで探すしかないかもな。」

「めんどくさいな……」

「仕方ないだろ？」

小さく溜め息を吐きながら、私も六眼が欲しいわホント……なんて少しだけ内心で愚痴る。

あれがあれば”宿儺の指”の呪力とか迫れそうなのに……。でも、術式の名前からして、多分サーヴァントの力しか一時的な付与もできないんだろうなあ……悲しみ。

「こつちだこつち！」  
「早くしろ！」

「陸部の高木と西中の虎杖が勝負すんだよ!」

「種目は!?」

「砲丸投げ!」

「!?」

そんなことを考えながら足を進めていると、賑やかな生徒たちの声と、虎杖という言葉が聞こえてくる。

それを聞いた私は、慌てて持ち歩いていた帽子（なぜか猫耳がついてる五条先生カスタマイズ）を目深に被る。

「……どうした?」

「……私、中学までは宮城の仙台……つまり、この地域に住んでたんだよ。でも、親の仕事の都合から、高校からは東京に行つて生活してたんだ。さつき、虎杖って言葉が聞こえていただろう? 実は彼、同中出身なんだよね……。」

「……マジか。」

「うん。だから、ちょっと顔は見られたくないかなって。仲よかつたんだけど、ほら、一般の人に呪術師のことを話したくないし、巻き込みたくないからさ。それに、急に呪いの話とかして、頭おかしいやつとか思われたくない。まあ、虎杖くんはそんなこと言わないだろうけど、彼以外の知り合いとかだつたらあり得るから。」

「なるほどな。……つか、なんで猫耳なんだ？」

「知らん。五条先生に渡された。もうちよつと普通の帽子がよかつたわ……。」

「……あの人はまた……。でも、もらつたからつて素直に被らなくともよかつたんじやないか？」

「流石に贈り物は無碍にできない。」

「律儀だな。」

目深に被つても確認できる外の景色。

それと一緒に見える恵くんから、呆れと同情の視線を向けられている。

「14m！」

「スゲー高木。全然現役じやねーか！ ビーする虎杖！」

やつぱりもらつても律儀に使わなくてもよかつたのだろうかと思いながら、周りの様子を眺めていると、かなりの生徒が盛り上がっていることがよくわかる。

よく見るとヒソヒソと話しているガタイのいい男子とメガネをかけてる女子がいるな。

あの二人が悠仁の先輩たちか。

そんな二人が向けている視線の先には、砲丸投げに使う砲丸を持ち、陸上部の顧問である男性に話しかけている悠仁の姿がある。

原作通りならば、なげ方について聞いているのだろう。

顔を見られたくないと言う気持ち半分と、原作のシーンに立ち会っていることに対する嬉しさ半分で、悠仁の動向を眺めていれば、彼は原作通り手にしていた砲丸をピツチャ一投げで投げ飛ばす。

投げ飛ばされた砲丸は、真っ直ぐと砲丸投げのフイールドを越し、そのままサッカーゴールのポールをひん曲げた。

……悠仁ってファジカルゴリラだつたかな？違うよね？

「なあ、瑠風。」

「何かな？」

「あの虎杖つて奴、知り合いなんだよな？」

「うん。一応友達だつたね。」

「中学の時からあんなだつたのか？」

「まあ……身体能力はおかしかったかな。呪力は見ての通りないはずなんだけど。」

「素の力であれか。禪院先輩と同じタイプかな……。……つて見てる場合じやなかつたな。」

恵くんが悠仁の身体能力を見て、呆気に取られたような表情をする。  
しかし、すぐに頭を切り替えて、早く"宿儺の指"を探すぞと促すように肩を叩き、校

舍の方を指差す。

でも、私はすぐに校舎に行こうとする恵くんのことを静止した。

恵くんが不思議そうな表情で私を見てくる。なんで行かないんだと言いたげだ。

私はすぐに新宿のアヴェンジャーに目を向ける。そこには、真っ直ぐと悠仁を見つめ

てゐる彼の姿があつた。

「見つけた。百葉箱の中になつた呪物を拾つた張本人。」

1?

私がポツリと言葉を口にした瞬間、恵くんが慌てて悠仁の方へと目を向ける。

しかし、恵くんが声をかける前に、悠仁が私たちのすぐ横を走り抜ける、正門の方へと走り過ぎていく。

その際、感じたピリリとした気配は、紛れもなく廃村で感じ取ることができたものと同じものだつた。

さて、どうしたものか……。

原作通り悠仁と合流して、原作通りに物語を進めるか……それとも何かしらの理由を取つ付けて二手に分かれて被害を最小に抑えるか……。

」  
…

〔.....〕

「ん? どうしたの? アヴェンジャー。」

「…………」

ぐるぐると思考を回していると、新宿のアヴェンジャーが校舎を見つめながら唸り声を漏らす。

明らかに何か警戒しているみたいだけど……いや……待てよ? これ使えるかも?

「瑠風! さつきの虎杖つて奴を追いかけるぞ!」

「待つて、恵くん。アヴェンジャーが校舎を警戒してる。」

「!」

早く悠仁を追おうと話しかけてくる恵くんに、アヴェンジャーが警戒していることを告げれば、彼は目を丸くして固まつた。

しかし、すぐに慌てて校舎に目を向け、そして静かに首を傾げた。

「何も感じないが……」

「恵くん。アヴェンジャーは見ての通り狼だ。憎悪に染まり切っているとはいえ、生存本能に長けていた存在。私たちなんかよりも何倍も感覚が優れている存在が警戒心を露わにしていると言うことは、何か起こる可能性が高い……そう考えることができるんじゃない?」

「でも…… ``宿儺の指'' はどうするんだ?」

「うん。そこで提案なんだけど、ここは二手に分かれて行動を取るのがいいんじゃないかな?」

「二手に……」

「そ。片方が学校にこのまま残つて警戒して、片方が指を回収する。それが手つ取り早いと思うんだよね。」

「……じゃあ、俺がここに残……」

「いや、恵くんは虎杖くんを追つて。こつちは私が受け持つよ。ほら、私つてば特級レベルの存在を三騎一気に呼べるから、戦力はかなりあるでしょ? 一騎はとりあえず自由に校舎内を駆けてもらつて、一騎は私の側で一緒に行動をすれば安全確保もできるから、多分、私が残る方が効率的にはいいと思うんだ。」

「…………わかつた。でも無理はすんなよ。」

「大丈夫。いざと言う時はサーヴァントに抱えてもらつて脱出するからさ。」「……絶対だからな。」

私の説得に渋々頷いた恵くん。

彼はすぐにその場で玉犬を出現させ、悠仁が持つていった“宿儺の指”的殘穢がべつたりついたケースの跡を追わせ、その場から離脱した。

それを確認した私は、猫耳帽子を被り直し、警戒心を露わにしている新宿のアヴァエン

ジヤーの横に並ぶ。

「さて……試したいことがあるし、それも兼ねて警備しますか。夜になつたら呪霊が湧くだろうし、次々とそれを消していこう。」

「ガウツ！」

「…………！」

「りよつか！さあ、やるやるやるぞー！！」

二騎のサーヴァントに挟まれながら、私は目の前の校舎を見つめて小さく笑う。

今のうちに祓えるものは祓つて、原作のイベントが発生したら、一氣にお掃除を開始しますか。

## 22. 試してみたいこと

恵くんと別れ、杉沢第三高校に残つた私は、太歳星君の手を借りて、校舎の屋上へと移動していた。

警備をするためと、あることを試すために。

「かるか。今から何をするのだ？」

「さつき、試したいことがあるって言つたでしょ。それを試してみようと思つてね。」

太歳星君が首を傾げる中、私は、自身が試したいことを試すために、すかさずその場で自身の術式を発動させる。

脳裏に浮かべるのは自分のカルデアにいたサーヴァントたち。この場にいる太歳星君と、新宿のアヴエンジャー以外の存在。

自分のカルデアにいるサーヴァントの記憶はちゃんとあるからね。お世話になつていたサーヴァントも全て。

まあ、何らかの条件を満たしていようと、来てくれなさそうなのもいるんだけどさ。なんてことを考えていると、自身の周りに三騎ほどサーヴァントが増えた気配を感じ取れた。

「ンンンー・まさか拙僧が呼ばれるとは思いもよらんでした！こちらの様子は呼ばれると同時にどのようになつてゐるのか、知識として刻まれておりますので、説明は不要ですぞ。」

「なぜドーマンがいるのでしょうか？」

「知るかよ。つか、こいつ呼んで問題ねえのか？」

「うげえ……ドーマン……。やつぱり齧られそうで怖いのだ……。ジユナオルとクーオルがいるだけマシだけどさあ……」

「ガウツ」

「…………」

「ンン……マスター？ なにやら拙僧、歓迎されてないようなのですが？」

「なんとも言えない表情をしながらこちらを見てくるアルターエゴは放つといて、私は呼び出したサーヴァントたち一人一人に目を向ける。

善、惡、中庸、秩序、混沌、中立……そんなの全部関係なしに自身のカルデアのサーヴァントを脳裏に浮かべたはずなんだけど、やつて来たのは混沌・惡属性を有している道満、ジユナオ、オルタニキの三騎だけ。

もしや、混沌・惡属性しか呼べないのかと一瞬脳裏に過つたが、混沌は有していても、中庸属性持ちである太歳星君や、惡と善、両方を有しているジユナオがいるため、正確

なルールがわからない。

考えられるとしたら、混沌と悪、または中庸の組み合わせを持ち合わせていてるサーヴァント以外は呼べないのだろうか……。

しかし、それにしては呼び出したサーヴァントの数が少ない。

宝具レベルはともかく、それなりに私のカルデアにはサーヴァントが集まつていたはずだし、これだけと言うのはまずないだろう。

ということは、サーヴァントは混沌か悪、中庸属性に属する者の中から五騎を呼び出せる……ってことなのだろうか。

「マスター？ マイマスター？ シン！ 拙僧を無視しないでくだされ！」

「ちょっと考え方してるんだから黙つてくれるかなネコ科マツチヨ。」

「ネコ科マツチヨ……何故名前で呼んでくれないのでマスター……。」

黙らせるため以外何がある。じゃない。今はそれじゃない。

「……ジユナオ。」

「はい。どうかなさいましたか、マスター？」

「あのさ。私のこの術式……とりあえず、召來靈術しょうらいれいじゆつと名付けてるんだけど、これで呼べ

るサーヴァントの条件つて、混沌・悪か、混沌・中庸属性を持ち合わせていてるサーヴァントのみつて認識でいいのかな？」

「ええ。正確には、悪か中庸属性を持ち、聖杯転臨や、スキル上げなどのリソースが注ぎ込まれ、マスターとの繋がりが深い者……マスターたちが口にしていた、絆が高い者のみ、五騎の同時顕現が可能です。」

「なるほど……そんな決まりがあるんだね。」

道満のことを探しながら、自身の術式……能力に関する知識を整理するため、この中で一番教えてくれそうなジユナオに問いかけ、その返答を聞くことにより、ようやく自身の力がどんなものか認識できた。

召喚した全てのサーヴァントが呼べるわけじゃなく、悪か中庸の属性を持ち合わせたリソース注ぎ込み済み……なおかつ絆レベルが高い者のみを呼び出せる能力だつたとはね。

まあ、でも、全てのサーヴァントが呼べたら間違いなくチートだし、これでよかつたのかもしね。

……いや、ジユナオがいる時点でチートだよ何言つてんだ私のアホ。

「全員、ステータスは向こうにいる時と変わらないのかな？特にジユナオ……能力値がかなりあれだけ、あのままきたりしてる？」

「拙僧たちの能力値ですかな？であれば、全騎向こうの世と違いなくそのままの能力を持つて顕現しておりますれば。マスターの指示さえあれば、瞬く間に世界を蹂躪し尽く

すことも可能故、いつでもお申し付けくださいませ。」

「世界は蹂躪しないわアホ。何考てんの道満。」

「……マスター。悪いことは言いません。この外道は即刻処断すべきです。そこにいるだけで邪悪しかばら撒かない存在ですのです。」

「俺もそいつに賛成だ。この外道はさつきと靈核ごと碎いちまえ。なんなら、すぐに俺が抉つてやろうか?」

「るかるか。ドーマンは帰らせた方がいいと思うのだ。」

「…………」

「…………」

「満場一致で帰れだつてさ。」

「ンンンン手厳しい!拙僧は何も悪いことはしておりますぬぞ!!」

「「「どの口が言つてるんだ腐れ外道。」「」」

「ガウッ!!」

「…………」

「…………うん、普段のジユナオからは考えられないような言葉遣いが聞こえてきたような気がしたけどあえてスルーしよう。」

敬語キヤラが急に敬語じやなくなるのつてなんか怖……。

ていうか、太歳星君もそんな口調できたんだね。

「まあいいや……。呪いに関してはエキスパートレベルだし、道満はとりあえず継続現界。他のみんなも、今回は一緒に仕事をしてくれると助かるよ。多分……いや、絶対、今日ここで大きな事件が起ころるから。」

そんなことを思いながら、私は現界しているみんなに指示を出す。  
いちいち説明しなくとも、私の目的ややることは全て靈基に刻まれているらしいから、すぐに全員頷いてくれた。

道満がいるなら、偵察の幅も広がりそうだね。

「サーヴァントはどれだけ呼べるのか。どんな条件下にあるサーヴァントが声に応じてくれるのか。その二つを確かめるという個人的な目的は達成したし、次は呪術師としての活動だ。今からみんなに指示を出すよ。まず道満。キミは式神を駆使して広範囲の警戒と、いざという時の連絡をお願いするよ。オルタニキとジユナオ、そしてセイは校内を靈体化して巡回。低級の呪霊がいたらすぐに祓うこと。最後にアヴエンジャーは外を靈体化して巡回。呪霊を見かけたら祓うなり食らうなりしていいからね。じゃあ、

私の指示は以上だよ。行動に移してくれ。」

そんなことを思いながら、私はその場にいる全員に指示を飛ばす。  
すると、全員承諾の声をあげた後、すぐに行動に移し始めた。

太歳星君とジュナオ、オルタニキの三騎は靈体化して校内に入り込み、新宿のアヴェンジャーは靈体化しながら屋上から下へと飛び降りる。

屋上に残されたのは、私と道満のみ。

……なんかじつと見られているけど、ちよつかいを出そとする素振りは見せてこないな。

「にしても……現世には呪いが蔓延る斯様な世界があつたとは。やはり、人間たるもの、いつの世も変わりませぬなア……。」

「そうだね。」

「ンン。マスター……何故拙僧に対する当たりがそこまで厳しいのでしょうか……。確かにこの身、かつてあなた様と敵対していたことを記録として有しておりますが、今はマスターのサーヴァントなれば。そこまで距離を置かれてしますと、いくら拙僧でも傷ついてしまいますぞ？」

「そう言われてもなあ……。どこまで行つてもキミは蘆屋道満であり、異星側にいたりンボに変わりないわけで、そりや警戒もしたくなるつて話だよ。同位体ではないにせよ、同位体の……敵側だった時の記憶を有しているならなおさらね。腕は買つてるつもりだけど。」

「そうですか……。まあ、そうなるのも致し方なし。ですが、マスターがあの赤毛の娘の

足取りを見てきたものであり、拙僧をあそこまで酷使してきた存在であるならば、拙僧とあちらのあなた様の繋がりが深いこともよく知つておいででしょうに……。「所詮は一番じやないか。一番最初に絆レベルがマックスになつたのはオルタニキとジユナオだよ。」

「ンン！ 確かに拙僧は一番手ではありますが、それでもあなた様との繋がりは強いものだと自負しております！ ですので、もそつと……もそつと近うお寄りくだされ。」

「ヤダよ。即行でポキッとやられそうだし。」

「そのようなことは決して考えておりませぬゆえご安心召されよ！ まあ、確かにマスターの細首、細腕、細腰程度、この手でポキリと即折ることが可能ではありますが、決してそのようなことはしないと誓いましょう！ 確か……西洋の方でしたかな？ 悪魔と呼ばれる妖魔の類の中に、嘘つきで有名なものがおりましたが、そのものの特性に則つて言うなれば、神に誓つて！ 決してマスターに害をなさないと誓いましょう！」

「神とか信じなさそうな奴がなんか言つてる。」

「拙僧！！ これでも陰陽道の法師なれば！！」

「うるさ。無駄に声が大きいからちよつと声量抑える莫迦。」

うるせえ……と言うように、道満側に向いている片耳を押さえて吐き捨てれば、道満が少しばかり固まつたのち、その場でしゃがみ込んでしまつた。

心なしかゼンマイ……ゲフンツ……髪の毛がしょんもりしているような気がするけど、スルーすることにしたのは言うまでもない。

## 23. はーい、その指は回収させてもらいまーす！

杉沢第三高校の屋上にて、道満と一緒に過ごすこと数十分。

「おや？ マスター。あちらの方にやつた式神がなにやら見つけたようですぞ？」

「あっちにやつた式神？」

「ええ。」

急に道満が、私に話しかけて来た。彼が放つた式神のうちの一枚が何かを見つけたとのことだ。

彼が指差す方向へと目を向ける。スマホにあるマップと照らし合わせてみると、家庭科準備室がある方角のようだ。

確か、原作では家庭科準備室がオカ研の部室になっていたよな……。となると、間違いなく悠仁の先輩方がいるはず。

「急ごう。」

「向かわるので？」

「うん。原作通り物語が進むのであれば、間違いなくオカ研の人間が呪霊に襲われるからね。被害を最小に抑える……を目的にしているから、向かわない理由がないんだよ。」

「左様ですか。では、拙僧が足がかりとなりましよう。こちらに。」

「え……？」

「ンンン!! 何故そこで警戒なさるのですかマスター!! 拙僧はマスターの味方でございます!!」

「いや、だつてリンボだし。」

「確かに記録として有しておりますが、こちらの世には手出し致しませぬと何度も言つて……」

「オルタニキ。いるんでしょ?」

「ああ。一通り見て回つたからな。話は聞いている。あつちに行くんだろう?」

「うん。お願ひできるかな?」

「了解。リンボ野郎はもうちとこちら辺に待機しておけ。」

「いつのまにこちらに戻られていたのですかクー・フーリン・オルタ殿!! というか、異変を感じたのは拙僧なのですが!?」

「知るか。」

「道満は引き続きこの場に残つて警戒。ついでに惠くんに指を捕捉したことを式神で伝えておいて。セイとオルタニキの二騎を連れて行こうかな。」

「俺がいりや問題なくねえか?」

「いざと言う時の殿として、力を温存してもらうんだよ。耐久力にも優れてるしね。」「そうかい。」

「セイ！ 指を見つけたから移動する！ こつちに戻つてくれるかな？」

「マスター——！！拙僧を無視しないでくだされえ——！！」  
背後から道満の悲痛な声が聞こえて来たがスルーしてオルタニキに足がかりを頼めば、彼は軽々と私を抱き上げたのち、そのままその場から飛び去る。

程なくして太歳星君も合流し、戦闘準備は万端だ。

「かるかく。どーまんはむしむしていいのか？」

「能力面としては問題ないけど、性格がちょっとあれだからね。頼りにはなるけど信用はちょっとできないから……」

「だつたら消しちまえばいいだろうが。なんで放置してんだ。」

「連絡係には使えるから……」

「じやああれか？ 恵とか言う奴が合流したら消すのか？」

「そうなるかな……。呼ぶなら玉藻の方がよかつたかな……」

「あの狐を呼ぶのかー？ なーんかやな感じがするんだよなー、あの狐……近寄りたくない。」

「うーん……でも、道満よりかはマシじゃない？」

「どつちもどつちだろ。良妻願望垂れ流しのアツイも、うちに秘めてやがるのは黒いもんだしな。」

「一応、玉ちゃん自体は、中国を騒がしたあれとは違うって言つてるんだけどなあ……。玉藻の前に対する太歳星君とオルタニキの評価に思わず苦笑いをこぼす。

あの子は本当に、ただ純粹に良妻として最愛の殿方の側にいたいと思つてているだけなんだけど。

疑いたくなる気持ちは……まあ、事実からして仕方ないんだろうけど。

そんなことを思いながら、オルタニキに協力してもらつて数分後、道満が言つていたちよつとした異変があつたと言われた家庭科準備室近くに着地する。

呪力はかなり強い。この学校全体に広がつていたそれとは明らかに桁違いの重圧だ。

——…流石は呪いの王の指。封印が施されてもなおこんな呪力を放つのか。  
漫画やアニメじやいまいち強さがわからなかつたけど、実際に感じてみてようやくわかつた。

廃村の時は遠くにあつたから感じる重圧はそこまでなかつたからなんともなかつたけど、これだけ近づければ冷や汗が吹き出してくる。

「……すくすくの呪力はこれだったのかー。」

「随分とまあ、厄介そうな怪物がいることで。魔神柱共や、ビーストとはまた違つた存在

感じやねえか。」

「……仮に宿儺が受肉して力を取り戻した場合、オルタニキは勝てそう？」  
「勝てとお前が言うなら勝てるだろうよ。お前の呪力はすつからかんになるだろうがな。」

「セイは？」

「ワガハイはどうぞいいどつこいの気がするのだ。大きい方のワガハイなら勝てるかもしねないけど、被害はかなり広がりそうな気がする。」

「あはは、マジか。やつぱり規格外だな、両面宿儺。」

「でも、ジュナオルとクーオルとワガハイとどーまんとアヴェアヴェが一緒に戦えば勝てそうな気もするのだ。」

「……やつぱりサーヴァントの方が規格外だつたね。」

「あの弓の方の教授や、ビーストの狐女×2を導入して俺と黒化したアルジュナを差し向けりや余裕で潰せそうだな。」

「……Bバフ可能敏腕秘書×2とか火力がおかしなことになりそうな気がしてならないナーナー……」

いつだつたかW殺コヤでバフを乗せてオルタニキやジュナオに宝具を打たせた時を思い出す。

あの時は本当に見たことない数値がイベ特攻関係なしで出たから驚いたものだ。

コヤコヤオベロンのバフも恐ろしいことになつてたつけ……。バスター環境な弊力ルデアにはありがたかったけど、初見は引きつった笑みを浮かべていた記憶しかない。

「うわ……ッ」

「どうした!?」

「…………人間の…………指…………？ 本物…………？」

苦笑いをしながらそんなことを考えていると、家庭科準備室の中から声が聞こえて来る。

同時に先程以上に感じ取れる苦しいまでの呪力と、新たな複数の呪霊の気配を感じ取つた。

すかさず家庭科準備室のドアを勢いよく開け広げた私は、中にいた二人組の頭上に現れた呪霊をゲイ・ボルクで一閃する。

「おわ!?

「誰だ!?

突然乱入して來た私の姿に、中にいた二人組……原作で、宿儺の指の封印を解いたことにより危ない目に合っていた悠仁の先輩である佐々木 せつこと井口 たかしの二人が驚く。

でも、私はその視線を気にすることなく、現れた呪霊を祓う。ある程度減らすことができれば、気配は一時的に落ち着いた。

「ふう……間に合つてよかつたー。」

軽く息を吐き、手にしていたゲイ・ボルクを肩に担ぎ直す。

そして、啞然としている二人組に向かつて手を差し出した。

「はーい、その指は回収させてもらいまーす。死にたくないなれば大人しく渡してね？」

## 24・杉沢第三高校を脱出しよう。

混乱したように固まる佐々木さんと井口さん。まあ、いきなり知らない人間が複数も現れたんだから、そうなつてしまふのも無理はない。

だが、今は固まるより先に、指をこつちに渡してほしいんだよねえ……。

「えつと……死にたくなければ指を渡せつてどう言うこと?」

そんなことを考えていると、佐々木さんが口を開いた。この指に何かあるのかと聞きたいようだ。

あるから渡せつて言つてるんだけどな。指の札が剥がされてから、呪霊の動きが活発になつてゐるし、いつまた呪霊が現れるかわからない状況なんだからさ。一応、ジュナオも道満もアヴエンジャーも、呪霊と交戦して被害が広がらないようにしているみたいだけど。

「それ。ガチモンの厄災呼び寄せ装置。過去に実在していた呪いに長けていた存在の指のミイラでね。それを持つてると……」

ん? 道満が一匹呪霊を逃した……? いや、違う!! わざとこつちに呪霊を行かせやがったなあの陰陽師!!

呪力の流れから状況を判断した私は、すかさず手元にあるゲイ・ボルグを持ち直す。同時に現れたのは、原作で佐々木さんと井口さんを呪物ごと取り込もうとしていた、何時ですかと連呼していた呪霊だつた。

「うわああああああああああああ!!!!」

「きやあああああああ!!!!」

現れた異形に叫び声をあげる二人組。ゲイ・ボルグを構え直していた私は、すぐに言

葉を口にする。

「刺し穿つ死棘の槍!!」

鋭く踏み込み、手にしていた朱槍で呪霊めがけて放つ。放った槍の切つ先は、呪霊の体を貫き、その心臓を刺し穿つ。

ギヤアアアアアアアアア!!と叫び声を上げた呪霊は、私から距離を取るように、その場から慌てて離れた。

「セイ。」

「いくいくいくぞー!!」

やつぱり本家のような火力や効能は出ないか、と軽く落ち込みながらも、側にいた太歳星君に声をかける。

私の声を聞いた太歳星君は、すかさず動く。目の前にいる呪霊を出現させた2本の巨

大な手でそのまま切り裂いた。

太歳星君の攻撃を食らった呪靈は断末魔をあげて消失する。同時に発生した呪靈の残穢は、太歳星君へと吸収されていった。

「やつたぞるかるか」!!

「うん。ありがとう、セイ。」

笑顔で褒めて褒めてとくつついてきた太歳星君の頭を撫でながら感謝の言葉を述べる。

オルタニキからは、やつぱり贋作は贋作か……と言う呟きをもらつたが、スルーしう。

そんなことを思いながら、手にしていた朱槍の切つ先を上に向け、柄の部分を床に突き、杖代わりにして寄りかかる。

「……さて、これでわかつたかな？それがどんなものか。」

さつさと渡さないから……と呆れながら、自分たちの手元にあるものがどれだけ危険なものか理解できたかと問い合わせる。

佐々木さんと井口さんの二人組は、こちらの言葉を聞くなり、首がもげそうな勢いで何度も頷いた。

「じゃあ、さつさと渡して？本当に死ぬよ？」

手を差し出しながら、指を貸せと促せば、佐々木さんが震えながら指を手渡してきた。  
確かに回収できましたつと。さて……じゃあ、脱出するとしましようか。

「外は間違いなく脱出系ホラーゲームみたいになつてゐるだらうけど、脱出させてあげる  
からついてきて。」

こちらの言葉に佐々木さんと井口さんが頷く。護衛がいないと危ないことしつか  
りと理解してくれたようで何よりだ。

「じゃあ行こうか。セイ。オルタニキ。頼むよ。」

「了解。」

「りよつか！」

それならさつさと外に行こう。そう考えながら、家庭科準備室の外に出てみれば、一  
気に振り返る呪力の気配の波。

うわあ……と軽く引きながらも、辺りを見渡して様子を見る。うん、呪霊はなんとか  
ジユナオたちが抑えてくれてるみたいだね。

つか、やつぱり道溝、わざと逃したのか。

確かに、呪霊を見てもらつた方が、状況を理解しやすくなる。今のような特殊な状況  
下なら、呪力を持つていなくても、呪霊を視認することができるしね。

でも、だからと言つてわざと逃して襲わせるのはおかしいだろうに。私や太歳星君、

オルタニキがいるから大丈夫だと思つたにしてもだ。

それとも、私が放置した腹癒せか？あーあ……ゲステラ今だけ使えないかな。

軽く舌打ちをしたくなりながらも、問題はないことを確認した私は、佐々木さんと井口さんの二人に顎を使つて行くぞと指示すれば、二人は恐る恐る廊下の外に出る。

それを見た私は、自分が先行する形で、廊下を進んで行く。一番手つ取り早いのは、オルタニキに二人を抱えてもらつて、この四階から飛び降りてもらうことだけど……。

……ダメだな。外には低級だけど、結構な量の呪霊がうろついてる。

暗くなつた外を、窓から眺めながら表情を歪める。一人だけならともかく、二人を抱えて移動させるとなると、オルタニキも二人も危ない。

低級呪霊つて個々はそこまで強くないけど、まとまつて襲つてくるとかなり厄介なんだよね。

となると、やつぱり中を歩く方が先決か。個々の呪霊の力は結構高いけど、低級に比べたらまとまりが薄い。

それに、中なら戦力が潤沢だ。校庭はアヴエンジャーダけだけけど、中にはジュナオも道満もいる。側には太歳星君とオルタニキもいる。

なら、選ぶ道はやつぱり……。

「道満。式神を通じてこつちを見てるのはわかってる。ジュナオと合流して、すぐに

こつちに来てもらえる？この場から離脱するには、二人の力も必要だ。セイとオルタニ  
キばかりに負担をかけるわけにもいかないしね。」

「？」

そうと決まれば、ジュナオと道満に合流するように声をかけようと、静かに虚空に声  
をかける。

背後から佐々木さんと井口さんの不思議な視線を感じたけど、気にしている暇は  
ない。

「マスター。」

「ようやく合流のお声がけですか、マスター。」

「うわ!?」

「……靈体化してショートカットして来たな？」

「物理的な干渉が少なくなるもので。」

「マスター。ここから脱出すると聞きましたが……」

「うん。この二人を護衛しながら移動するから合流してもらつたんだよ。」

「なるほど。」

「一般人の護衛ですか。まあ、確かに。それをしながらの移動であれば、戦力が多い方が  
最適ですなア。」

急に現れた道満たちに、佐々木さんたちがびっくりするが、気にすることなく、道満とジユナオの二騎に合流させた理由を説明すれば、納得したような様子を見せる。「では、早速撤退行動に移りましょう。」

「襲い来る呪いは、我々が悉く殲滅してくれましょうぞ。」

「妙な行動を取つたらすぐに戦すからな、リンボ。」

「るかるかにも、後ろの二人にも何かしたら、ワガハイたちが許さないからなー?」

「ンンッ恐ろしいことで。くわばらくわばら……」

ちつとも思つていなことを口にする道満に呆れながら、外に出るための移動を再開する。

呪力の流れから、なるべく少ない道を選べるし、問題はないと思うけど……なんか、少しだけ嫌な予感がするね。

## 25. ミッショントコンプリート……?

「邪魔だ!!」

「マスター、こちらへ!!」

「るかるか！ジユナオルの側にいるのだ！どけどけー!!」

杉沢第三高校の廊下を移動しながら、片つ端から呪霊を片付けていく。

二級より上の呪霊は私じや一撃で倒せないから、そこら辺はオルタニキと太歳星君に任せて、手にしているゲイ・ボルグで襲つてくる二級より下の呪霊を貫いた。

「す……す……！」

「いつたい、なんなんだこの子……。」

背後で庇つてゐる佐々木さんと井口さんの2人が、驚いたような声を上げる。

次々と現れる呪霊を、あまり年が変わらない女が悉く潰してゐるからだろう。ほとんどは私のサーヴァントが始ま末してゐるんだけど。

『ちゅーるちゅーるちゅーる』

そんなことを思つていたら、目の前に黒い柱のような姿を持つ目ん玉呪霊が姿を見せた。

これ、どう見てもアイツだよね……。恵君が玉犬に食わせたヤツ。  
でかいけど……呪力はそこまで高くない……? となると三級とかそこら辺なんだろうか?

なんて考えながら、私は自身の身体能力を一時的に強化する瞬間強化を自身へと使用する。

マスタースキルを自分自身に使うつてなんか変な感じではあるけど、こうすることでも一時的に能力を飛躍的に上がるのであれば、使用するに越したことはない。

まあ、これ使つたらしばらくクールタイム有するからしばらく使えなくなるんだけど

!!

内心で文句を言いながら、廊下の床を強く蹴り上げる。

瞬間強化をかけたことにより、普段よりもかなりのスピードが出たような気がするけど、今はそんなものどうでもいい。

むしろ、能力が上がつてることがよくわかるから、このわかりやすい能力の向上は助かるもんだ。

そんなことを思いながら、ちゅるちゅるうるさい呪霊との間合いを詰め、呪力がやけ

に集まっている場所目掛けてゲイ・ボルグを振るう。

【刺し穿つ死棘の槍】!!

勢いよく踏み込み、そのまま呪霊の核と心臓目掛けて呪力を込めながら突き出し、そのまま核と心臓を貫き穿つ。

普段より威力が上がっているそれは、普段は呪霊を即死させることができない低威力だが、一時的な強化により威力も効力も上がっていたのか、その呪霊の心臓と核を破壊した。

断末魔を挙げながら、消えていく黒柱目玉呪霊。それを確認した私は、手についていたゲイ・ボルグをクルクルと回して、その柄の部分を床に付ける。

「怪我はないね？」

「ひや…………ひやい…………。」

消滅した呪霊を確認した私は、すぐに背後にいる佐々木さんと井口さんに怪我の有無を問う。

2人はすぐに小さく頷いた。間抜けな声を漏らしながら。

「それならよし。急いで外に行こう。出てくる化け物は、全部私たちが倒すから。」

そんな2人を安心させるように小さく笑いながら声をかければ、2人は再び頷く。

それを確認した私は、すぐに前を向いて再び外に出るための道を走り抜ける。

前方はオルタニキと太歳星君が先行して行ってくれるから、問題はないだろう。

ジュナオも私の側にいてくれてるしね。いざと言う時は、ぶらぶらやしてもらいうか。

そんなことを考えながら、廊下を走つていると、不意に呪霊が近寄つてくる気配を感じ取る。

すかさず手にしていた朱槍を使うことで防御行動を行えば、同時に校舎の壁が破壊され、かなりの衝撃に襲われた。

「い、!?」

その衝撃はあまりにも重たく、一瞬手が痺れる。しかも、ガードはできただけど、与えられた衝撃により私の体は軽々と吹っ飛ばされ、そのまま校舎の壁に背中から激突した。

かなり痛い。こんな痛み初めて食らつたものだ。前の世界では暴力沙汰とはほぼ無縁だつたし、こんな馬鹿力を持つ存在に殴り飛ばされることもなかつたから。

「マスター!?」

「うわあ!? るかるかあ!?」

ジユナオと太歳星君から慌てたような声が発せられる。オルタニキからは舌打ちが聞こえた。

まあ、先行していた場所から後方から出て来たもんね。そりや驚くし舌打ちもするよな。

サーヴァントはマスターの剣であり盾。ダメージを与えられないように、同時に敵を

倒すように行動を起こす存在だから、攻撃がマスターに飛ばないよう守るのも役割だろうし。

「おい!!」

「大丈夫!？」

吹っ飛ばされた私の姿を見た佐々木さんと井口さんが、慌てて私に話しかけてくる。

背中を思い切り壁に打ちつけた以外は特に何もなかつたから、問題ないことを知らせるように手を挙げ、すぐに立ち上がる。

背中にジンとした痛みはあるけど、骨などがイツてる様子がない。咄嗟のガード、および咄嗟の防御力強化で被害を軽微にしたおかげだろう。

少しだけ安堵しながら、視線を前に向ける。そこにいたのは、ラグビー場にいた二級相当の呪霊だった。

「やつぱりお前がくるんかい……」

思わず苦笑いをこぼしてしまった。でも、原作通りの呪霊が来てくれたことはある意味助かるものだ。

二級相当の呪霊なら、私は無理でも、サーヴァントたちがなんとかできる。

「セイ。やる気は?」

「十分だぞー！」

「オーケイ。じゃあ、呪力を回す。頼んだよ、私のアルターエゴ!!」

「よーし、やるやるやるぞー!! るかるかをぶつ飛ばした恨みを倍返しなのだ!!」「ジユナオとオルタニキは先にそこの2人を連れて離脱。キミらの火力と機動力なら、ある程度呪霊を片付けたこの校舎内を突破することができるだろう? 場合によつては、セイに宝具を使わせるつもりだし、その影響範囲からは出て欲しいんだけど……」

「わかりました。移動する際も、呪霊は片つ端から片付けていきますね。」

「……お前のところの方が、退屈しなさそうなんだがな。まあいい。向こうじやよく使つてくれたが、こつちでのメインはそいつなんだろ? なら、その指示には従つてやる。」

目の前の二級相当の呪霊と向き合いながら、オルタニキとジユナオの2人に指示を出す。

指を私が保有している以上、呪霊はオルタニキたちと一緒にいる佐々木さんや井口さんに目を向けることはないだろうし、嫌な予感がある以上、早めに離脱をさせた方がいい。

私の指示を聞いたオルタ化コンビは、ジユナオが佐々木さんを横抱きにし、オルタニキが井口さんを儀担ぎにする形で持ち上げ、その場からさつさと離れていく。

一瞬、ジユナオに横抱きされた佐々木さんが小さい悲鳴……と言うより、照れも混

ざつたような短い悲鳴をあげたような気がしたけど、気のせいかな？

まあ、ジユナオってイケメンだもんね。神に近いジユナオじやなく、人に近い方のジユナオだから、感情表現も豊かだし、穏やかな好青年にしか見えないから。めちゃくちゃ馬鹿力を叩き出すバーサーカーだなんて言つても嘘でしょつてくらい優しいし。

そんな感想を脳裏に描きながらも、私は太歳星君と一緒に目の前の呪靈と向き直る。よく見ると太歳星君、おつきい方の太歳星君になつてるや。

「よし、立ち去つたな。んじゃ、さつさと終わらしますかね。セイ。呪力を回す。ステータスもスキルを使ってなるべくあげるから、ささつと済ませようか。」

「うん……わかつた。」

いつの間に変化したんだろうと思ひながら、呪力とスキルによるサポートを太歳星君へと施す。

一時的な能力の向上であれば、呪力が尽きるまで使えるのは本当ありがたい。

クールタイムがなければもつとマシなんだけど、流石にそれはバランスブレイカーすぎるのかな……。ただでさえサーヴァントとか言うチート級の存在を使役できるわけだし。

恨むはバランス調整か……と溜息を吐きながらも、太歳星君に攻撃力アップと三色コ

マンドアップを行い、太歳星君と呪霊の戦闘に巻き込まれないようにと後方へ下がった。

それを合図に太歳星君は床を蹴り上げ、目の前にいる二級相当呪霊へと飛びかかつてだろう……。

これを倒せば、よほどのことがない限りミツショーンコンプリート……だけど……なん

嫌な予感は消えそうにない。